
魔法世界の鋼の救世主 《メシア》（再）

花粉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界の鋼の救世主^{メシア}（再）

【Nコード】

N1737Q

【作者名】

花粉

【あらすじ】

再スタートです

スパロボ好きな大学生がスパロボ能力を持ってなぜかネギまの世界に転生

転生オリ主最強物で原作を派手にブレイクする予定なので苦手な方はお引き取りください。

不定期更新なので気の短い方もご遠慮ください。

プロローグ（前書き）

これから投稿していきます。

プロローグ

突然ですが皆さんは魂というものを信じていますか？

僕は先ほど強制的に信じさせられました。

何しろ目が覚めたら、自分がその魂だけの存在になっていたのです。

信じるも何ありません。

わが身(?)で体験しているのですから。

どうしてこうなってしまったのか。

…
…

僕の名前は山田次郎、どこにでもいるようなただのオタクな大学生だ。

オタクとは言っても、世間一般で言うところのそれとはかなり趣の異なるものだ。僕をより詳しく表現するならゲーオタ、あるいはロボオタと言うのが正しいだろう。何しろ、趣味として某コンパチヒーロー物なSRWを筆頭にかなり節操なく、ロボット物全般に手を出しているのだから。

ちなみに次郎という名前ではあるが一人っ子で、昔不思議に思ってた尋ねてみたら曾祖父の長次郎という名前からとったと言われた。

僕はこの前発売されたスパロボの新作を買い近所のゲームショップにむかっていた。モンハンみたいな爆発的な人気がある訳ではないので急ぐ必要もないが、一刻も早くプレイしたい気持ちで自然と早足になっている。

それは、目的の店まであと少しという所だった。僕は子どもにむかって暴走する乗用車を発見して、迷わず子どもを救出した。そこまでは良かったのだが、不運にも足が道端の側溝にはまってしまった。それでも、とりあえず子どもを安全そうな場所に避難させることには成功した。

その後の記憶は無く、自分は車の体当たりを食らったのだらうということまでしかわからない。まあ、記憶があったらあったで、脚が固定された状態で車に撥ねられるという恐怖体験の記憶を残すことになったと思うので助かったと思うことにする。死んでまで記憶だの何だの言ってる場合ではないと思うが別に気にしない。

……
…

…という訳で、僕は死んでしまったのだ。

今、目の前にいるのは神を自称する痛い老人だ。これまでも痛い人に会ったことはあるがこいつは別格だ。

「それで、お前さんは何をしているのかな。」

なんか話しかけてきやがった、できれば関わりたくないのに。

「いえ、自分が死んでしまったという事で、ちょっと現実逃避をしていただけですよ。」

「それについては申し訳なく思つとる。」

この自称神によると僕はあの時本来は死ぬ事はなかったのだが、何かの手違いで殺されてしまったらしい。なんと言うか、非常に腹

が立つ。まだOGシリーズも完結していない、むしろいいところで続いているし、なにより買いに行くはずだった新作が気になる。

「手違いで死なせてしまったお詫びにのう、生まれ変わりでかなり優遇してやることにしたのじゃ。」

「はあ？」

何をトチ狂ったことを言ってるんだ、このジジイは。

「まあ落ち着け、今説明するからの。」

神（自称）によると転生に際して付与されるポイントを使って来世での特典を得ることができらしい。このポイントは生前の行いに応じて与えられ、特に善行も悪行もしていない人間で100ポイント程度、善人は300ポイント、生前が聖人クラスともなれば1000ポイントになるという。ちなみにこのポイントは次回に引き継ぐことも可能で、僕の前世たちは長い間ほとんど最低限しか使わずにとって置いたので残高は2000ポイントにもなっていた。

聖人の二倍とか何回引き継いだらたまるんだ…。

次に特典の内容だが、性別の選択みたいな普通っぽいことから、ウホッ避けみたいな少しアレなものである効果は地味だが低ポイントな特典、超能力などのポイントは高いがファンタジーなのや、マイナス特典でポイント稼ぎというのもあった。

「さて、これであらかた説明はおわったの。最後にひとつ重要なことじゃが、お前さんは生前の世界あるいはその平行世界には転生で

きん。」

「なんですか？」

「規則なんでのう。こればかりはどうにもできんのじゃ。その代わりいろいろなサービスしてやるから、我慢してくれんかの。まずはじめにポイントに1000ほど追加しておく。」

これはひどい賄賂ですね。

聖人一人分ポイントサービスとかなに考えてんだ、このジジイ。

「いいんですか？聖人並みのポイントなんか追加して。」

「いいのじゃよ。この程度じゃお詫びにもならんからの。それともうひとつ、といたいたいところじゃが、その前にこれからお前さんには転生する世界を決めてもらう。」

「ひとつ質問があります。」

「なんじゃ？」

「創作物の世界かそれに極めて近い世界に行くことはできますか？」「できるぞ。まあ直接という訳ではなくその平行世界ということになるかの。」

な、なんだってーーーーー！！！！

YES！YES！！YES！！！！！！

いやつつたああーーーーー！！これで憧れのスパロボ参戦だああああ！！

……ん？この特典リストの端にある項目は何だろう、特殊特典？………これは！こいつは取るしかない！この『特定の創作物における特殊能力の全習得』を。だが、こいつはあまりにも高い：貯金とサービスをあわせてもまだ足りない。どうすればいい、どうすれば。これは、マイナス特典を使うしかない、足りないのは700ポイント程度だが人生を全うせずに死んだことを考えると自分自身

の分は期待できないだろう、ぱっと見たところ使えそうなのは……
300ポイントの転生先ランダムにさらに300ポイントの望む世界の除外、100ポイントの望まない性別を付ければいける。

「それでは転生先はランダム、望む世界の除外付きでお願いします……。」

「お前さん、そんなに血反吐を吐くような声を出してどうしたんじや。まあいい、それではランダムで決めるぞ。」

ガサゴソ

ってくじ引きかよっ!!

「ふむ、お前さんが転生するのは『魔法先生ネギま!』という創作物の世界じゃ。知っとるかの?」

「いえ……ほとんど知りません。」

終わった、スパロボでなくせめて他のロボットアニメの世界に行けたら良かったのに……。ネギまなんて全然知らねえよ。まさか望む世界の除外はそんなに広い範囲で影響を受けるとも言うのか。

「なんというか、その、ご愁傷様じゃったの。それじゃあ、転生先も決まったところでもうひとつのサービスについてせつめいするぞ。まあ、説明というほどのものでもないが、簡単に言うとは記憶の引継ぎとお前さんの好きな特典をなんでもひとつただでやろう。」

「……なんだと?! それじゃあスパロボ世界を諦めたのは無駄なことだったのか。チクショーッ!! 今のはやっぱ無しにできないのかああああー!?!?!?!」

「残念じゃが、規則で一度転生先を決めたら訂正はできないのじゃ。特に、お前さんはポイント稼ぎで使った訳じゃからの。」

「ウツダシノウ。」

.....ふう、この際過ぎてしまったことを気にしても仕方ない、気を取り直して特典を決めよう。まずはポイントの確認からだな。

.....

.....

...

引継ぎ分	2000
サービス	1000
自分の分	500
マイナス特典による加算	600
合計	4100

うわぁ、聖人4人分だぁ。すごいなぁ。OTL

まずこの事態の原因はサービスで取るとして、アレをこうして...
たしか魔法があったはずだな。それに、こんなのも面白そうだな。
...あぁ、もういつそ女になるのもいいかもしれないな。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

...

「そろそろ決まったかの？」

「決まったよー。」

「態度が最初と違うのう。」

「いいじゃないか、そんなこと。」

「ま、それもそうじゃな、それじゃあ聞かせてもらおうかの。」

予算4100

特定の創作物における特殊能力の全習得 サービス

記憶の引継ぎ サービス

不老不死神族種（上位） 2000

魔力無限 1000

身体能力強化MAX（種族依存） 500

体術才能増加 500ポイント分

性別女 20

合計 4020

「上位神族種とはまたものすごい特典を取ったの。神格はどうするか？」

「誰かさんのせいで余ったポイント使っただけだよ。神格は大地でよろしく。」

「何のことかの？了解じゃ。最後に、確認するが本当にこれで良いんじゃない？」

「誤魔化しやがった、コノヤロウ！OKだ。」

「それでは、お前さんの二度目の人生に幸あれ。」

その言葉と共に視界が白い光に満たされて、僕はそのまま意識を失った。

第一話 新たな生

目が覚めるとそこは見知らぬ森で、傍らにはあきらかに不自然な本が落ちていた。

本を手にとってみると、表紙に『転生についてのメモ』というふう見ても殴り書きされたような文字が書かれていた。その内容は、今は原作（確か現代だったはず）の約700年前であり、ここはヨローロッパの、今で言うところのフランスの辺りであることと、力の訓練のために原作のかなり前の時代に転生させたこと、能力（その他もろもろ）の使い方等だった。

「あのジジイも氣を使うことがあるのか。昔過ぎてあまりにも微妙な使い方だが、一応感謝しておこう。……何はともあれ、まずは現状確認から始めよう。」

そう、自分はスパロボのトンデモ能力の数々を習得しているはずなのだ。

まずは精神コマンドから試してみよう。

ここにちょうど同じ位の太さの木が二本ある、まずはそのまま殴る。

ドゴンツ：メキメキツ：ズウン

うん、へし折れた、適当に殴っただけなのに。

身体強化済み神族TUEEEEE。

……ハッ、こんなことで驚いてる場合じゃない、精神コマンドを試さなくては。メモを見てみよう、ええと、なになに、ほう、こうすればいいのか。よし、試してみよう。

僕は『熱血』を使うイメージを念じる。すると頭の中であの効果音が響いた。

「どうやら成功したみたいだな。さっそく試してみよう。」

.....

結論から言おう。さっきと同じ力で殴ったにもかかわらず、殴った部分が消し飛んだ。反対側に破片が散乱しているのを見ると、たぶん一瞬で粉碎して吹き飛んだのだろう。でたらめな効果というか、なんと言うべきか、なんて常識はずれな威力なんだろうか。

「適当な攻撃の『熱血』でこれだと、全力の『魂』じゃ宇宙から目視できるレベルで地形が変わりそうだなあ…。」

本当に何なんだろう、この異常な効果はどこまでが適用されるんだろうか。たぶん全ての『攻撃』なんだろうなあ。アハハハハハハハ……、ハア、しばらくの間思考放棄して現実逃避したい気分だよ、パトラッシュ。

.....

気を取り直して能力の確認を続けた結果、習得できていた特殊能力はOGのものであることがわかった。

まあ、全スパロボの特殊能力だと、NTで強化人間でSEED持ちで勇者で超能力者で炎持ちで聖戦士でガンダムファイターで……

e t c なカオスモンスターの誕生だから仕方ない。それでも十分におかしい性能だし。あとは意識することで S P の確認ができ、最大 S P が 154 であることと、それにより S P 回復は 1 分 10 % の仕様であることがわかった。

それから神族としての力については、あの本によると大地に関する全てと、慣れればかなりの程度の生命の創造が可能であるということだった。これらの能力については拠点を構えてからじっくり取り組むことにした。

また、神族全てに共通する能力として姿を自由自在に変える能力と、他者に祝福を与えてその力を高める能力があるという。こちらの姿を変える能力については不老不死の特性上人と関わるならば必須能力になるので、最優先で習得するべきだろう。

そして最後に自分の現在の姿についてだが、大地の神であるためか髪は茶色で腰まであり、前世と視線の高さがあまり変わっていないことから身長は 170 c m 程だと思う。服は白のゆったりしたローブを着ている。胸部がなだらかだったのは大地の女神としてはどうかと思うが気にしないでおこう。

「さて、現状確認も済んだことだし、名前でも考えよう。」

一応は女になったわけで、次郎では問題があるだろう。

「どうしようかな、あんまり仰々しいの考えるのも面倒だし。」

あまり深く考えてもいい考えが浮かぶわけでもないのですが、完全に語感のみで『ディア』に決める。某悪魔召喚 R P G の初級回復魔法みたいだが気にしない。

「名前も決めたから、あとはどこかに拠点でも作ってスキルアップにでも努めよう。」

ここに住み始めてからもう50年以上になる。

だいたい10年を過ぎた辺りでいくら一人だからと言っても、いつまでも一人称が『僕』なのは問題だと考えた。それから散々頭をひねった挙句結局は無難な『私』に切り替えて、その影響もあるのだろうか精神も徐々に肉体に引かれているのか女性的になりつつある。しかし口調

心配していた食糧問題は、食事を必ずしも必要としないうえ空腹も感じない肉体のおかげでかなり助かった。

最重要課題としていた変身能力は自分の外見年齢を変化させることができる程度になった段階で当面の目標は達成したとして優先項目から外した。

その結果、その他の訓練に時間を割り振ることができるようになった。

神の力では、大地に意識を集中することで地殻レーダーのようなことができる様になった他、鍊金(?)も、最初はDQゴーレムしか作れなかったが、今では通常型のゲシュペンスト(元祖のブラツクカラー)を作れるようになった。ついでにゲシュペンストで全身鎧風のパワードスーツっぽい防具(?)も製造できた、これはゲシュペンスト自体を作れる様になってからのチャレンジなので割りと簡単に作れた。さらに能力自体になれたおかげか、生命創造も単純な命令に従わせるだけならできるようになったため、DQゴーレムモデルの召喚術モドキを試行中である。

魔法に関しては情報が全く入らないし、現状ではこれからその見込みが無いために現在は一時凍結中だ。

そして、一番力を入れて訓練していたSRW能力では、インファイトによる高速格闘(どうやら移動力は移動速度とされるらしい)、

ガンファイトによる長距離射撃などの成果を挙げている。特に念動力は、念と魔力を組み合わせることで擬似的な念動フィールドを形成することができ、発見してからは格段に速く研究が進んでいる。R-1の武装の再現は威力・見た目の両面とも十分に満足できるレベルに到達しており、また、ストライクシールドも魔力の補助つきならある程度は自由に物を動かせるようになったので、このまま訓練を続ければ再現も近いだろう。今はこれらの応用もいくつかアイデアが浮かんでいるので、そのうち実験しようと思う。おそらく自分の念動力レベルは強念どころではなくサイコドライバーの域にまで到達しているはずなので、最終的には魔力を用いなくてもできるようになるだろう。

姿を変えることができるようになってからは町に下りて人々との交流を楽しんでいる。

中でもマクダウェルさん一家とは特に親しい付き合いをしている。初めは私が売りに来た山で取ってきた物がたまたま必要で大量に買ってくれたのをきっかけに、徐々に付き合いが増えて、今では家に招待してくれる事もあるくらいに親しい。

町長でもある一家の大黒柱、エドワードさんは非常に豪快な性格で町長と言うよりは親分と言ったほうが合っている人で、奥さんのメリーベルさんはとても綺麗でまさに淑女と言った感じを受ける女性だ。娘のエヴァンジェリンちゃんはまだ5歳で町の外の人間は珍しいのか、私が来ると誰よりも早くやってきては持ってきた物を興味深げに眺めている。ちなみに私のことはディアお姉ちゃんと呼んでいる。

ある日、珍しく町に長期滞在することになって、私は毎日の訓練を欠かすわけにはいかないとまだ夜も明けきらないころに、町外れの森の奥にある開けた場所で訓練をしていた。

いつも通りの訓練が、ちょうどパスワードスーツの改良に差し掛かった頃にヒトの気配を感じた。

「誰だ？」

返答は無い。

「出てこないと、攻撃する。」

脅しをかけるとようやく出てきた。

その姿は：

「ってエヴァちゃんじゃないか。こんな森の奥に一体どうして？」

「おトイレに行こうと思って起きたら、窓からディアお姉ちゃんが森に行くのが見えたから。」

「気になってついて来てしまったと？」

「…うん。」

「そうか、この事はみんなには秘密にしておいてもらえるかな？」

「秘密？」

「そう、二人だけの秘密だ。」

「うん！秘密、秘密！」

もういつそ、エヴァちゃんにも鎧パスワードスーツを作ってあげて、何かあったときのための保険にでもしようか。呼び出しも可能にできるから、何があるうと少なくとも命だけは守ることはできるだろう。

「そうだ、エヴァちゃん。約束の印にプレゼントをあげよう、次に来る時にお店に来てくれるかな。」

「プレゼントってなあに？」

「それは今度のお楽しみさ。今日はもう帰りなさい、きつとみんな

心配しているよ。」

「うん。それじゃあバイバイ！」

さて、これからプレゼントする鎧を作ろう。どんなのにしようか、最低限全身をカバーするタイプにする必要があるが、まあいつものSRWタイプでいいだろう。それに、肌身離さず身につけられるアクセサリーを目印にして展開させる方法にすればプレゼントにもぴったりだ。

展開される鎧は生存性を重視して攻撃力度外視の武装なし、装甲・機動性を極力高くするようにする。デザインは、せっかくだからエヴァちゃんに似合うようなのを選ぶか。

……

……

…

数日後 昼前

そろそろエヴァちゃんが来る頃だろう。

プレゼント自体は普段から身につけられるように、目立たないデザインの銀のペンダントにした。

ちなみに、ペンダント自体も全力で作成してあるので後数世紀先までの兵器では傷一つ付かないほどの強度になっている。

「ディアお姉ちゃん！」

「来たね、エヴァちゃん。」

「うんっ！プレゼントってなあに？」

「このペンダントさ。」

キーとなるペンダントをエヴァちゃんの首にかけてあげる。

「うわー、きれい！ありがとう、ディアお姉ちゃん！」

「ふふふ、どういたしまして。それからもう一つ、困ったときのおまじない、『コール・シトリー』。危ないときにこのペンダントを握って唱えてごらん。」

「ふーん。」

「これは私たちだけの秘密、約束だよ。」

「うん！」

まあ、何も無いのが一番だけど、用心するに越したことは無いからね。

エヴァちゃんも喜んでくれたし、これが普通のプレゼントとして終わることを祈ってはいるが、今この国は戦争中で、ここはそれほどでもないが他のところはかなり荒れているから、どうしても、ね。

第一話 新たなる生（後書き）

たぶんほとんど出番は無いだろうが一応解説

シトリー

主にメイシスの配下に居る女性修羅兵の乗る烈級修羅神
外見はぶっちゃけ立ってる猫又

回避能力が異常に高いので群れてこられるとうっとおしくて泣けてくる

たぶんOG最強の雑魚

第二話 立ち込める暗雲（前編）

あれから5年ほどが経過したが、この辺りは特に戦乱に巻き込まれることも無く平穏な日々が続いていた。

あえて何かを挙げるなら、最近引越して来た周りとの付き合いを避ける男。

この男の家にはこのところ次々と何かの荷物が運び込まれているらしい。その内容も小型から大型までの家畜や、見たことも無い薬品など家に対して見合わない非常に不審なブツが大半である。荷物の運び込みの関係で、人の出入りも多く男の家の周囲は常に人通りが絶えないのだがそれらの人間もまたどこか普通でない空気をまとっている。

今日はエヴァちゃんの誕生日である。エヴァちゃんもう10歳になるので、今年は特別なプレゼントを用意している。

お誕生日会をするそうで、前日から町に滞在しているも良かったのだが、朝一番に家に行ってびっくりさせてやろうと考え、こんな朝早く、と言うよりも夜中に山道を歩いている。

なぜか急に嫌な予感がして、木の上に登って町の方を見ると空が赤く染まっていた。

火事か？ いや、それにしても火が大きすぎる。

それにさっきから嫌な予感が止まらない、これは災害ではなく、もっと吐き気のするような悪意や狂気の類だ。

見たところ最も火の勢いが強いところはマクダウェル邸のある、町の北側だった、みんな無事ならいいのだが。

私は『迅速』を使い、町へ向かう山道を駆けていく。

私が町に辿り着いた時にはそこに地獄絵図が広がっていた。助けを求めて彷徨う子ども、もう決して動かないであろう子を抱えてうずくまる母親、元の姿さえわからないほど全身が焼け爛れて息絶えている人、人々の悲鳴と断末魔の叫びが充満する光景がそこにあった。

それらを見捨てるようにマクダウェル邸へ向かう。ただひたすらに、彼らの無事を祈りながら。

S i d e エヴァンジェリン

10歳の誕生日の前日、わたしはいつも通りに眠りについた。

明日を楽しみにして。

でも、次に目が覚めたときには何もかもがコワレテイタ。

目が覚めたのは苦痛からだった。

そこは自分のベッドの上ではなく、見覚えの無い部屋の中だった。隣の部屋では、最近になってこの町に來た男が興奮した様子でもう一人の男と何事か話している。

わたしが目覚めたのに気付くと、狂気に満ちた表情を浮かべて近づいてくる。

わたしは怖くなって窓を破って逃げ出した。

町は地獄になっていた。

あの男たちの仕業だろうか、辺りは炎に包まれて、そこら中に濃厚な死の匂いが充満していた。

あの男から逃げ切ろうと、自分の家に向かって走った。

途中の道にも人だったモノが転々と転がっていた。

燃え盛る炎をぐり抜けて、やっとの思いで家に辿り着いた。

しかし、そこに待っていたのは、両親の姿ではなく、ついさっきまで両親だったモノとそれを踏みにじっている武器を持った男たちだった。

「なんだ、あのガキじゃねえか。まったく、逃がしてんじゃねえよ。」
「まったく。俺らの仕事を増やしてんじゃねえっての。」

「ちげえねえ、こりゃあ後で文句の一つでも言ってやらねえとなあ。」

「それだけじゃねえ、酒の一杯でも奢ってもらわねえと割りにあわねえ。」

「それもそうだ。」

「」「」「つははははははははは。」「」「」

「ま、そういう訳だ。おとなしくしていれば痛いことはしないぜ、お嬢ちゃん。」

男たちの一人が近寄ってくる。

嫌だ、ここで捕まったらまたあの男のところに連れて行かれる。

嫌だ、あんな奴のところにいたくない。

無意識に胸の前で握り締めていた手の中にあるもの、それが何なのか、それとともに教わったおまじない、そして、それをくれた人今日の誕生日に来てくれるのを一番楽しみにしていた人、ディアお姉ちゃんの顔が思い出される。

教わったおまじないを、ペンダントを握り締めたまま、そっと呟く様に唱える。

「『こーる・しとりー』」

瞬間、わたしは光に包まれた。

優しい光に、温もりを感じて、わたしはそのまま意識を失った。

Side out

永遠にも思える時間をかけて辿り着いたマクダウェル邸の前には、スーツの展開中だろう光に包まれるエヴァちゃんと、彼女を包囲している武装集団の姿があった。

スーツの展開が完了して、緊張の糸が切れたのか倒れたエヴァちゃん。

すぐに駆け寄ってそのまま炎の届かない広場に彼女を連れて行く。

「呼吸は…安定している、特に目立った怪我も無いようだな。」

無粋な武装集団が空気も読まずに話しかけてくる。

「おい、てめえ何もんだ。さっきの動き、ただもんじゃねえな。」

「この惨状はお前らの仕業か？」

「質問に質問で返すんじゃないって親に教わらなかったのか？それに、これが俺らの仕業だったからって何だって言うんだよ。」

「そうか、その言葉は肯定と取ろう。しかも、エヴァちゃんがこれを展開しているということは、お前らは敵だということは間違いないな。」

周囲の地面から障壁を生成してエヴァちゃんの安全を確保する。

「数は5人、なら、これで。『コール・ゲシュペンスト』！」

私の怒りに呼応したのか光も無く瞬時に展開されるスーツ。

炎に赤く照らされた漆黒の鎧、見る者によっては悪魔にも見える、かつて犯した大罪を贖うために数多の世界を彷徨う男を象徴する機体が、そこに在った。

「私に出会った不幸を呪うがいい。行くぞっ！究極！ゲシュペンストッ！キーーーーーック！！」

「なっ、速っ！？」

ガッ……ドオン

「まず一人。」

インファイトと『迅速』の併用による超高速での突撃から、跳び蹴りを放つ。

あまりの威力に吹き飛んだ男はるか遠くの壁に衝突してその命を刈り取られた。

「ジョンっ!! てめえ、やりやがったな!」

「隙だらけだ。くらえっ、ジェットマグナム!」

念動フィールドを纏った左ストレートを叩き込み、また一人沈める。

「二人。」

「くそっ、またやられた。」

素手でも問題は無い、だが、これではまだ生ぬるい。
この町を破壊し、マクダウェル家を壊滅させた奴らにこの程度の恐怖では足りない。

「来たれ、獅子王の太刀よ。」

足元の地面からシシオウブレードを創り出す。

「さっきから一体てめえはなんなんだよ!」

「チエエエエエストオオオoooooooo!」

『覚醒』により行動速度を倍化させて、二人をそれぞれ上下に両断する。

「これで四人。」

「こんなの聞いてねえよ、こんな奴相手にするなんて、どんな大金積まれたって割に合うもんじゃねえぞ。」

残りはあと一人、こいつの話からするとこいつらは主犯ではないのだろう。

ならば、その主犯を探し出し、報いを受けてもらう。

「何だよっ、お前っ。殺るなら早く殺れよっ！」

「お前には、少し聞きたいことがある。お前たちを雇ったのは誰だ？」

男に『威圧』をかけて精神的に切り崩す。

本来の用途ではないが、このように使うこともできるらしい。

「こっ、この町の、外れに、住んでる、お、男だ。俺たちは、あいつにこの屋敷を襲うことを依頼されたんだ。嘘は、言ってねえ。」

「そうか。」

「うぐあ！」

最後に残った男も切り捨てる。

「あの男か、何かやっているとは思っていたが、こんな碌でも無い事だとはな。」

奴にはこの地獄を生み出した責任を取ってもらう。

だが、その前にまず、気絶したエヴァちゃんを安全な場所に避難させないといけないな。

「ふふふ…、逃げられるなどとは、思うなよ。」

さて、まずはエヴァちゃんの避難からだ。
私はエヴァちゃんを抱えて町の外への移動を開始した。

第三話 立ち込める暗雲（後編）

ここだな、あの男の家は。

気配からすると中にいるのは二人だけだろう。

逃げ出されては面倒だ。精神コマンドを利用して隠密に潜入することしよう。

『覚醒』、『迅速』、そして今回最も重要となる『隠れ身』を使用する。これでしばらくの間奴らは私に気付く事もできないだろう。

中に入ると大柄と小柄の、ちぐはぐな組み合わせの二人の男が何か話をしていた。

「真祖の子には逃げられてしまったけど、大丈夫なのかい、フィリップ君。」

「う、うん、大丈夫だよヨーゼフ君。アレの行くだろうところには傭兵を置いてあるからね。」

「そう、でもいくら子供とは言っても真祖だよ。」

「大丈夫だよ、まだ成り立てだからね。今はまだ普通の子供と何も変わらないよ。」

「そうか、なら安心だね。」

真祖？どうやらエヴァちゃんのことを指しているようだが、それが一体何なのかはわからない。

今の段階ではこいつらの目的はわからないが、エヴァちゃんに手を出しているのは間違いないだろう。

つまり、こいつらの運命は決定している。

目的から何から洗いざらい話してもらってからその命をもってこの町への償いとしてもらう。

『隠れ身』の効果を破棄して二人の前に出て行く。

「その二人、お前らの仕出かした事、知っている事、その全てを吐いて貰おうか。」

「誰だい、君は？この家には僕たち二人しか居なかった筈だけどね、フィリップ君。」

「う、うん、そうだねヨーゼフ君。それに、この家の周りは静かだから研究者だったとは言っても、魔法で周囲の警戒をしていた僕らが気配も感じないのはおかしいよね。」

奴らはどうやら魔法使いらしいが、気配すら感じなかった侵入者を前にして驚きを隠しきれないようだ。

「話を聞くのに二人も要らないだろう？」

さあ、死にたいのはどちらだ？」

「ふざけたことを言うね、そうだろうフィリップ君。」

「う、うん、そうだねヨーゼフ君。見せてやろう、僕らの持つ圧倒的な力、魔法の力を！」

「魔法の射手・連弾」

「闇の199矢！」 「雷の199矢！」

二人が同時に別々の属性で、大量の弾を放ってくる。

「まだだよ、フィリップ君！」

「うん、ヨーゼフ君！」

「来たれ氷精闇の精、闇を従え吹雪け常夜の氷雪！」

「来れ雷精風の精、雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！」

「闇の吹雪！！！」 「雷の暴風！！！」

なるほど、言うだけのことはあるようだ。

生半可な威力では傷もつかない装甲が小破してしまった。

「それなりには出来る様だが、相手が悪かったな。」

「なぜだっ！なぜまだ生きているううううっ！！！」

「僕たちの最大魔法！直撃すれば爵位持ちの悪魔だろうとただでは済まない威力だというのに！！！」

「選ばないなら、こちらで勝手に決めるぞ。」

大柄な男に『直撃』を使って、シシオウブレードで斬りかかる。

「ぬうつ、障壁が効かないっ！？」

頼みのバリアを無効化された割には、それほど狼狽した様子もなく上手く避けた様だ。

「だがっ、これで、終わりだっ！」

「ッ！！又ウオオオオオオオ！！！！！！」

即座に追撃をかけて一刀の下に両断する。

「ヨーゼフ君っ！！キサマっよくもヨーゼフ君をつ！」

「遅いっ！！」

激昂した小柄な男の四肢を斬り裂いて無力化する。

「こんな事をして、何をするつもりだっ！」

「最初に言っただけだ、全てを話してもらう、と。」

男に『戦慄』をかける。

さらに『威圧』、『威圧』、『威圧』、『威圧』。

「ヒィっ、この異様な重圧は何だっ！相手はただの小娘のはずなのにいつ、これじゃあまるで餓えた猛獣の群れの中に居るようじゃないかあっ！ああ、もう駄目だっ！何もかもお終いだっ！！くそっ、こんなことになるんだったら奴らの言うことなんて聞くんじゃなかった！」

どうやら完全に心が折れたようで、少々気になる事を喚いている。

「さて、まずはお前たちのした事、その全てを話して貰う。」

「うっ、そ、それはっ。」

まだ足りなかったか。

『威圧』。

「ひっ、わ、わかった、話す、話すからやめてくれ！」

「まず一つ、エヴァちゃんに何をした？」

「え、エヴァちゃん？あ、ああ、あの子供か。あの子には真祖の吸血鬼になってもらったんだ。」

なるほど、真祖というのは吸血鬼のことか。

「真祖とは？」

「魔術の秘奥によって我が身を吸血鬼に咬まれる事無く吸血鬼に変異させた者を指すのだけど、今回の場合はさらに吸血鬼の弱点を克服した、吸血鬼を超越した吸血鬼を目指しているのさ。今回の実験では不完全な結果に終わったけどね。」

「それで、何をするつもりだった？」

「き、決まっているだろう、究極の生命の研究のためだよ。」

そんなことのために、エヴァちゃんを人ならざるものに変貌させ、町の人々を殺したというのか！

「なぜ、町に火を放った？」

「真祖を生み出すために多くの人間の怨嗟の叫びが必要だったからさ。この町は人も多かったし、平和ボケしていたからね。おかげで上質の負の念を得られたよ。」

「……次だ、奴らとは誰のことで、お前たちとは何の関わりがあったのか答えろ。」

「うっ、僕たちも奴らのことはよくわからないんだ、研究をしていた僕たちのところに突然やってきて、その内容を実践することと引

き換えに真祖の吸血鬼を生み出す方法についての資料を渡してきたんだ。本当だよっ、信じてくれよっ。」

こいつらも黒幕ではなく、しかも正体もわからない、か。

「そいつらについて分かる事、細かいことまで全部話して貰おうか。」

「わかることって言ったって……、そうだっ、奴ら魔法世界の話をしていたんだ。だからもしかしたら魔法世界に行けば手がかりがあるかもしれない。」

魔法世界？

「魔法世界とは？」

「この世界とは位相を異にして存在する世界さ。」

「どこから、どのようにして行ける？」

「ここから一番近い入り口はイギリスのウェールズにある。入り口は一週間から一ヶ月に一度開くんだ。」

位相を異にして存在する世界か。

その程度の隔たりならば念動力の訓練次第では入り口を無視して入ることができるだろう。

「これらの言葉に嘘偽りは無いな？」

「無いっ、無いよっ！」

「なら、お前はもう用済みだ。」

「なっ、何をす——」

ザシュッ

これからどうしようか、何をするにしてもエヴァちゃんを一人にするわけにはいかないだろう。

とりあえずはエヴァちゃんを家に運んで、それから私も休もう、精神コマンドを多用したせいか精神的に疲労しているようだ。

さあ、もう…家に…帰ろう…。

第三話 立ち込める暗雲（後編）（後書き）

書き溜め分はこれで終わりです

時間かけた割には少ないです

今日中にもう一話投稿できるよう現在鋭意執筆中です

第四話 決意

「んん……………」

ここは…、どうやら自宅のようだ。

昨日(?) はあのための記憶は無いが、ここが自宅の床に敷かれた布団の上で、あっちのベッドの上でエヴァちゃんが静かな寝息を立てていることからやるべきことはしっかりやっていたと考えて良いだろう。

「っ！！！」

そこまで考えると、昨日自分がした事、相手の断末魔の声や恐怖に引きつった表情、そして自らの手でヒトの命を奪った感触がよみがえってきて、私はその場で、吐いた。

私の精神はあくまでも争いを知らない日本の大学生のものが基礎で、それが怒りに駆られての事とは言え、人を殺したのだ。どうもしないほうがどうかしている。

幸いにも大きな音は立てなかったので、エヴァちゃんが起きる事は無かった。

私は自分の出したモノの始末をして、外に出て、また吐いた。

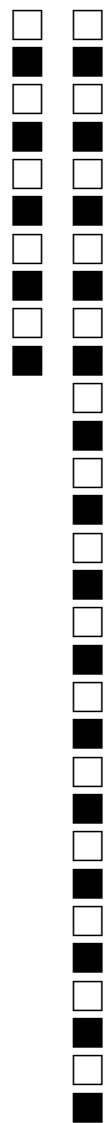
散々吐いて、出るものが無くなってもまだ吐いて小一時間ほど吐

き続けて、ようやく落ち着いてから改めて今の自分の姿を省みると酷い物だった。

髪は乱れ、服も口元から吐瀉物で汚れていた。

「これではエヴァちゃんに心配されてしまうな。」

自嘲気味に独り言を呟いて、この酷い格好をどうにかする為に近くにある泉に向かった。



身だしなみを整えてから、森で食料を調達して家に帰るとちょうどエヴァちゃんが起きたところだった。

「やあ、エヴァちゃん、気分はどうかな。」

「あ、ディアお姉ちゃん。ここは？」

「ここは私の家さ。何も無い粗末な山小屋だけどね。」

「わたしは、昨日起きたら知らないところに居て、そこから逃げたおうちに行ったらお父さんもお母さんも…あ、あああ！」

まずいつ、昨日のことを思い出して錯乱している。

「エヴァちゃん大丈夫だよ！もう悪いヒトは居ない、みんなやつけたよ！」

エヴァちゃんを抱きしめて言葉をかける。

「ぐすっ、ほんとうに？」

「ああ、本当さ。でも町は…、完全に焼け落ちてしまって、生き残

った人もどこかへ行ってしまったからもう駄目かもしれない。」

「そう、なの。」

「それと、エヴァちゃんのお父さんとお母さんは私が来たときには、もう…。」

「いいの、ディアお姉ちゃんのせいじゃないから。」

一応落ち着いているように見えるけど、自分の周りに居る全ての人を一度に失っているのだから、高々10歳の女の子が痛手を受けていないはずが無いだろう。

それに吸血鬼と化した身体のこともある、今はまだ、この子を一人にすることはできない。

「エヴァちゃん、これからどうしようか？」

「え？」

「エヴァちゃんの事さ。」

吸血鬼化のこともあるし、できれば目の届くところに居てほしい。体の異変もそのうちに気付くだろうから、事情を知っている私からできるだけ早くに説明する必要があるだろう。

「エヴァちゃんが良ければなんだけど、私と一緒にここで暮らさないかな？」

「いいの？」

「うん、まあ、もともと一人で住むには広い家だからね。それに、最近ちよっと寂しくなってきたね。エヴァちゃんだったら大歓迎さ。」

「…ありがとう、ディアお姉ちゃん。」

さて、これでエヴァちゃんとの同居が決定したわけだ。
そうなった以上吸血鬼化のことを話すのは早いに越したことは無いんだけど、気が重い。



エヴァちゃんと暮らし始めてもう一週間になる。

自分自身情け無いが、吸血鬼化のことについてはいまだ言えないで居る。

幸い奴らが不完全な克服と言っていた弱点はどうやら致命的なものではなく、陽光下ではその力を著しく制限されるといった類のものだったらしい。

「ディアお姉ちゃんーん！」

「なに？ エヴァちゃん。」

「実は、お願いがあるの。わたしに戦い方を教えて欲しいの。」
「いきなりどうしたの？」

「この前襲われたときに思ったの、こんなにも簡単に人が死んじゃうのなら、わたしはそれを守る人になりたいって。だから、わたしは強くなりたいの。」

「後悔は、しないね？」

「うん！」

この一週間でエヴァちゃんなりに考えた結論なのだろう、彼女の決意は本物だ。

ならば、私も逃げてはいられない。

「分かった、でも、その前に一つ話さなければいけない事がある。」

エヴァちゃんの身体は既に人間ではないんだ。」

「：続きを、聞かせて。」

「驚かないんだね。」

「あの時目が覚めた場所を考えると何も無かったとは思えないし、それに日の光に当たっていると変な感じがするから、何となく、気付いてはいたんだ。」

「エヴァちゃん…。」

「ディアお姉ちゃんがわたしがショックを受けないように今まで黙っててくれたのも分かっていたの。」

まったく、こんな小さな子に氣遣われるなんてね。

「それじゃあ、全部話すよ。」

「うん。」

それから私はエヴァちゃんの真祖の吸血鬼にされたこと、真祖とは何か、実行犯は何者かに唆されて実行に移っていたこと、これまでの経過からおそらくは吸血鬼一般の弱点は直接的には致命的では無いこと、修練によってそれも克服できる可能性が高いことなどを全て話した。

「これが、私がエヴァちゃんの身体に起きた異変について分かる全て。」

「吸血鬼……。」

ショックは大きいだろうな、何しろ人間で無くなっただけでなく、

きわめて異端な存在になってしまった訳だから。

「さて、エヴァちゃんのことについて話したら、今度はわたしのこ
とについてだ。」

「ディアお姉ちゃんのこと？」

「私ばかりエヴァちゃんのことについて知っているのは不公平だろ
う？」

「……………」

「信じられないかもしれないが、これから話すことは全てが本当の
ことだ。」

私は自身のことを神であるという点についてはぼかしながらも、
不老不死の身であること、大地を操る力があること、姿をある程度
は変化させることができることなど、自分自身の力についてを中心
に話した。

「そういうことだからね、別にエヴァちゃんが世界から排斥されな
きゃいけないような存在では無いと思うんだよ。」

「ディアお姉ちゃん…。」

「まあ、さっき話したような訳で、私が教えることができそうな内
容は限られているけど、それでもいいかな？」

「うん、大丈夫。」

こうして私によるエヴァちゃんの特訓（マ改造とも言う）が始ま
ることになった。

以下ダイジェストでお送りします。

1年目―基礎訓練

「それではエヴァちゃん、まずは自分の身を守るところから始めよう。」

「どうして？」

「自分の身も守れないような人間が他人を守れると思うかい？」
「守れる気がしないね。」

2年目―スーツ着用での訓練

「基礎も十分身についてきたから、今度からはパワードスーツを着けての訓練を入れてみよう。」

「？」

「前にあげたペンダントを出して『おまじない』を唱えてみて。」
「うん、『こーる・しとりー』。」

「！！」

「これがスーツさ。まあ、現状では武装は何も付けてないから純粋に身体強化のみなんだけどね。」

5年目―最近何となく姉妹っぽい関係
になってきた気がする

「行くよ、お姉ちゃん！！」

「いい攻撃だ、だがっ。」

ドガッ

「まだ攻撃に意識を遣り過ぎて防御が疎かになっているね。」

「まだっ、もう一度行くよっ！！！」

10年目―武装強化

「さて、この『シトリー』には武装が付いていない、だからこのたび改造を施してみた。」

「具体的には何を？」

「まず、腕部には展開・収納が自在なクローを付けた、そして尻尾からエネルギー弾を放てるトリッキーな武装を追加した、以上！」

「少ない？」

「仕方ないじゃないか、こいつは元々エヴァの身を守るためだけに作ったせいで拡張性がほとんど無かったんだから。」

「次は新しく作って、ねっ、お願いっ！」

「そいつがエヴァの能力についてこれなくなったらね。」

エヴァの成長速度は速い、シトリーもそういつまでも使っていないだろう。

そのときにはもう独り立ちできるくらいにはなっているだろうし、とっておきの逸品スーツをプレゼントしよう。

そうしたら、私は魔法世界へと乗り込む、そのときにどうするかはエヴァ自身に任せるが、できれば復讐の道は歩いて欲しくないものだ。

第四話 決意（後書き）

明日の午前中にはもう一話いける気がする。

第五話 新たなる力、そして（前書き）

目が覚めたら昼過ぎだったんだぜ

午前中に投稿するとか言っておいて、申し訳ありませんでした

今回はまとめると微妙な長さになりそうだったので少し短いです

第五話 新たな力、そして

修行20年目—なんとかエヴァが独り立ちできそうです（ついでになぜか口調が変化している件について）

「てやあっ！！！」

「くうっ、速さは十分だがパワーが足りないぞっ！」

「まだまだあ！！！！」

「ほう、これはっ、なかなか強力なっ、攻撃じゃないかっ！」

「ふう、これで今日の訓練は終了だ。」

「むう、また姉さまに一撃も当てられなかったか。」

「まだエヴァに負けるわけにはいかないからね。」

修行開始からもう20年か…、最近ではエヴァもずいぶんと強くなってきた。

魔法の訓練も、どこから情報が流れたのかエヴァを狙ってくる賞^お金稼^ろぎ共から情報が得られるようになってずいぶんと進められるようになった。

属性は、私が土と火、エヴァが氷と闇に適性を持っているようで、感覚を掴んでからは急激に上達することができた。

特にエヴァはなにやら闇の魔法とかいう魔法を自分の身体に取り込んで力と成すという、よくわからない魔法を作り上げてしまったほどだ。

それで私もエヴァに負けていられないと思って、実弾系は言うに及ばず非実弾系の火器を開発したのだ。仕組みは単純に魔力を注ぎ込むことで雷と光の複合で作りに出したビームっぽいモノを打ち出す、スパロボで言うところのエネルギー消費型兵器になっている。

残念ながら、開発の基礎についてはエヴァの力を借りたので何とも言えないが。

一応、そのほかにもグルンガストとかヒュッケバインなんかも作ったんだけど、それぞれを象徴する武装が再現できなくて結局見掛け倒しになっているしね。ブーストナックルなんか腕部だけ飛ばすことはできるけど露出した生身の腕が情けないし、ブラックホールキャノンなんてどうすればいいのか全く分からない。

「姉さま、なにを考え込んでいるんだ？」

「ん？まあ、エヴァもずいぶんと強くなってきたと思ってね。」

「そ、そうか、それは嬉しいな、何しろ修行を始めてからずっと姉さまには少しも追いつける気がしなかったからな。強くなった実感があまり無かったんだ。」

本当に、強くなったよ。

「それでね、そろそろエヴァの能力にシトリーが着いて行けなくなってきたから、前に約束した新しいスーツを作ったんだ。」

「む、ようやくだな。それで、どんなのにするんだ？姉さまのことだからまた妙なのじゃないのか。」

「それは酷いな。まあ、否定はしないけど。」

「ええい、落ち込むな！」

「うう、エヴァの私に対する扱いが酷い気がする。だがしかし、そんなことは気のせいだと思って説明しよう。これがエヴァの新スー

ッ『ブランシュネージュ』だ。」

説明しよう。

この『ブランシュネージュ』はエヴァ専用開発した高機動射撃戦を主眼に置いたパワードスーツなのだ。

機体自体の能力としては、シトリーを超える装甲と機動性を備え、それ自体が魔法発動体になっているため魔法戦も可能である。そして単独での飛行が可能であり、さらに実体を持たない攻撃に対する障壁まで搭載しているのだ。

そして、この機体の特徴はなんとと言っても、サブフライトシステムSFSとしても利用可能なサポートユニット『アルスノーヴァ』による戦闘中の武器換装システムだ。

まず基本となる武器が初期武装となる白兵戦用ビーム(?)ブレードである。ちなみにビーム(?)はもちろん魔法によるものだ。

射撃戦の基本となる武装が『ヴェクターガン』だ。二連装の銃身から魔法ビームを撃ち出すシンプル兵器でマルチに活躍できるのだ。次は高威力射撃兵装である『フォースバスター』。この武装は両腕の爪型のユニットの間に魔力を収束、その後前方に放出する、少し隙があるのが難点な武器だ。

それから、この『ナイトデイメンジョン』は単砲身の銃で、風魔法の分身を利用して一人弾幕を形成する武装である。弾幕とは言っても、射撃の一発一発が十分な威力を持っている。

最後に必殺武器がアルスノーヴァ自体と合体して放つ『ラインロツクランチャー』だ。この武器の威力はまさに殲滅兵装と言うにふさわしいものだ。

『アルスノーヴァ』自体にも魔力バルカンなどを搭載しているの
で自衛は全く問題ない。

ちなみに、換装の際に外した武装は全て『アルスノーヴァ』に転

送されるので回収の必要はない。

これが『ブランシュネージュ』全てだ！

「……、開いた口が塞がらないな。」

「ちなみに機体名の意味は『白雪姫』、エヴァにぴったりじゃないか。」

「なっ、なにを、ま、まあ、せっかく姉さまが作ってくれたのだ、ありがたく頂戴するでしょう。」

これで、もうこの世界には思い残すことはない。

「エヴァ、私はこれから魔法世界に行く。」

「そんな急に、いったいどうしたんだ？」

「まあ、ね。魔法世界に行くこと自体は20年前から考えていたんだ。でも、エヴァを一人にするわけにも、まして一緒に連れて行くこともできないと思って、エヴァが独り立ちできるくらい強くなるのを待っていたのさ。」

「20年前…、襲撃の件か？」

「そうだ、あの事件の手がかりが魔法世界にあるかもしれない。」

だからこそ、エヴァを連れて行きたくない。十中八九その道は修羅の道となるだろうから。

「私も行くぞ。」

「何のために？」

「奴等のような奴を唆すような連中が居るのかもしれないんだろう？ならば、それを駆逐しなければ、私のように家族を、町を、そして人間の身体さえも失う者が新たに現れるかもしれない。それを姉

さまだけに押し付けているわけには行かない。」

あくまで復讐ではなく、人のため、強くなろうとした当初の心意
気のまま、か。
十分だ。

「その言葉、自らの誇りに誓えるか？」
「誓える。」

「「いざ、魔法世界へ！」」

第五話 新たなる力、そして（後書き）

個人的にエヴァ機はブランシュネージュ一択

一応の解説

ブランシュネージュはDの主人公機のうちリアル系の黄色いほうです
ちなみに初期腕は本来は少なくとも戦闘に関してはデッドウェイト
説があるのを主人公がもっていない精神で改造した

バルカンうんぬんとSF Sうんぬんはそれっぽいからやってみただけ
腕はブリッツとかプロヴィデンスの盾みたいな感じにしています

第六話 旅路（前書き）

風邪超怖い、何もできねえ。

皆さんも健康には気をつけて下さい。

インフルはもっと怖いです。

第六話 旅路

何はともあれ魔法世界に行くと思った以上、まずはそのための打ち合わせをしなければならぬだろう。

「ところで姉さま、魔法世界に行く方法には心当たりはあるのか？」

「うん、多少はね。でも、そのうちの一つは少々面倒でね、正確な場所も分からなければ、いつ、どのくらい開くのかも分からない入り口を通らなければならない。」

「情報は得られなかったのか？」

「私もこの20年なにもしていなかった訳ではないんだが、どうやら情報が秘匿されているらしくてね。おおよその位置までしか掴めなかったんだ。その上開くタイミングも不明じゃお手上げだね。ま、そもそも賞金首の私たちでは普通に通ることができるのかも怪しいけどね。」

忘れがちだが、一応私たちには少なくとも賞金稼ぎに狙われる程度には賞金が付いている。

実際、奴らから聞きだした以上のことはおろかその存在さえも、一般人はおろか賞金稼ぎ程度では魔法使いにも知られてすらいないのでから仕方がない。

「それで、どうするんだ？ そのほかの方法とやらを聞かせて貰おうじゃないか。」

「なに、簡単なことさ。強引に次元の壁を突破するのさ。」

私の能力ならば、それを可能とすることができる。

「前にも話したと思うが、私には限定的にはあるが次元の移動を

可能とする能力がある。それと大地に関わる能力を併せて用いればいい。」

この方法は、入り口近くの大地上に残った魔力の痕跡から目的地の座標を割り出して、もともと閉鎖空間を脱するために使われたXNディメンジョン、その力で次元の壁をぶち破る、という身もふたもないものだ。XNディメンジョンの前には物理的な距離も、位相のずれさえも問題にはならない、故に現状ではもっとも確実な方法だと考えている。

XNディメンジョンはバンプレイオスに搭載されていた機能ではあるが、私の念能力のレベルならば生身でも発動は可能だった。実際に自宅と近所の泉間の転移に成功している。

唯一の難点としては入り口の近く、少なくともウェールズに入るくらい近くに行かないと正確な転移が出来ない事だろう。もっとも、これは私自身の未熟さによるものだが。

「まあ、どちらにせよウェールズには行かなければならないけどね。」

「ふう、本当に姉さまは何でもありだな。」

「使えるものは何でも使うべきだと思わないか、エヴァ？それにその力の恩恵を受けているエヴァのいうことでは無いだろう。」

「うっ、それは……、いや、そんなことよりも早く出発しよう。」

む、話題をそらしたか。

だが、この機会に最近ずっと気になっていたことを聞かせてもらう。

「そうだな。ところでエヴァ、一つ聞いても良いか？」

「なんだ、姉さま。」

「最近エヴァの口調、変わってないか？」

そう、確かに10年目位までは出会った当時のままだったはずだ。具体的に言うとし少し偉そうになっている？

「それは、20年以上も一緒に居たんだ。姉さまの口調が移ったって仕方ないだろう。」

「移ったんだとしても、エヴァの中でかなりアレンジされてるよ…。」

なぜだろう、これはもう修正不可能だと感じてしまった。

（本当は姉さまのまねをしようとしたら失敗して引込みが付かなくなっただなんていえない…。）

旅立ちの準備とは言っても、物が少ないだけにかなり早く済ませることができた。

「そろそろ出発するけど、忘れ物は無いね。」
「当然だ。」

何か準備を始める前にずいぶん無駄な時間を使ってしまった気もするが気にしたら負けだと思う。何に負けるのかは知らないけど。

「この辺りはかなり内陸だけど、普通に歩いて一月もあれば沿岸に出られるだろう。」

「で、向こうに渡るのはどうするんだ。まさか考えてないなんて言わないよな？」

「あ。」

しまった、自分だけだったら最悪イカダでもいいかと思っていたけどエヴァも居るんだった。

かといって今から他の方法を探すのも面倒だし。

「考えて…、無かったんだな。」

「ゴメンナサイ。」

これは、なんとと言う屈辱。義妹に土下座するなんて。

「まあ、海に出るまで一ヶ月はあるんだ、それまでに考えておけばいいだろう。」

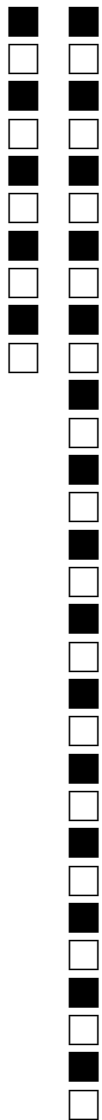
「ソウデスネ。」

「姉さま、なんか真っ白になっているが大丈夫か？」

「ダイジョウブだよ、モンダイナイ。」

「そ、そうか。」

「サア、シュツパツスルヨ。」



一カ月後

ようやく海に出た。

ここまでのいろいろ有った様な、そうでもなかった様な。

実際、ここまでの道中では山賊くらいにしか遭遇してないからな。

女二人旅だからそれは仕方が無い。

おろかも

賞金稼ぎ共に流れた情報は居場所だけだったのか、移動開始以来襲われることは無い。

つまり、ほとんど快適な旅路だった、と言うことだ。

「さて、ようやく海に着いたな。」

ふむ、ここがあのドーバー海峡か。ここが一番向こう岸と近いかな、渡るならここからだろう。

「姉さま、向こうに渡る方法は考えておいたよな？」

「勿論。単純だが、私の力で船を作ってしまうのさ。荷物も少ないから最低限のサイズでも問題ないだろう、外海だからある程度大型にはせざるを得ないがね。」

「どうやら一応は考えていたらしいな。だが、人手はどうするつもりだ、私達だけでは小型船ぐらいしか動かせないぞ。」

このプランの穴を即座に突いてくるとはさすがだな。だが、それも普通ならば、なのだよ。

「ふっ、そこで普段散々エヴァに呆れられている研究の成果の出番なのさ。出でよ、『ヒリユウ』！」

瞬く間に生成される真紅の船。

「見たかエヴァ、これこそが目的地までの快適な航海を約束するオートパイロット（何せ暗礁を避ける以外は直進だけでいいのだから）、魔法動力のスクリー推進、同じく魔法動力の噴射式推進装置、さらに私謹製の魔法金属製の軽量・強靱な船体を兼ね備えた二人でも十分な操船が可能な中型高速船『ヒリユウ』なのだっ！」

ふっふっふっ、参ったか。

「ああ、もう突っ込まん、突っ込まんよ。」

「さあ、いざ行かんっ！さらば、大陸よ！」

エンジン始動！前方確認、問題なし！

「行くぞ！ ヒリュウ発進！」

「うわきやあああああああああああああ……！！！！！！」

「はあ、はあ、何なんだ、あの船は。快適な船旅どころかまともな船旅さえできないじゃないか。」

そう、あの船は確かに期待通りの性能を発揮した。そう、期待通り。つまり、ばかげた加速度による激しい揺れと過酷なGが私達を襲ったのだ。大推力の推進器二つも付けてフルスロットルにすれば当然といえるのだが。

スペックが尋常ではない私達の身体には問題なかったが、それはダメージを受けないというだけで、あまりの乗り心地の悪さに、短時間の航海にもかかわらず激しい船酔いに陥ってしまったのだった。

「はははは、すまないね。今度からは乗り心地のほうも考慮するようにするよ。」

「少しは反省しろっ!」

何はともあれ、イギリス、もといイングランド王国に到着した。これ以降は再び陸路でウェールズを目指すことになる。

しかし、よく戦争中の両国の間を渡ることができたものだ。

例えその所要時間がわずか10分足らずだったとしても、ね。

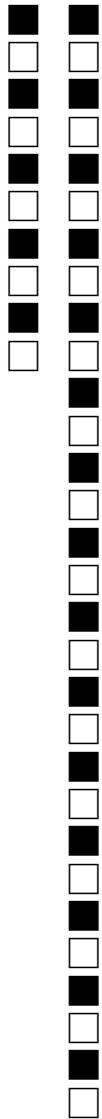
「はっはっはっはっ、また陸路の旅だ。そう長くはならない、早くしないと置いていくぞ、エヴァ。」

「ダメだこいつ、早く何とかしないと。」

ふむ、ウェールズはあちらの方角だな。

「ほら、行くぞー。」

「はいはい…、今行くよ。」



「ついにウェールズに着いたな、思ってみても大して思い出せることはなかったが。」

「姉さま、私は忘れてはいないぞ。あの最悪な船のことをな。」

「な、何のことかな。」

「忘れたとは言わせんぞ。あの後私がどれだけ苦しんだのか、姉さまも見ていただろう!」

そう、エヴァの船酔いは尾を引きに引きまくり、あの後三日にわ

たつてエヴァを苦しめ続けたのだ。まさか私もそこまで長引くとは思ひもなかった。

私もただ見ていた訳ではなかったのだが、私の採り得るいかなる手段を以ってしてもエヴァを回復させることはかなわなかった。酷く恐ろしい船酔い（という名の別の何か）だったな。

「姉さまは何であれが平気だったんだ。おかしいだろう！」

「まあ、そんなことはないじゃないか。そんなことよりも早く魔法世界に入ろう。」

「はあ、分かったよ。それで、どのくらいかかるんだ？」

「移動自体は一瞬で済むから、たぶん、魔力探査にかかる時間の約10分だけだと思うよ。」

「そんなものか、思っていたよりも短いんだな。」

「その分、集中力はかなり必要だけどね。さ、始めるよ。」

まずは、『探索』を使用して周辺の地面から魔力残渣を探し出す。

複数が発見される。

次は見つかった痕跡を詳細にスキャンする。

転移魔法の物と推定できるものを特定。

特定した痕跡に対して『偵察』を使用、さらに詳細な情報を引き出す。

その情報を基に転移先の座標をサーチ、目標地点として捕捉。

これで準備は完了だ。

所要時間は7分。

「エヴァ、予想よりも早いが準備が完了した。これから転移するかそばに来てくれ。」

「む、分かった。」

エヴァが来たので転移作業を再開する。

身体保護用の念動フィールドを展開。

「な、なんだこの障壁は、見たこともないタイプだぞ。」
「安心して、これも必要なことだから。」

そして、転移座標を目標地点に固定。

最後に、サイコドライバーの持つ念動力を開放する。

「行くよ、エヴァ。」

「覚悟はできている。」

「次元斬!」

空間に裂け目が現れ私達を飲み込む。

そして次の瞬間には見知らぬ景色が眼前に広がっていた。

果たして私達は無事に魔法世界に辿り着くことができたのだろうか。

第六話 旅路（後書き）

主人公の能力は次元連結システム並みにちょっとした応用でトンデモなことができるようです。

第七話 新天地

「どうやら転移自体には成功したようだな、姉さま。」

「そのようだね。しかし、まずはここが魔法世界かどうかを確かめないで、完全に成功しているのかは分からないな。」

周囲には何かの装置のような建造物。あきらかに人の手によるもので、おまけに周辺一体には何らかの結界が張られている。どうやら魔法世界の側でもこちらの世界の存在は一部の人間のみが知るに留めているらしい。とは言っても、ここが本当に魔法世界であるのならば、だが。

現状は確認した、自分たちの状態も問題ない。

ならば今何よりもすべきことは、転移が本当に成功していたのかを確認することだ。

確認方法としては、あきらかに向こう側では有り得ない物事を見つけることが最も手っ取り早い物だろう。人に聞くのは、この世界にヒトが住んでいるかが不明なため却下せざるを得ない。第一、ヒトがいたとしても、さっきの転移装置に張られていた結界のことを考えると、一般人は違う世界が存在することを知らない可能性が高いだろう。

「どうしようか。とりあえず適当な方角に進んで何か探してみよう。」

「まあ、多少問題はあるが仕方があるまい。」

「それじゃあこの木の枝を立てて、倒れた方向に進もう。」

「それはいくらなんでも適当すぎだろう！」

「だが構わん！セイツ！」

エヴァのツツコミを振り切って倒した棒の先端が指し示したのは……。

おおよそ西北西（たぶん）だった。

「こっちか、行くぞエヴァ！」

「こらっ、待て！勝手に行くな！と言うか荷物ぐらい持って行け！」

その後は追いついてきたエヴァに荷物を持たされて、結局は棒の倒れた方向に進むことになった。

で、二、三日ほど進んでやっと第一村人的人物を発見できた訳なのだが。

「じゅ…、獣人、だと？」

「はいはい、ふざけてないで話を聞きにいくぞ。」

「すみません。」

「ん？なんだあ見ねえ顔だなあ。」

「ええ、私たちは西へ向かう旅の途中なのですが、どうやら道に迷ってしまったらしくて…。」

「ほー、女二人でそりゃあ難儀なことだったなあ。」

「西へ向かうにはどちらへ行けばいいのでしょうか？」

「ああ、それならおらの村から行くとええ。村からちょうど西のほうに道が出ているだ。」

ふむ、まあ情報にはあまり期待はしないけど、これで獣人の村とかがあったら異世界確定と思っていかな。

「ありがとうございます。それでは、そうさせていただきます。」

「そうか、こっちの道がおらの村に通じてるだ。ついて来るとええ。」

」

獣人のおじさんの案内で、小一時間程かけて村に辿り着いた。

村は獣人などのいわゆる亜人が作った農村の様に畑の中に家が点在していた。

「ここがおらの暮らしてる村だ。何もないところだけど、良いところだ。西には向こうの出口から道に沿って進んで行けば行けるだよ。」

「どうもありがとうございます」

「ええだよ。そんじゃ、おらはもう帰るど。あんたらも気をつけてなあ。」

村の住人が全て獣人、少なくとも別世界に来たことは確定でいいだろう。さっきのおじさんの反応からすると、普通の人間も存在しているといい。

植生もあちらとそう大幅な差異は無さそうなので食料調達の心配もしなくていいだろう。

ついでに気候はともかく土の成分を見る限りあちらの作物を育てることも可能だと考えられる。なので、種さえあればあちらの作物を得ることもできるだろう。

すでにここが異世界であることは確認した、後はここが奴らの言っていた魔法世界なのかを確かめるだけ。

そして、あの事件の真の黒幕の正体を必ず突き止めて、これ以上の犠牲を食い止める。

ここまで多くの町や村を見てきたが、そのことごとくに獣人が暮らしていた。

このことから考えて、ここは私たちがいた世界ではないことは間違いない。しかし、魔法世界だという確証も得ることはできなかった。私自身が魔法世界について詳しいことを知らない以上これは現状ではどうしようもない。

そして、この世界の住人の別の世界に関する認識は、ほとんど御伽噺の存在程度のもので、やはり一般には別世界の存在は秘匿されているらしい。

移動もあれからずっと西北西（たぶん）に進んできたが、大陸の端に来てしまいそのまま南下することになった。ただ、これまで得られなかった情報が、このまま進んだところで得られるとは思えな

い。

先日また海に突き当たったが、天気が良かったためか向こうに陸地が見えたので、今は東から迂回してみている途中だ。

この次に行き止まりに当たったらどうするか。

「姉さま、この間からなにやら考え込んでいるようだが、今度は一体どんな碌でもないことを考えているんだ？」

「む、何も言っていないのに最初から否定的とは酷いな。」

「実績があるからな。」

くっ、間違っていないだけに反論のしようがない。話題を逸らさねば。

「ほら、あれだよエヴァ。ここまで魔法世界そのものに関する情報が全然得られなかったじゃないか。だからどうしようかということを考えていたんだ。」

「そうだな、確かにこのまま旅を続けていてもしようがないからな。」

「それでさ、私は町を作ろうと思うんだ。」

「ほう、それは何故だ？」

「ここまで一般人にどれだけ聞いても何の収穫もなかった。ならば一般人以外に聞けばいい、そう考えたんだ。」

「それがどうして町を作ることになるんだ？」

「そう、そこだ。エヴァ、ここまでどれだけ非一般人に会った？」

言えまい、何しろここまでの旅で会った最も一般的でない人間が行商人だったのだから。

「0、だな。」

「そう、普通に探していてもなかなかそういう人間には出会えない。だからそんな人間が自ら集まってくるような町を作ればいい。」

「どうする気だ？」

私の能力を無駄遣いするように気分は良くないが、方法は考えてある。

「私達が求めている裏の人間は魔法使い、ならば魔法に用いる素材のほとんど、加えてそこでしか買えないような物が揃っている商業都市を目指せばいい。幸い私の能力があれば鉱石系素材は無制限、買い付けは転移で行えばいいから立地を気にする必要もない。むしろ、辺境にあった方が一般客を避けることができるだろう。」

「ふむ、確かにそれならば可能だろう。だが、そのための元手はどうする気だ。」

「そうだな、この方法を取るには圧倒的に元手が足りない。まあ、とりあえず町を作ってから考えるさ。」

「おいっ！」

はっはっはっ、そんな細かいことを気にしてたらしょうがないぞ。まあ、方法が無い訳ではないんだが、使ったら間違はなく経済を破壊するからね。貴金属大量生産なんて方法では、ね。

「ま、なんとかなるさ。」

「もういいよ、もう突っ込んだって無駄なんだ。」

背後でエヴァがいじけているがいつものことだから気にしない。
今日も旅路は快適快調。



まあ、所詮あの程度の土地を回ったところで何か得られるわけもなく、私達は今町を作る土地を選定している。

正直面倒くさいのでここでいいと思っているところだ。

「うん、もうここでいいや。」

「軽っ！姉さま、もう少し慎重に決めろ！」

「いや、一応考えてるよ。ここなら南には未開の土地が広がってるから素材の調達場所のごまかしが効くし、都市から離れているから普通の客はあまり来ないからね。」

「う…、それは、そうだな。」

という訳で私達の町（仮）の建設場所は最初に突き当たった所から海を挟んで反対側の土地に決定した。

しかし建物作りには人手要らないけど、町と言うには人口二人は無いよなあ。

第七話 新天地（後書き）

第7話投稿

1月27日 話数を漢字に修正

第八話 完成、我が町

町を作るにあたって最も大切な要素である人口。人口が二人では町にはならない。

「どうしようか、エヴァ。」

「仕方ないんじゃないか、こんな土地だ、移住希望者なんてめったに居ないだろう。家屋は作ってあるのだから地道に集めるしかないだろう。」

くっ、どうにか、どうにかならないか。

……ん、待てよ、この世界は少なくとも獣人がいても問題ない世界だ。ならば彼らだっていいんじゃないか？

「エヴァ、私はこれから住人を生んでくる。」

「……………はあ！？姉さま、早まるな！方法は他にもあるだろう！」

「なにか勘違いしていないかい？正確には生むと言うよりは創造すると言った方が良さだろう。」

「なんだそうか、柄にも無く錯乱してしまったな。…ん？なにやら有り得ないことを聞いた様な…。」

「まあ見ていなよ。」

まずは生命の器たる身体を創り出す。

「む、これは姉さまがいつも戦闘を丸投げしているゴーレムじゃないか。それもこんなに沢山。」

それを、生物足りえる肉体へと作り変えていく。

「な、なんだ、ゴーレムが土色から変わっていくぞ。」

最後に、生命の根源たる魂魄、その核を魔力で形成、神の力の外殻を加え、存在を魂のそれに変化させる。

その魂を器たる肉体に…、封じ込める！

「…ここは？ 私は…？」

「やあ、目が覚めたようだね。君の名前はナイトガンダム、私が生み出した存在さ。」

「そうですか、あなたのことは…？」

「好きに呼んでいいよ、どうでもいいことだしね。」

「それではマスター、と。」

「分かった。ああ、言い忘れてたけど、君にはこれから作る町の住人になってもらいたい、今のところは特にすることは無いから剣術でも魔法でも読書でも何でも好きにするといい。」

何か衝撃的なモノでも見たのかフリーズしているエヴァを指し示す。

「あと、あそこで固まっているのはエヴァ、私の妹だ。」

「分かりました。」

どうやら成功の様だ。後はキャノンとタンク、アルガス騎士団あたりを作って自警団にして、ジムを商業要員に何人か据えれば町としての体裁は整うだろう。

あと、それとは別に、趣味で作った研究所要員に少し人手が欲しいな。個人的には僧正ガンタンクRあたりがそれっぽくていい感じだと思う。

「何だこれは！」

あ、エヴァが再起動した。

「気がついたか。彼（ら）はMS族、この町の住人になるヒトさ。」
「いや、それはいいんだ。だが姉さま……、彼（？）は生物なのか？」

「見ての通りの生き物さ。」

「はい、私は生物の範疇に入るようです。」

「おいっ！何で生命なんて作り出せるんだ、有り得ないだろう！」
「有り得ないって言ったって、ねえ。ここにこうして存在しているんだからしょうがないじゃないか。」

「全く、どんなに高位の魔法使いでも普通は肉体までしかできないんだぞ。それを魂まで一から創るなんて、どんな魔法だ！？」

何故だろう、エヴァがもの凄く興奮しているよ。あれか、やっぱり魂自作は不味かったかな。

「時に落ち着けエヴァ。過ぎた事だ、もうどうでもいいじゃないか。」

「くっ、そうだった、姉さまには何を言っても無駄だったんだ。」

さあ、残りもさっさと済ませてしまおう。

とりあえずナイトは超長命にしたけど他はどうするか、とりあえ

ず自警団要員はナイトに準じた設定でいいと思うが、さすがにジムにまではキツイから、ここは普通の寿命で生殖能力を付けておけばいいだろう。

そうなるとジムの一人目と二人目は通常よりも時間と能力を使うけど、ある程度の人数まで生み出せば後は勝手に増えていくから大丈夫だろう。

さて、これで作業再開だ！

翌朝

これは、すごい。

既に住人がMS族なこと以外は普通の町になっている。

昨日は、ジムを20人程生んだところでダウンして、自宅（仮）の寢床に倒れこんで眠りについた。

そして今朝、いつもよりも少々遅めに目が覚めると町が町らしい活気に包まれていた。とは言っても、現在のところはまだ住居の確定などの移住作業の最中なので、本格的に町らしくなるのはしばらく後だろう。

問題があるとなれば食料だ、昨日まで二人だったのがいきなり30人近い大所帯になったのだ、作物の種も多少あるとは言え、現状

用意してある食料では収穫までは持たない。

そこで私の出番と言う訳だ、現在持っている全ての金を持ってひとっ走り買い物に行つて来るのだ。

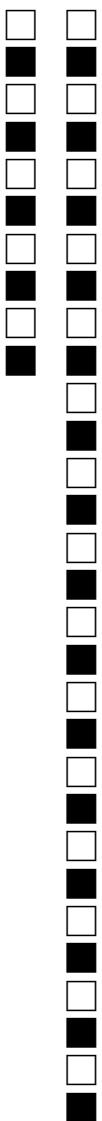
移動手段？ 勿論普通に歩いていたら当然間に合わないに決まっているから次元斬だよ、XNディメンジョンとも言うよ。能力の無駄遣いでは決して無いと思うんだ。

「という訳で、ちょっと行つて来るよ。」

「まあ、大丈夫だとは思うが気をつけてな。」

「ははは、勿論さ。」

「『次元斬』！！」



町づくり開始からもう100年が経過した。

町は順調に成長して今では〈学術都市〉と呼ばれる程になっている。

そう、〈学術都市〉である。

どうしてこうなった。

どうしてこうなった。

大事なことなので二回言った。

思えば、途中までは構想通りの発展だった。

MS族は南方未開地域の独自民族ということで認知させることができた。

商業要員にするために、ジムたちに読み書きそろばんを教えたのは問題ないだろう、それが学校に発展したのも、研究所を本格稼働させたのも、なぜか襲撃してくる賞金稼ぎを撃退していたのも問題ないはずだった。

それらが単独だったら、ね。

無償だったのもあって学校がそれなりに有名になった頃に、いつものごとくなぜか賞金稼ぎ襲来、ただその場所が学校の中で、そのとき近くには襲われるような心当たりがあるやつが居た。当然撃退された賞金首を見て、何を勘違いしたのか感謝してくる。似たようなことが研究所でもあって、その結果学ぶ者、研究する者はこの都市の法の下に守護される、などといったうわさが流れることになった。

そこからは早いもので、流れたうわさは途中で変化していき、最終的には学ぶ意志のある者はヒトでなからうが罪人だろうが受け入れて庇護する都市、というものになっていた。

ただ、そんなうわさの効果もあってか、異端とされた魔法使い、所属する組織を抜けてきた研究者などの当初のターゲットが自ら集まって来たのは嬉しい誤算だった。

まあ、そんなこんなでこの町は学術都市として発展を続けてきた。当初の目的であった情報収集もおかげではかどりと、事件の黒幕の

候補が判明した。

『完全なる世界』、この世界で唯一あちら側の世界へ渡る手段を持ち、且つ真祖の吸血鬼を産み出す方法に至る事のできる秘密結社である。しかし、この組織はあちら側の人間を巻き込むことを良しとしない方針である。つまり、この組織の人間の仕業だとすればそれは独断先行の犯行ということになる。そのために個人レベルでの調査が必要になっているが、あまりに時間が経過しているために難航している。

また、学校もなにやら従来の授業を商業科とし、普通科や魔法科などを併設するなど、私の手を離れてどんどん拡大している。正直なところ運営に私が関わっていたのは初めの20年くらいなものだったから今どうなっているのかは全く分からない。授業自体はたまに魔法具作成や一般教養を教えているのだが、卒業生から優秀な教員が出てきているので居ても居なくても問題は無い。

研究所では予定通り僧正ガンタンクRを助手につけて、日々の仕事の合間に研究を少しずつ進めていた。途中この町のうわさを聞いて訪れたはぐれ研究者達が加わったこともあってかなりの研究が大きく進展した。

エヴァもここに来ては人形作りをしている。エヴァが初めに作った人形はチャチャゼロという名前で、エヴァの魔力を使って常時半自立稼働しているそうだ。

ちなみにこのチャチャゼロ、最近自警団の訓練に乱入しては一般団員を半殺しにしているらしい。当然上位団員であるラクローア三人組とアルガス騎士団（ただし術士を除く）は負けることは無い、むしろ返り討ちにしている。それでも来るのは奴が戦闘狂だからと言うことで自警団内では一致している。

なお、賞金^{アホ}稼ぎに狙われがちな生活の元凶となっている懸賞金は、

当たり前だが撤回されることも無く、むしろ増額されている。

エヴァには引き続きの『闇の福音』ダーク・エヴァンジェル『悪しき音信』あしきおとずれなどほぼ吸血

鬼のイメージだけでつけられたものやスーツを使って戦う姿からつけられた『空飛ぶ武器庫』に加え、最近使うようになった人形から

『人形使い』ドール・マスターという二つ名が増えていた。懸賞金は300万ドル。

ちなみに私も賞金首の仲間入りを果たしており、その二つ名は『漆黒の堕天使』ダークフレイム『暗黒の叡智』である。おそらく前者は戦闘時の姿から、後者は研究所のせいだろう。懸賞金は500万ドル。エヴァよりも多いのは、賞金稼アレぎや討伐隊コレの相手をするのがエヴァよりも多いせいだろう。

今日も着々と〈学術都市〉として発展を続ける我が町。
何度でも言おう。

どうしてこうなった。

どうしてこうなった。

魔法世界にその名を轟いしずえかす独立学術都市国家『アリアドネー』その礎いしずえを築いたのはたった二人の姉妹だったという。

その都市は学ぶ意志と意欲のあるものは何者であろうと受け入れる。例えばそれが人外でも、大罪人でも。

その都市は精強なる騎士団に守られている。その強さは、いずれもがMS族である隊長格は一人が千の軍隊にも匹敵するという。

その都市では全てが平等である。なぜならば、そこで意味を持つのはよき人の知恵だけだから。

その都市は魔法世界のほかの都市の100年先の技術力を持っている。

その都市には古今東西あらゆる材料となる鉱石が有ると言う。

その都市の名は学術都市国家『アリアドネー』、またの名を『暗黒の叡智』の集積所。

第八話 完成、我が町（後書き）

第九話投稿

ああ、課題が、テストが！

第九話 戦争（前編）（前書き）

テスト怖い

今週のはじめにはできると思ったのに気付いたらほぼ一週間経ってた
来週くらいまではテスト怖い状態なので投下速度は低下してます

第九話 戦争（前編）

街を作り始めてから600年以上もの時間が経過した。

今では我が町、と言うには大きくなったアリアドネーは（若干マツドな）学問の聖地として、この世界に確固たる地位を築くに至った。肥大化した規模と確固たる自治の意思により都市国家として独立しても、私は市政運営の傍らに、相変わらず研究と情報収集に精を出す日々を送っていた。

『完全なる世界』については、調べれば調べるほど組織としての行動を否定する情報が集まるばかりで、独断専行の線を調査するには既に絶望的な時間が経過していた。私としてはもう諦めてはいるが、『完全なる世界』自体がかなりの力を持つ組織であることから、情報の収集を継続している。

忙しくも充実した、いつもと変わらない日々を送っていた。

そんな矢先、戦争が始まった。

始まりはメセンブリーナ連合とヘラス帝国との辺境での些細な誤解を端発とする小規模な戦争。

それは瞬く間に世界を南北に二分する大戦争に発展した。

我がアリアドネーは戦争初期の段階で即座に中立を宣言、以後武力を持ってその立場を維持する方針を決定。

一方では戦争による難民の発生を想定して臨時の居住設備と食料の備蓄を開始、同時に難民受け入れの用意があることを表明した。

現在の戦況は帝国が優勢、通常の戦力では一体倒すのにも一個中隊を要する鬼神兵の存在が大きかったのだろう。連合は戦線の後退を続け、ついに首都の喉元に位置する要塞橋、ビックブリッジが陥落した。

「さて、この戦争どう見る、エヴァ。」

「下らんな、どちらの陣営も敵と味方以外存在しないと言っても言わんばかりの態度、どうにも気に食わん。」

「普通なら、このまま続けば近いうちに決着がつく、帝国の勝利だね。だが、遠からず戦況は五分に持ち直すだろう。」

「ほう、なぜだ？」

「この戦争に裏があるからさ。おかしいとは思わないか、この戦争の発端程度の事はこれまでも何度もあった、にもかかわらず今回に限って戦争にまで発展した。何故か、両陣営の上層部、おそらくは既にある組織の影響下にあるからさ。」

「その組織とは？」

「『完全なる世界』、その目的、形態、規模、その全ての全容が不明の秘密結社。少なくともこの戦争においては、彼らの介入が確認できている。」

『完全なる世界』、あの事件の首謀者が所属していた可能性の有る、そして、この戦争を影で操っている組織。

「『完全なる世界』？」

「そう、この戦争の黒幕とも言える組織だね。その目的は明確には分からないが、この戦争に介入していることだけは確かだ。これまでに得た情報から分かったことは、この戦争の両陣営の中枢が既にやつらの手に落ちているという事、そしてその目標がウェスペリタティア王家に産まれるとされる神代の力を持つ子供、その力を以って、結果としてこの世界が崩壊する何らかの儀式を執り行う事、この二つだけだね。」

「む、前者はともかく後者は見過ごせないな、だが、姉さまは動けないな。」

「そう、やつらに関わると言う事はつまり戦争に関わると言う事、既に中立を宣言している国の代表である私が出すのは差しさわ

りがある。それに、身分を隠して行動しようにも、私は良くも悪くも顔を知られすぎている。」

まあ、私なら絶対に見破られることの無い変身も可能だが、エヴァが反対するだろうし、これは最後の手段にするべきだろう。

「つまり、今私に出来ることは、直接的には無い。出来ることと言えば政治的な方面、戦争の終結に向けての働きかけくらいだね。」

「むう、姉さま自身では動けない、か。幸い、と言うべきか私はアリアドネーの人間という認識は薄いからな。」

「そうだね、効果があるかは疑問だけど、私は外交での働きかけを試みてみるよ。エヴァはどうする？」

「私は……、両陣営の上層部から話の通じそうな奴を探す。こっちも望みは薄いかな。」

「戦争なんて終わらせる。そのためには、ほんのわずかな可能性でも捨てることは出来ない、そうだろう？」

「そうだ、力無き人々が死ななくてはならないのを座して見ている事など、私には出来ないからな。今は一分一秒でも惜しい。」

「気をつけて、いつてらっしゃい。」

「ああ、いつてきます、姉さま。」

さてと、エヴァが外で頑張るんだ、私もこの国の力で出来る限りを尽くさなくてはな。

このアリアドネーは、究極的には自治の意志のみによって国家として認証された国だ。地理的、産業的にメリットが無く、学問の聖地としての地位も自治の意志を押しつぶして強引に吸収するほどで

はないからこそその独立とも言える。

つまり、アリアドネーには政治的な力は無いに等しい、ということである。

政治的な力に期待できないのであれば、中立の立場を利用するのならはどうだろうか。

例えば、停戦の仲介、これならば可能な範囲だろう。

ただし、国際的な発言力が小さく、その保有戦力の程も知られていない都市国家、小国であるアリアドネーの呼びかけで、両者を交渉のテーブルにつかせることができるのかが問題になる。

あるいは、両者に強大な共通の敵を認識させるという方法もある。しかし、この方法には『完全なる世界』の息がかかっていない人間が不可欠である。何しろ現状その敵の候補は彼らしかないのだから。また、この方法では『敵』を打ち倒した後に戦争が再開する可能性も否定できない。

「外交での解決は困難か…、だが諦めるという選択肢は無いな。」

なににせよまずはそれぞれの詳しい、生の情勢を知るべきだろう

「アレックスとセラスを呼べ。」

「はっ。」

「ディア様、魔法騎士団団長セラス、機甲騎士団副団長アレックス参りました！」

「マスター、私達に一体何の御用でしょうか？」

「お前たちを呼んだ理由はただ一つ、この戦争終わらせるために頼

みたい事がある。」

「して、その内容は？」

「セラス、お前には今回の戦争、その両者の中心勢力の詳しい国内情勢を探ってきてもらいたい。多くの危険を伴う任務だ、念のため最新鋭魔装『アンジュルグ^{パワードスーツ}』を支給するがそれでも十分ではないだろう、引き受けてもらえるか？」

「了解しましたっ！この私にお任せください！」

「頼んだぞ。次にアレックス、セラスの抜けた穴を埋めてもらいたい、あいつは魔法騎士団の団長だから、そのままにしておくことも出来ない。かといって代わりの者に頼むには危険が大きすぎる。あの三人を束ねていたお前ならば可能だろう、頼む。」

「マスターの信頼に応える事ができるよう努力いたします。」

人物についてはエヴァが選定してくれるだろう、だから、今はエヴァがその情報を持ってきたときに活用できる下地を整えておくことに集中しよう。

政治は情報が生命線だ、各地に潜んでいる諜報員からの情報は正確だがさすがに中央には潜入することは出来ない。

魔法騎士団団長ではあるが公の場では兜で顔が隠れているセラスならば警戒されないだろうし、彼女の実力ならそのガードをくぐり抜けることは可能だろう、だが、それでも無事に帰還できるかは判らない、私には彼女の無事を祈ることしか出来ない。

Side エヴァンジェリン

今、私はウエスペリタティア王国の首都オスティアに居る。
既に両陣営を巡り終え、接触すべき人物の選定は済んでいる。

ヘラス帝国は戦線が遠のいているせいか帝都には戦時の緊張感と
言うものはまるで無かった。

帝国第三皇女テオドラ、ヘラス帝国において数少ない戦争に否定
的な意見を持つ人間である。ただし10歳足らずという幼さと現在の
戦況から今接触するべきではないと判断した。

メセンブリーナ連合、その盟主メガロメセンブリアにも確かに戦
争に否定的な意見を持つ有力者は居たが『完全なる世界』との関係
が否定できない者、あるいは何らかの方法でなり代わりが出来てし
まう程度の人物しか見つけられなかったため保留とするしかなかっ
た。

最後にこのウェスペリタティア王国である。この国自体は本来ど
ちらの陣営でもなく、現在は帝国の勢力圏内にある。

アリカ王女はこの戦争を明確に否定しているうえに、強いカリスマ
を持つためこちら側に引き込めればかなり有利に事を運べるだろ
う。

だが、王はマズイ、おそらくは既に『完全なる世界』なる組織の
手に落ちている可能性が高い。政策方針の急転換や人柄の変貌など
あからさまに不審にならない程度ではあるが、確実に手が加えられ
ている。場合によっては元に戻すことは叶わないかもしれない。

今、私がすべきことは、隠密裏にアリカ王女と接触し、協力を仰
ぐことである。この機を逃せばおそらく後は無い、失敗は許されな
いのだ。

そのための魔道具は姉さまの研究所から拝借してある、性能も確
認した、問題は交渉が成功するかどうかだ。

決行は今晚、王女が一人になるタイミングで潜入する。

「『プリズムファントム』、起動。」

すう：

私の姿が闇夜に溶けて消えていく。

この『プリズムファントム』は障壁魔法で使用者の身体を覆うことで透明に見せ、且つ魔力を隠蔽する隠密用魔道具なのだそうだ。原理については不明な点が多いが、その威力は触られない限りまず発見されることは無いレベルの隠蔽を可能とする。ただしその代償として使用中は魔法の行使が一切出来ない。

あっけない、巡回の兵士も居たが私には気付くことは無く、驚くほど簡単に王女の部屋に入ることが出来た。戦時中だというのはこの警備の甘さ、心配になってくるな。

王女は、夜中なので当然だが、寝ている。

部屋の音を外部から遮断する。

さて、少々申し訳ないが起こさせてもらおうでしょう。

「夜分申し訳ない、アリカ王女、起きて貰えないだろうか。」

「…ん、んん？……！何者じゃ！」

「まずはこのような形での訪問をお詫びさせていただきます。私はアリアドネーからの使い、『暗黒の叡智』の関係者、と言えれば分かりになるかと。」

「『暗黒の叡智』の関係者、『闇の福音』が妾に何の用があって参った？」

「単刀直入に申し上げます、この戦争を終わらせるために貴女のお力を貸していただきたい。」

「戦争を……、確かに妾はこの戦争を止めたいと願っている、だが、そのためには力が及ばないことも理解しているのだ。主らは、そのための力を持っていると言うのか？」

「殿下のお力添えが有れば可能かと。」

「…分かった、妾の力、主らに託そう。どうかこの戦争を止めてくれ。」

「必ず。詳しいことは追って連絡します。それでは、私はこれで失礼します。」

「『プリズムファントム』、起動。」

「妾一人では力が足りぬか、不甲斐無いものだな。」

S i d e o u t

やはり情報が有ろうと弱小国家ではままならないものである。この戦争で中立を貫けたのも、単純にこちらにまわす戦力を惜しんだだけのこと、自らの力によるものではないのだ。

何をするにも独力では動きようがない。

単独では影響力が足りない。

「む、…これは。エヴァが帰ってきたか。」

そういえばエヴァは他国の協力者候補を探していたな、何か収穫が有ればいいのだが。

「ただいま、姉さま。」

「お帰り、エヴァ。何か収穫は有ったかい？」

「ああ、ウェスペリタティア王国のアリカ王女の協力を取り付けてきた、非公式だがな。姉さまのほうはどうなんだ？」

「こちらはほとんど手詰まりの状態だったけど、エヴァのおかげで何とかなりそうだね。アリカ王女ならば十分な力がある。ウェスペリタティアが中立というのも大きいね。」

「それについてだが、悪い知らせがある。王は既に何者か、おそらく『完全なる世界』の傀儡になっている可能性が高い。」

「そうか、だがそれならばそれで手は打てる。操り人形の糸を断ち切ってやろうじゃないか。」

「ふ、それもそうだな。」

戦争を終わらせるため、力なき人々に迫る理不尽を打ち払うため、そのためにできることは何であろうとしよう。

例え修羅の道を歩むことになるうとも、そのためには己が身すらも投げ打って、ね。

第九話 戦争（前編）（後書き）

そういえば主人公の名前下しか決めてない。一応公人になっている訳だし下の名前のみじゃあ問題だよな。

一応解説

『プリズムファントム』

第三次αのASソレアレス、ASアレグリアスより

本来は光学迷彩の一種で、機体を完全に透明化させる。また、視覚だけでなく赤外線やレーダー等からも完全に姿を眩ませることが可能。

悲しいかなあの世界では現実には有り得そうな技術はローテク扱い。

今回登場した物は魔法障壁という魔法使いの基本スキルの応用ということでそれっぽいかないと思った。

良く分からない原理については突っ込まないで欲しい、自分でも説明できない謎理論だから。

第十話 戦争（後編）（前書き）

アリカの口調が一定しない…

第十話 戦争（後編）

乗っ取られたのなら、開放すればいい。

これほど単純な事も無いだろう。

「それで、糸を断ち切ると言っても、具体的にはどうする気だ？」

「そうだね、まずはウェスペリティア王の情報が欲しい。主に身体データの、操られる前の普段の行動についての情報が良いね。頼めるかな、エヴァ？」

「詳しい話を聞かせてもらおうか。」

現状で考え得る案は二つ。

まずは王が取り返しをつく状態の場合である。この場合は事前に仕入れた身体情報などを基に組んだ魔法で解呪するだけである。

そしてもう一つ、これは既に取り返しをつかない状態だった場合である。ここに至っては方法など選んではいけない状態だった場合人間を止めるには、普通ならば殺すしか方法は無い。しかし、一つだけ可能性のある方法がある、簡単に言うとな人格の再構成、つまり操られた人格を破棄して、新規に人格を組みなおすのである。そのために操られる以前の人格の情報が必要なのだが、問題は、成功したとしても、その人格は情報を基に術者によって作られるためにどうしても完全とはいかないことである。

当然、どちらの方法でも失敗は許されるものではない。

「これが現状で考えられる限りの方法だね。まあ、一つ加えるなら、後者の方法には王の思い入れのある品物があるとなお良いね。」

「どうせアリカ王女に協力についての詳細を伝えなければならないんだ、ついでにやってやろうじゃないか。」

「ありがとう、ついでのついでにもう一つ、アリカ王女に伝言を頼むよ。『貴女は一人じゃない、力とは自分自身のものだけを指すのではない』とね。」

「わかったよ。」

これで外部の協力者については解決できたも同然だろう。アリカ王女の力は人心掌握に極めて強い効果を発揮する。

王が傀儡であることを告げるのにしても、現状回復の可能性がない訳ではないのだからそう大きな影響が出ることも無いと考えたい。問題は回復が不可能、あるいは失敗した場合だろう、その場合には私だけでなく、むしろアリカ王女にこそ追及の矛先が向く事態になりかねない。

それでも取れる手は無いが、確実に物騒なことになるだろうし、戦後に面倒な影響が出かねない。そうならないためにも出来るだけ確実に、正確に解呪を行うことが出来るようにしなければならぬ。そして何よりも、アリカ王女が我々の手を借りると言う選択肢を考えの中に入れるようにしておくべきだろう。それが彼女を引き込んだ私の責任なのだから、ね。

「それじゃあ姉さま、私はそろそろ行って来るぞ。」

「そう、アリカ王女のこと、頼んだよ。それと、気をつけてね。」

「ああ、わかってるよ。」

さて、これから忙しくなるだろうね。

なにせこれだけの大战を止めようと言うんだ、一筋縄ではいかないだろうが、それを為すために必要な力も、人材もある。確実ではないだろうけど、それでも分の悪い賭けではない。

今はこれ以上政治的な動きは私が自ら行う必要はない、私自身は流れを整えるだけである。

それよりも今は『完全なる世界』が行う儀式、その結果として起こる世界の崩壊、それを発動後に抑止する方策―あるいは外部から発動を阻害する手段でもいいのかもしれないが―を用意しておかなければならないだろう。未然に防げればそれに越したことはないだろうが、備えあれば憂いなしとも言うからね。

現状で判明しているのは、この世界が人為的に作られた世界であるということ、その儀式によって起こる現象はこの世界の存在そのものに致命的な損傷を与えるということ。

はじめにこの世界が作り物であるということが解ったときには驚いたものだが、あの事件のときに魔法世界が旧世界とわずかに位相を異にする世界であるという情報は得ていたし、そのような形でなら人為的に世界を作ることとは理論上不可能ではないとの研究結果も出ている。だが、そのためには人の身では、例えば世界中の魔法使いが集まろうとも不可能なほどの魔力を要する事も同時に判明していた。

つまり、これは事実上不可能な、机の上だけの、理論上の行為のほずであった。

しかし現実には人為的に作られたこの世界が存在する、この事実が指し示すのは、この世界が創造された時に、少なくとも今現在に生きる全ての魔法使いの全魔力以上の魔力が行使されていたと言うことである。現実にはこの世界がこうして存在しているのだから疑いようもない。あるいは何らかの未知なる方法で用いる魔力を低減していたのかも知れないが、それでも国家規模の人数を要するだろうし、まして個人の持つ魔力を下回るなんてことは絶対にありえない。

話を儀式のことに戻そう、連中の最終的な目的はいまだに不明だ

が、その儀式によって起こる現象は世界の崩壊を招く。ここからが重要なのだが、この世界が作られたものであり、旧世界と位相を異にするだけの世界である以上旧世界上にこの世界に対応する空間が存在するはずである。しかしその場合創る空間と同等の土地を必要とする、しかし世界規模の空間となるともではないが地球上には確保することはできない。ならば地球外となるが、この世界の広さは旧世界およそ半分以下のため、大きさが地球よりも小さく、地球のなりそこないと言われる火星が対応する土地にされている可能性が高いと考えている。

さて、このような位相をずらして存在する世界が崩壊すればどうなるか。答えは簡単だ。その世界に住まう者全てが旧世界上の対応する土地に放り出されるのだ。そうなれば現実の火星の環境で人が生きていくことは困難を通り越して絶望的と言えるだろう。つまり、この世界の崩壊とはこの世界の人間の死をも同時に意味するのである。

私には何の罪もない人々が理不尽に命を奪われるのを許容することとは到底できない。それを防ぐためなら私はなんだろうとするつもりだ。例えそれが自らを犠牲にすることでも、悪魔と契約を結ぶことだろうと、ね。

まあ、長々と考え込んでしまったが、今は研究に専念するべきだろう。

in アリアドネー国立研究所

さて、研究所に来たのもずいぶんと久しぶりに感じるな、とりあえずは挨拶と、これからのための仕込みと、研究方針の指示をしよう。

「やあ、みんな久しぶりだね、研究は順調かな。」

「はい、先日質量・慣性の分離制御による高効率推進装置テスラドライブの試作品が完成したところです。」

「それはなかなか。とまあ、そんなことよりも所員全員を、…そうだな、第一実験室に集めてくれ、話したいことがある。」
「分かりました。」

「どうやらこれで全員集合したようだね。」

初めは個人の研究所で助手も一人だったのが、いつのまにやらこんな大研究所になるなんて感慨深いものだね。

と、こんなことを考えている場合じゃないな。これからおそらく戦争の終結前後までの間にしなくてはいけないことを話さなくてはね。

「さて、今日皆に集まってもらったのは他でもない、今起きている大戦争の事についてだ。現在我等がアリアドネーは中立の立場を貫いている、だが、そうも言っていられないような事実が判明した。この戦争、発端からして不自然な部分が見受けられるが、それはある組織の介入があったからなのだ。その組織の名は『完全なる世界』、目的こそ不透明だがその重点目標とされるものに一つ、見過ごすことのできない事が有る。それはある儀式、その儀式は結果としてこの世界を滅亡させる。」

ざわ…

ざわ…

ふむ、さすがに衝撃が大きいか。仕方ないだろう、この世界の存亡に関わることなのだから。

「静まれ！我等はこれより全力を以ってその儀式を外部から阻害する方法、あるいは発動後に起きる現象を無力化する手段を模索する。現状で分かっている情報は、その儀式の要はウェスペリタティア王家の血筋に生まれるとされる『この世界に息づく魔法の力を終わらせていくという神代の力』を持つ特別な子であると言うこと、そしてその結果として起きる現象とは広域魔力減衰現象であり、発生すればほぼ間違いなく世界が滅び去るということだけだ。」

みんな黙って聞き入っている。それはそうだろう、情報もほとんど無く、これだけ大規模な現象をどうにかしろと言われているんだ。

「わずかにこれだけの情報で対策を行うのが困難を極めるであろうことはわかりきっている。だが、それでもやりとげなければならぬ。我等の住まうこの世界を守るため、自らの大切な者達のために！君たちの力を私に貸してほしい！！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「それでは、手の空いているものは阻害と無力化に分かれて作業を始めてくれ。」

ふう、慣れない事をするとは疲れるものだね。

だが、これで研究所は総員研究体制に入った。最終期限に間に合うのかは分からないが、可能性は高いに越したことは無いからね。

あとは私自身の研究だ。まあ、構想自体はずいぶん前から考え

ていたことだし、おそらくは期限にも間に合うだろう。私自身でしか実行できないのが難点だがね。

S i d e エヴァンジェリン

しかし相変わらずこの魔道具は反則だな、ここに来るまでに全く気付かれもしなかった。

さて、王女は起きているだろうか。

「む、誰じゃ。」

さすがにドアから入れば誰かが来たのは分かるか。
顔を見せるためにステルス状態を解除する。

「私ですよ、王女。」

「主か、して今日は何の用じゃ？」

「先日の子の詳細と、少々お伝えしたいことが。」

「申してみよ。」

「まずは協力関係のことを、現在我々は停戦のための協力者を募っている段階です。そこで王女には協力者探しを行ってもらいます。また、我々では停戦の仲介者には不十分なため王女には交渉の矢面に立つてもらうことになります。」

「それ位であれば、構わぬ。」

ふむ、これは問題なく済んだか。だが、こちらはどうかだろうか。

「ありがとうございます。それともう一つ、申し上げにくいことですが、…王はおそらくは既に敵の手に落ちて傀儡と化していると思

われます。」

「そう、か、薄々は感じていたが、やはり…。」

「ただし、それについてはこちらの方で解除の手段が用意してあります。勿論、確実に、とは行きませんが。」

「よい、方法があるだけでも十分じゃ。」

「その解呪に関して、王の身体情報と思い入れのある品を頂けないでしょうか？」

「いいだろう、頼むぞ。」

「全力を尽くします。」

まあ大体これで今回の用事は済んだな、後は、姉さまの伝言くらいか。

「最後に、『暗黒の叡智』からの伝言です。『貴女は一人じゃない、力とは自分自身のものだけを指すのではない』、と。」

「ふふ、解っている。少し前までは、そのように考えていたこともあったがな。」

「それでは、私はこれで失礼します。」

ふん、なんだ、分かっているじゃないか。前に会ったときには自分の力不足を嘆いていた癖にな。

さあ、必要なものがそろったんだ、急いで帰らなければな。

S i d e o u t

くそっ、また駄目か。

何度やっても安定しない、やはり想定される事象が強大すぎるな。いざとなったら負荷を無視してでも能力全開にするべきか。だがそ

うするとなるとこの魔法では、構成する式が耐え切れなだろう。
それに…………。

…

……

…………

騒がしいな、何かあったか。

「ディア様！」

「どうした？」

「帝国の軍勢が押しかけてきました！奴らは我々に対連合に参戦するように要求しており、返答によっては武力行使も辞さないとの事です！」

奴らもう一息だからって、勝負を焦っているな。でなきゃこんな費用対効果に見合った戦略的価値の無い所をわざわざ攻めるわけ無いからね。

「ふう、まったく、何を言っているのか理解できないね。返答はノーだ。」

「え？ディア様、気は確かですか？相手は五万を超える大軍、対してこちらはわずか一万ですよ！」

「ああ、そうだね。まあ、追い返すぐらいなら私一人で十分だよ、彼らにはちょうど溜まっていた鬱憤の捌け口になってもらおうかしょうか。」

おお、これだけの大軍が並んでいるのは壮観だね。

「我々はヘラス帝国辺境方面第三師団である。対連合戦参戦要請の返答は。」

「私はアリアドネーの代表だ、『暗黒の叡智』と言えば分かるかな。それで返答だが、答えはノーだ。」

「武力行使も辞さないと言った筈だが？」

「構わないよ。」

「ふん、後悔しても遅いぞ。前列前進！！」

おーおー、調子に乗っているねえ。まあ、ここらで力の差を見せて二度とアリアドネーに手を出したくなくなるようにしてやろうか。

「それはこっちの台詞だよ。『コール・ゲシュペンスト』！」

さあ、始めようか！

第十話 戦争（後編）（後書き）

主人公の公式な場での名前が考え付かない、別にマクダウェル姓でもいい気がするが、何となくしっくり来ない。

次回は週明けには投下できると思います。

テストはまだまだこれからだ！

第十一話 ヒーロー戦記（前書き）

なんてこった、予想外に時間がかかってしまった。
やはり戦闘描写は難しい。

待っててくれた人が居たら御免なさい。

第十一話 ヒーロー戦記

さあ、始めようか！

そういえばこうして暴れるのもずいぶんと久しぶりだね。賞金稼ぎ共もほとんど来なくなったし、そもそも来たとしても最近はこの国に入る前に排除されてるから全く遭遇してないね。

このところ研究が煮詰まっていたから、新兵器の実践テストも兼ねて、ここは一発派手に憂さ晴らしと行こうか。

まずは魔法ミサイルの運用ユニットから試すか。

「一発目は派手に行くぞ！スプリットミサイル・M、展開！！」

大型の魔法弾が背部ユニットから大量に射出、背後に固定される。

「行け！！！！」

声と共にやや上方に飛んでいく弾丸の群れ。

「弾けろ！！！！！！」

それらはある程度の距離まで敵に近づくと、次の瞬間にはそれぞれが無数に分裂し雨のごとく降り注ぐ。

広域に撒布したため密度こそそれほどでもない絨毯爆撃だが、降り注ぐ弾丸の一つ一つが致命的な一撃となる。

これだけでも相当な被害が出たが、敵司令官は意に介した様子もなく命令を下し続ける。

「怯むな！敵はただ一人だ、立ち止まるな、全軍前進！！！」

「さすがにこれだけでは無理か…、ならば、来いっ！」

ゲシュペンストの持つ数ある武装の中でも最も強力で、最も扱いづらいモノを呼び出し、出現と同時に起動する。

続けて、三枚の刃を持つ特異な形状の物体を周囲に展開、待機させる。

「チャージ開始。時間稼ぎだがな、切り裂け、スラッシュリッパー！」

迫り来る敵の大群を縦横に飛び回る凶刃が敵陣に混乱をもたらす。

「止まるな！！進め！！進めえー！！！！」

それでもなお向かってくる敵に駄目押しの追撃をかける。

「まだまだ、喰らえ！ニュートロンビーム！！」

ここまでに敵軍は二割の兵を失い、前線の兵の士気が揺らぐ。

ここに来てようやく彼我の実力差が数で覆るものではないと理解したのか、司令官の命令に逆らって進軍の足を止める者が出てくる。

だが、状況を理解していない、理解したくなくて恐慌状態に陥った司令官は狂ったように無力な命令を、無力だと分からないままに出し続ける。

「どうした、前進しろ！前進するんだよ！！敵は棒立ちじゃないか、この機を逃すんじゃない！！！！進軍しろおおおー！！！！！！」

「!!!!!!」

ついには全軍が停止し、続けて後退が始まるが、それと同時にエネルギーの充填が完了する。

今現在持ち得る武装の中で最大最強を誇るが、内部機構が耐え切れないために長い時間をかけて充填せざるを得ないという欠陥を持つ兵器。

その名は、

「メガ・バスターキャノン、発射!!!!」

極大の閃光が総てを飲み込む、敵も、木々も、山さえも。

後に残るのは全体の四分の一を消し去った光線の射線を境に分断された敵軍と、その破壊をもたらした一人のニンゲンだけ。

中央に陣取っていた司令官は、兵士もろとも塵ひとつ残らずに消滅した。

「無様だな。ついでだ、『戦慄』。」

戦場に文字通りの戦慄が走る。

ふふん、少し前まで私達を蹂躪するつもりで勝ち誇ったように残酷な笑みを浮かべていた顔が、恐怖に引きつるのを見るのも悪くないものだな。

「ひ、ひい。バ、バケ…、モノ。」

「に、逃げろおーーーーー!!!!」

「こんな奴に勝てるかよ!俺は逃げるぞ!」

指揮官を失った残りの兵は恐怖に駆られて、退却と言うのもおこ

がましいほどの総崩れでの敗走を始める。

負傷者の収容はしているが、統率が取れていないな、司令官が戦死したと言っても士官が全滅したわけでもあるまい。たぶん新任の士官に経験つませようとでもしていたんだろうな、傍から見たら負けるほうが難しい戦いだっただけだからな。

ふう。

まあ、こんなものかな。

ふむ、新武装は全体的に使い勝手は良かったのだが、メガ・バスターキャノンは要改良だな、威力は申し分ないが取り回しづらいし、何より充填に時間が掛かりすぎだ。

まあ、あれだけの損害を一人で与えたんだ、これで奴らも手を出す気は無くなっただろう。

と言うか、無くなっていることを祈るよ、本当にね。

「二度と来るなよ、面倒だからな。」

誰にともなくぼやく。

しかし、帝国は大丈夫なのだろうか。あの敵司令官前進しか命令出してなかったような気がするんだが、あんな無能が司令官とはずいぶんと人手不足なんだろうな。それともあれか、私達の相手はアレで十分だと思われていたのか。そうだったらかなり心外だな、今度正式に抗議でもしてやろうかな。

まあ、冗談だけだね。さすがにそんなことで抗議するほど暇でもないよ。

「あー、あー、こちらディア。敵の撃退に成功した、よって正門を開けてくれ、以上。」

うむ、暴れたおかげかずいぶんと気分が良くなったな。

これならいい案が浮かびそうだ、この気分が冷めない内に早速研究に戻らなければいけないね。

早く研究にひと段落つけないと、そのうちに戦争のごたごたやなんかで出番が増えて時間なんて取れなくなりそうだから、ね。

Side エヴァンジェリン

「はあ、面倒だ。」

私は今、帝国の兵に囲まれている。

数は十人ほどで、どうやら正規兵のようだ。

密談の結果を早く伝えようと急いでいたせいか、普段なら通らない山道を通って、迂闊にもたまたまそこにいた帝国の部隊に発見されてしまったと言う訳だ。

いくら最近目立っていないとは言っても最高クラスの賞金首だからな、いくら見逃してくれるはずも無い。

穩便に逃げ出そうにもこの状況では『プリズムファントム』を使用しても感知されてしまうだろう。転移をしたように見せかけることが出来ればいいのだがそれも難しい。あれはあくまでも隠密が前提、そこに居る事が分かっているれば対処の方法が無いわけでもないのだ。

繰り返そう、面倒だと。

この程度の奴らなど、私の相手にはなり得ない。
ただ単純に面倒なのだ。

「あー、お前ら見逃してやるからどっか行け。」

これで従ってくれば楽なんだがなあ。

「ふざけるな！何が見逃してやるだ、キサマにはこの状況が分からないのか！」

まあ当然と言えば当然の反応か、交渉は決裂だな。

仕方ない、少し遊んでやるか。

「急いでいるんだ、さっさと済ませるぞ。来い、『ブランシュネー
ジュ』！」

態々アルスノーヴァから武装を出すまでもない、基本のアームブ
レードだけで十分だ。

起動と同時に魔法刃の展開が完了する。

「魔法使いが接近戦をやるうってのか、バカにしゃがって！」

ほう、よく私の戦闘スタイルを知っていたな。

だが、それは一体何年前の話だ。私がそんなスタイルで戦っていたのはもう思い出せないほどの昔だぞ。

あの姉さまを相手に固定砲台なんてやっていたら、従者が何人居ようと、命がいくつあっても足らなかったからな。それは変わらないを得ないさ。

「ああ、その情報なら間違いだ。今から証明してやろう、行くぞっ！」

まずは包囲を崩す。

狙いは正面、固まっている二人だ。

「食らえっ！」

「ぐああっ!!」 「ぎゃあっ!!」

次は側面、それぞれ三人を右は魔法で、左は直接切り伏せる。

「くっ、散開しろ!まとめてやられるぞ!」

一網打尽にされるよりはマシだと判断したか。

「だが、遅い!魔法の射手氷の17矢!続けて、ブースト!!」

右翼に氷刃を放つと即座に反転して左翼に突撃する。

「てやあっ!!」

先に放った魔法より早く斬撃を見舞い、遅れて氷の矢が着弾する。

「うぐっ!」 「ぬわあっ!」 「ぐがあ!」

「ぐうっ!」 「があっ!」 「ぎゃあっ!」

さて、これで残りは後方に陣取っていた二人だけ。

「く、くそっ、これだけで囲んでも無理だったってのか。」

たかが十人で何を言う、私は百人を相手にしても容易く打ち倒すことが可能なのだぞ。

「残念だったな、お前たちの間違いは私を前にして逃げ出さなかったことだ。」

これで終わりだ。

「まっ―」

「ふん、あっけないものだな。」

断末魔をあげる間も無く死んだか、最後にしては地味だったな。

しかし、それにしても手ごたえの無い奴らだったな。

これでは賞金稼^{アホ}ぎ共の方がまだマシだった。こんな帝国の兵にやられるとは、連合はそんなに弱いのか。

……帰るか。

S i d e o u t

大分烈戦争（仮称）の停戦計画の進捗についての報告書「第二次」

1. 外交戦略

アリカ王女とはエヴァンジェリンⅡマクダウエルが本格的な協力関係を結ぶことに成功、現在は協力者を探すことに専念している。

2. 儀式及び広域魔力減衰現象

前回から新たに判明した事は無い。

阻害・消滅の研究についても、情報の少なさもあって進展はほとんど無い。

現状ではディアⅡマクダウエルによる研究が唯一の手段である、ただし未だ安定性を欠くため急ぎ進める必要がある。

3. 『完全なる世界』の関与が疑われる事項「追記」

連合と帝国の兵の練度・物量等総合的な戦力差に対する戦況
ウェスペリタティア王の洗脳による傀儡化

辺境の戦域にいる不自然なほどの戦力を持つ集団

なお、現在連合が帝国に占拠された要塞橋グレートブリッジの奪還作戦を進めているとの情報が入っている。その結果に関わらず戦況が大きく動く事は間違いないため、場合によっては計画の修正の可能性もある。

第十一話 ヒーロー戦記（後書き）

ゲシュペンストはヒーロー戦記仕様にしようとしたけどOGシリーズとのハイブリットになってしまったんだぜ。

第十二話 邂逅（前書き）

十日以上も空けてしまつてすみません。

第十二話 邂逅

年が明け、ついに連合によるグレートブリッジ奪還作戦が敢行された。

『完全なる世界』の作為によるものか、連合の命運をかけたその作戦は見事に成功し、流れは帝国から連合へと傾きつつある。

なお、その戦場では、辺境で確認されていた過剰戦力―『紅き翼』と言う集団らしい―が確認された。

連合はこの勝利を契機に盛り返し次々と領土を奪還している一方で、帝国は逆に苦しい戦いを強いられて、じわじわと戦線を後退させている。

このままならば帝国は敗北、連合の勝利と言うことになるだろうが、初めから横槍が入っている戦いだ、おそらくは土壇場でまた帝国に逆転させるのだろうか。

肝心の停戦計画はと言えば、アリカ王女が戦況の急変に焦って準備が不足している中で調停を試みるも叶わず、手勢の不足を感じたのか、私のあの伝言を一体どのように解釈したのか、あの『紅き翼』とか言う過剰戦力集団に接触をとり、彼らに助けを求めている。

さらに、その後アリカ王女は気分が高揚していたのか彼らのリーダーとともに『完全なる世界』のアジトの一つに殴り込みをかけ、拳句の果てに壊滅させるというんでもない凶行におよんでくれた。

正直な所、いくらハイになっていたからといってもそんな事を王女がするのはどうかと思うし、それ以上に『紅き翼』のメンバーには制止しろと言いたい。普通に考えても一国の王女が他国の領内にある施設をそれが何であろうと壊滅させるのも、その王女をそんな

場に連れまわすのも国際問題になるだろう。

しかも、その際に何らかの証拠品を手に入れたのか『紅き翼』のアホどもはバカ正直に反戦派の議員に報告して、当然とばかりに敵に嵌められてお尋ね者にされてしまった。もういい加減にして欲しいね。メガロメセンブリアの中枢には既に敵に掌握されているのだから、その議員が信頼できる人物だったとしても行動を起こせば粛清されるのは想像の範囲内だろう。まあ、彼らの場合はどうやらさらに偽者を代わりに据えるという念の入り様だったようだが、お尋ね者にされたこと以外にはあまり関係は無いだろう。

で、そんな中でアリカ王女が帝国において注目すべき人物と目していた第三皇女テオドラとの会談を強行、なんと二人で捕縛されてしまうと言う事態になってしまった。アリカ王女には殴り込みの件でたっぷり（エヴァ経由で）搾っておいたのにどうしてこうも独断で事を起こすのだろうか。とは言っても今回の件ではどうやら王女の身近に内通者が居たようで、それを事前に感知できなかったのにはこちらの落ち度でもあると認識している。

さらにややこしいのがこちらの動きより早く、お尋ね者の『紅き翼』が王女をテオドラ皇女ごと救出した事である。

もうここに至ってはため息しか出ないね。何故にお尋ね者が助け出そうと言うのだろうか。お尋ね者の身では傍から見たらどう考えても誘拐としか捉えられないとか考えろと、我々が動きを見せているのだからもう任せようとは考えられないのかと。いや、そう考えられないからそんな暴挙に出たのか。

はあ、一国の王女がお尋ね者と行動を共にするなんて状況、早い所どうにかしないと後々さらにややこしいことになるからな。

事前に仕入れた話からすると王女が自分から戻ってくることは考

えられない。仕方ない、現在拠点にしている場所も分かっていることだし、こちらから迎えに行くか。

「誰か居るか。」

「なんだ、姉さま。」

「エヴァか。私はこれから出掛けるので後を頼む。」

「あのアホ共の件か？」

「そうだ、面倒なことになりそうなんだな。早めに手を打とうと思っ
っているのさ。」

「そうか、なんだ、まあ、頑張ってくれ。」

「ああ、それじゃあ行ってくるよ。」

ああ、エヴァにまで同情されるような状況だなんて、本当に泣けてくるよ。

i n 紅き翼の隠れ家

ここが奴らの拠点か。

まったく、王女も手間を掛けさせてくれるな。

……はあ、入るか。

トン、トン

「誰か居るかい。」

ガチャ

「…誰だオマエ？」

「ああ、私はアリカ王女の迎えの者さ。ここは『紅き翼』のアジトなのだろう？」

「姫さんなら渡さねーぞ。」

名乗りもせずに用件だけ伝えるのではさすがに信用されるはずも無いか。

「まあまあ、勘違いしないでくれ、私はオスティアの人間ではない、水面下で彼女と協力関係を結んでいるアリアドネーの人間さ。ディアIIマクダウエル、『暗黒の叡智』、と言えはわかるかな？」

「……、知らねーな。」

これはひどい。

自惚れている訳ではないが、それでも何百年に渡って国を治めている身で、しかも一般には今でも某ナマハゲのような扱いで語られる存在だ。いい子にしていないと暗黒の叡智に攫われて人体実験されてしまうぞ、とね。

それを知らないとは、旧世界出身だとしてもよほど世界情勢に興味が無いのでもなければ普通は有り得ないと思うんだけどね。

「一体どうしたんですか、ナギ。」

「おお、アル。なんか知らねーが姫さんを迎えに来たとか言ってる奴が居るんだよ。『暗黒の叡智』だとかなんとか言ってる訳分かんねーんだ。」

もう一人来たな、今度は分かってもらえるといいのだけど。

「これは驚きましたね、まさかあの『暗黒の叡智』とは。ナギ、彼女は間違いなくアリアドネーの代表ですよ。おまけになんでも一人で五万もの軍隊を退けた事もあるとか。」

「オマエ、そんな偉いやつだったのか。それにずいぶん強いらしいな、勝負しようぜ！」

「ふむ、ようやく分かってもらえたかな。あと、勝負は断らせてもらうよ。それで、王女はどちらに居られるのかな？」

まあ、居るのは分かっているんだけどね。ちよつと白々しいかな。

「なんじゃナギ、何かあったのか？」

なんか普通に出てきたな、この王女狙われてる自覚あるんだろうか。

「探しましたよ、アリカ王女。さあ帰りましょうと言いたいところですが、オスティアも安全とはいえない以上さすがにこのまま帰るのは難しいですからね。できればアリアドネーに来ていただけないでしょうか？ 勿論そちらに居る『紅き翼』の方も一緒にね。」

「いいのか、こいつらはお尋ね者だぞ？」

「ふふふ、アリアドネーの理念を知らないとは言わせませんよ。」

学ぶ意志のあるもの、その全てを受け入れ平等に学問を授ける。

その者に学ぶ意志のある限り法の下に庇護し、外部からの干渉を排除する。

「つまり、別に何も問題にはならないのですよ。ただし、アリアドネーに入る以上その理念に従って彼らには何かしら学んでもらいま

すがね。」

「いいだろう。ナギも構わぬな？」

「何で俺だけに聞くんだよ！」

「他は特に文句言いそうにはないからの。……いや、ラカンの奴も居たか。まあ、それは何とでもなるだろう。」

「それでは、我がアリアドネーへ皆様をご招待させていただきましよう。」

the ○時だよ、全員集合！

「……という訳で、君たちにはアリアドネーに来てもらうことになっている。既にアリカ王女と君たちのリーダーの同意は得ている。なお、テオドラ皇女についてはアリアドネー経由で帝国に送り返す予定である。何か質問は？」

「えー、まず、どちらさまでしょうか？」

「む、奴らから何も聞いていないのか。まあいい、私はディアーマクダウェル、アリアドネーの代表などを務めている。」

「……と言うと、あの『暗黒の叡智』ですか。」

もう私のイメージはそれだけなのか……。

「はあ、そう言った方が分かりやすいな。ところで君が青山詠春かな？」

「はい。」

「私も剣術を嗜んでいてね、うわさに聞く神鳴流の技に興味があるのさ。一つ手合わせをしてもらえないかな。」

「……いいでしょう。流派は？」

「示現流さ、知っているかな。」

示現流だよ示現流、あのリシユウ先生の流派さ。

なぜか習得していたんだよ。たぶん特殊能力に含まれてしまったんだろう、あれはもはや技能と言う様なレベルじゃなかったからね。

「ええ、二の太刀要らずと云われるその剣、ぜひとも拝見させて頂きたい。」

「さて、どうかな。私には剣による実戦の経験が無いからね。期待したものを見せられるかは分らないよ。」

「私として未だ修行中の身、なればむしろ丁度良い位なのではないですか？」

「ふふふ、謙遜しないでもらえるかな、『サムライマスター』。」

私は諜報員からの情報でしかその実力の程を知らないが、この様な御大層な二つ名が付く位で、しかもそれに名前負けしないだけの戦果を挙げているのである。少なくとも如何に達人の業を持っているようにとも実戦の勘の無い人間を相手に丁度良い程度の使い手では無いはずだ。

「ああ、あと、私には特定の刀というものが無くてね。この様な数打ちの刀で相手をするのを許してほしい。」

そう言って、いつもの様に足元からシシオウブレードを生成する。

「それは？」

「驚いたかな、これも私の能力の一つを使っているんだよ。ちなみにこの刀は獅子王の名を冠する太刀、その模造品さ。」

「ふむ、見たところそれほど悪くない、むしろかなり上質な様に思えます。そこまで卑下するような物ではないのではないですか？」

「私自身が納得していないのだよ。模造品とは言ってもシシオウブレードの名を持って作られた物がこの程度の物になっている事にね。」

本来ならばあらゆる刀よりも鋭く、強靱な太刀だ。ならばそれが模造品であろうともせめて並みの業物を一蹴できるような出来でなければならぬと考えているのさ。」

私製模造シシオウブレードはこれまでもかなり研究してきたものの成果がなかなか挙がらず、現状ではその様な並みの業物と肩を並べる程度でしかない。そんな物に満足するはずがない。

まあ、シシオウブレードをずいぶん美化している様にも自分自身思うが、アレにはかなり助けられたから仕方がないね。

「さあ、こんなことを話してもしようがない。そろそろ手合わせを始めようじゃないか。」

「そうですね、しかしここでは手狭ですね、あちらの広場に行きましょう。」

「お、やっと来たか、詠春。」

「ようやく来ましたね。」

「やれやれ、早いところ始めてくれよ。」

「みんな、どうしてここに？」

「説明が終わったと思ったら二人の世界に入りやがって、話している間もずっと居たじゃねえか。」

「まあ、多少ギャラリーが居ても問題など無いだろう。始めようか、青山詠春。」

「……納得は出来ませんが、何を言っても無駄でしょうからね。行きましようか。」

神鳴流との手合わせか、自分の技が通じるとも思えんが、それでも楽しみなことだな。

「それでは、行くぞ。」
「ええ。」

私が構えると、詠春もあわせて構えを取った。

うん、これはなかなか良い、この空気、この緊張感、心地良く感じるね。

……行くぞっ!!

「チェストーーーーッ!!」
「斬岩剣!!」

互いの剣が交わり、激しい火花が散る。

………ピシッ

「見事。」

………パキン

「負けたよ、この太刀を折るとはね。少なくとも打ち負けるように作ったつもりはなかったんだがね。」

「貴方も、とても実戦経験が無いとは思えない一撃でしたよ。私が負けていてもおかしくない程です。」

やはり負けたか……。

だが、良い気分だ。こうして剣技を競い合うのは初めてだからか

な。

なんにせよこの一度きりで終わらせるのはもったいないね。

「出来ればまたこうして手合わせをしてもらいたいのだが、いいかな？」

「ええ、私でよければ。」

「ふふふ、次は勝たせてもらうよ。」

「詠春の次は俺だ、勝負しようぜ！」

「だが断る。面倒だ、後にくれ。」

「分かった、今度勝負しようぜ！」

「俺もな！」

「はあ、分かった分かった。」

.....

.....

.....

.....

.....

...

いや、こんなことしている場合じゃないだろう！何やってるんだ私は！急ぎで来たのが完全に無駄になったじゃないか！

「...落ち着いて考えたらこんなことしている場合じゃなかったな。さっさとアリアドネーに向かおうか。足も用意してある、陸路だけどね。」

ちなみに用意してある足とは、魔力式ホバータンク『フルギア』だ。

本来の形と比べると、戦闘用ではなく乗員数の向上が図られているためほぼ別物になっている気がするが気にしない。乗り心地に関してはヒリユウでの失敗もあるのでかなり慎重に調整して特に酔い易くないのであれば問題ない程度にしてある。そしてホバー化は機動性と乗り心地の向上に大きく貢献したがその分魔力をアホみたいにするので標準化はできず実質私専用機になっている。

勿論、彼らには説明する気は毛頭無い。面倒なので必要なこと以外はどうしないよ。

「来い、『フルギア』。」

うん、出てきたね。予想外に静かに、ゆっくりと、地面から生えてくるように。

「おお、なんだこれ！」

「説明は面倒なのでしない、以上。さっさと乗り込んで。」

「いいじゃ」「二度は言わないよ。」ねえ…か。」

はっはっはっはっ、みんなおとなしく乗り込んでいるね。

さて、私も乗り込んで、と。

「素直でよろしい。それでは、発進！！」

うーん、なんとも快適な乗り心地だ、ヒリユウとは比べ物にならないね。

現在位置からすると目的地までは休憩を挟んでも二日ほどあれば十分だろう。

……ふう、これでなんとか最悪の事態は回避できそうだが、こいつらどうしようかな。建て前があるから国内に置くにはなんか学ばせないといけないんだが、アルビレオには聞きたいことがあるからむしろ歓迎したいくらいなんだが、二人ほどどう見ても勉強なんてしそうにない奴らが居るからな。もう戦闘技能科目でもやらせとけばいいかな……。

大分烈戦争（仮称）の停戦計画の進捗についての報告書「第三次」

1. 外交戦略

アリカ王女の暴走によりスケジュールに大幅な修正が必要となった。

しかし協力者は順調に増加、両陣営の内部にある程度の影響力を持つに至る。ただし上層部に対してはほとんど影響を持たない者が主で、地位のある者は僅かなため未だ十分とは言えない。

2. 儀式及び広域魔力減衰現象

儀式自体については新たに判明したことは無い。

儀式の要となる王家の特別な力を持つ子の力とは魔法完全無効化であり、しかもその子が敵の手に渡ってから既に時間が経過していることがアリカ王女から語られた。

そのため、現在の儀式の段階は、予測されていた事前準備の段階

よりも進行した魔法式の構築段階にあると推測される。

その推測に基づいて判断すると、儀式の完成まで最短で半年程度であると考えられる。

3. 『完全なる世界』の関与が疑われる事項

連合のグレートブリッジ奪還作戦の成功

グレートブリッジ奪還作戦を機に辺境から中央の戦線に復帰した

過剰戦力集団『紅き翼』

反戦派元老院議員暗殺及び前述の『紅き翼』への濡れ衣

儀式の完成まで最短で半年となっている以上、既に時間的猶予は無い。状況次第では中立の立場を崩してでも大々的に行動を起こして戦争の終結、儀式の進行の停止あるいは遅延に努める必要があるだろう。

第十二話 邂逅（後書き）

やってみたかったからやってみた詠春との対決。

敗因がはっきりしないのは気にしないでください。私の限界です。

フルギアを出したのは他に思いつかなかったから。

一応解説

フルギア

OG2でシャドウミラーが使ってた戦車

戦車だけあってそれなりの火力と射程があり、一撃では落とせないこともあるため地味に厄介な機体

後半ではいなくなっていたのでたぶん在庫切れになったのだろう
ちなみにGOOGLE先生には画像は出してもらえない

第十三話 学術都市（前書き）

モチベアガールが欲しいんだぜ

第十三話 学術都市

さて、ようやくアリアドネーに帰ってきた訳だが、（一部除き）みんな興味津々といった感じだね。

まあ、ここは他国と一線を画した魔科学（命名Ⅱ私、エネルギーを魔力にシフトしただけの科学・工学の類）で栄えている国なのだからしょうがないのかな。乗り物一つとっても魔力機関を搭載した魔列車の路線が縦横に張り巡らされ、個人でも魔動車（必要魔力量が個人レベルでは高く、魔力を溜めるタンクもあるにはあるが容量が不十分のためあまり普及していない）を持つものも居る。

ちなみに魔法工学は動力のほぼ全てを人間の持つ魔力に100%依存しているため環境に重大な影響を与えることはほぼ無い。素材は卑金属に魔法的処理を行ったもので高い強度と加工性を誇るが、それゆえに生産性は極めて悪い。なお、素材となる卑金属は私が生成する分で足りる程度の消費量なので普段は暇なときにまとめて作っているのさ。

「なっ……。」

「何だよこれは！有り得ねえだろう！」

「これは…、驚きましたね。」

「ほー、すごいものじゃな。」

「ふふふ、驚いたかな。ここが学術都市国家アリアドネー、その中心地区さ。」

「私もこれまでにアリアドネーについて調べることがありましたが、このような物の存在など全く知りませんでしたよ。」

「それはそうだろう、学術で身を立っているのだから情報の秘匿は当然の責務だよ。この私が全力を以ってかけた認識阻害の魔法、どれほどの耐性があっても意味を成さず、この都市をありふれた姿と

認識する他に道はない。」

「俺でもか？」

「当然だ、ナギースプリングフィールド。」

「でも今は大丈夫じゃねえか。」

「外部から見たときにだけ影響するようにしてあるからな。内部には不審人物は進入することはできないし、外部に情報を漏らすような人間を迎え入れることもないからそれで十分なのさ。」

その判別にはアリアドネー驚異のメカニズムが用いられているのだが、細かいことは気にしないほうがいいのさ。

「さて、テオドラ皇女は既に使者を付けて帝国に送り返す手はずを整えています。それと、アリカ王女にはしばらくここを拠点に活動していただきます。」

「分かったのじゃ。」

「分かった。」

これは特に問題は無いね。

「次に、『紅き翼』のメンバーについてだ。我々にも建前という物があるからね、君たちにはここに居る以上なんらかの学問を修めてもらうことになるのだが、もう一つ選択肢のある者が居る。」

私達にとって有用な技能を持つ人間に限るがね。

「まず、アルビレオIIイマ。君は重力魔法が得意だと聞いてね、それを用いた研究の補助をお願いしたいのさ。研究が停滞してしまっていてね、優秀な使い手が居ると助かるのだよ。」

「構いませんよ、お手伝いさせていただきます。ですが研究所などという機密の塊に私のような部外者を立ち入らせてしまってよ

ろしいのですか？」

「ああ、それならば問題ないよ。基本的に現在扱っている内容は基礎研究無しには理解はおろか意味を見出すことすらできないものばかりだし、外部の人間を入れてでも進めたいほど切羽詰った状況になっているのさ。」

現在は休止中だが重力魔法応用の研究には某ヒュッケバインシリーズもあるし、何より全研究員が打ち込んでいる広域魔力減衰現象の拡大遅延には重力結界を用いる方法が有効である可能性が高いことが判明している。

それに、そのために採れる手段を選んでいられる状況ではなくなってきた、ということが有る。諜報員からの情報では儀式の完成まで最短で既に半年もないとの報告もあった。それにもかかわらず遅々として進まない研究に業を煮やして重力魔法の有力な使い手を迎えようと考えたのだね。

「次に、ガトウⅡカグラⅡガティンバーグ。君には我が国の諜報員の育成をお願いしたい。」

「構わないが、いいのか？」

「むしろこちらからお願いしたいくらいさ。最近あちこちに手を出しているせいで深刻な人手不足になっていてね。直接諜報活動に向かってもらっても構わないのだが、その程度では焼け石に水の状況になっているのさ。」

「それにもう時間もないらしいのに、間に合うのか？」

「それは問題ないよ。育成とは言っても一からではなく再教育、あるいは投入直前の人員の仕上げだからね。」

まあ、実際彼が居ても諜報員の能力は目に見えて上がる訳ではないが、それでも塵も積もれば山となると言うからね。

「残りの者には選択肢は無い。学問を修めてもらうことになるのだが、君たちが受講できる科目は大別すると戦闘技能、戦闘魔法、非戦闘魔法三種になる。」

内容としては戦闘技能が体術や遅延魔法等の高等技能などが中心で、戦闘魔法は文字通り攻撃や補助魔法が中心となっていて、非戦闘魔法は照明や認識阻害などの使い方にもよるが基本的に戦闘向きではない魔法を扱っている。

「これからそれぞれにお勧めを提示する。チョイスは私の独断と偏見によるが文句は受け付けない。ただしタカミチとクルトの二人は初等部に入ってもらうことが決定済みだ。こちらも抗議は受け付けない。」

「で、俺は何なんだよ。」

「ナギとラカンが戦闘技能以外は無理だろう。」

「なっ、……ってお前ら何うなずいてんだよ!!」

「「ナギなら仕方ない。」」

仲間からこんなにも信頼されているなんて、彼はいったいどんな事をしてきたんだろうね。

「次、その他は自由。詠春は剣士だから魔法系は不向きかもしれないが、戦いの幅を広げるのにも役に立つだろうから考えてみるという。」

「ずいぶんと適当だな！しかも詠春が微妙に鼻肩されてる!？」

「ははは、そんなことを気にしていてもしょうがないよ。」

「これはひでえ。」

さてと、私はこれからテオドラ皇女を送り返して研究に戻らなくてはならないからね。無駄なことをしている時間は無いのさ。
なにやら後ろから抗議の声が聞こえてくるが気にしない、気にしない。

まあ、そんなこんなで色々あってテオドラ皇女を送って帰ってくる頃には大体みんな受講科目が決まっていた。

戦闘技能 ナギ ラカン
戦闘魔法 詠春
非戦闘魔法 ゼクト
初等部 タカミチ クルト
オファー受諾 アル ガトウ

ちなみに戦闘技能の科目にはたまに某ラクロアンなナイトたちが来る。手加減はしなくて良いと言っておいたからたぶんと言うより間違いなくナギとラカンは彼らにぼろきれにされるだろう。合掌。

ふう、ようやく自分の研究に打ち込めるよ。もう時間が無いからね、これからは余計なこと、私自身がする必要の無いことは極力しないようにして研究に時間を割かないといけない。停戦に向けての活動もアリカ王女に補助を付けてではあるが一任することになる。土壇場になって間に合いませんでしたじゃあ洒落にならないしね。

一ヶ月後 i n 自室（研究室とも）

広域魔力減衰現象への対抗策として現在実験中の理論は、簡単に言うとその空間における時間を逆行させて事象を発動前の状態に戻すというものだ。そのために必要となる物も使い捨ての一度限りのものではあるがすでに開発の目処はついている。

また、この方法は対象となる空間が大きいほど必要なエネルギーが大きくなるため、その意味でも拡大遅延は重要な役割を持つ。

上がってくる報告では戦闘技能組以外は特に問題を起こすことも無く順調に学んでいるらしいのだが、アルとガトウを除いた面々はこんな状況でのんきに学問に勤しむのは落ち着かない様で、こちらに意見を寄せてきたので週末は自由時間と言うことで下部組織の殲滅作戦に参加してもらっている。

ちなみに、彼らのここでの生活を簡単にまとめてみるとこうなる。

ナギ：基礎能力が異常に高くせにカンペ無しではまともに詠唱もできない。だが基礎が基礎なの強い、異常に強い。授業放棄などの問題行動もあったが一度ダブルゼータに負けてから真面目に授業を受けていて、今はカンペ無しで詠唱できるように特訓中、成果はいまだ挙がっていない。

ラカン：授業中に居眠りが多すぎる。しかし身体能力は異常の一言、技量もかなりのもの。強い、強いのだが基本的に戦い方自体はデタラメ、でも強い。桁違いの技量を持つゼータに軽くあしらわれている。現在はゼータその他の指導の下基礎から練り直し中。

詠春：魔法使いの資質はあまり無いのか魔法そのものの成果はあまり無い。ただし剣に魔力を付加する魔法剣に開眼、ほとんど既存の技を飲み込んでいる。そういえば神鳴流にも属性付きの技があったな。

ゼクト：なぜか選んだ非戦闘魔法で回復系やフィールド系を学んでいる。最近はそれらを戦闘用に改造しているらしく、目くらましやデコイなどはまだかわいい方で回復魔法を改造して体の異常活性による細胞破壊とか言う恐ろしいのを作っていた。怖い。

タカミチ クルト：初等部に編入後周囲との学力レベルの差に愕然としていた。初等部（飛び級制度有り）はそれほどハイレベルな教育と言うわけではないので、単純に教育をほとんど受けていなかったせいだろう。脳筋ばかりでもなかったんだし、誰か教えてやれよ。彼ら自身の才能と努力により現在は致命的な差はなくなっているが、まだ要努力。

ガトウ：彼が来てから目に見えて諜報員の質が良くなった。たぶん全体で50%くらいはパフォーマンスが向上している。これまでの育成はそんなに悪かったのかorz

アルビレオ：重力魔法の使い手が来たおかげで研究がはかどることこの上ない。このまま行けば間も無く重力結界魔法は完成すると思われる。時間があつたらヒュッケバインの開発も手伝ってほしいも

のだ。

とまあ、こんな感じでかなり順風満帆(?)な生活を送っている。特にアルとガトウは当初の予想よりもはるかに貢献してくれていて非常に助かった。

停戦もどうやら帝国でテオドラ皇女が頑張っているらしくようやく一段落というところに来ることができた。このままなら近く『完全なる世界』一本に集中できるようになるだろう。

と、ここまででは明るい話だったのだが、どうやらウェスペリタティア王については厄介なことになったようだ。

先日隙を見て調べたところ洗脳自体は完全に人格を上書きするような類のものではなかったのだが、かといって解呪して終わりと行くようなものでもないことが分かった。具体的には単純に解呪しただけでは術の残渣が残り時間経過によって復活、再度洗脳が施されるという質の悪いものである。

そうは言っても対応できない範囲ではないのでこのまま予定通りに解呪を行い、王にはウェスペリタティアの安定に努めてもらうことになる。

ふう、最近忙しくて全く趣味の研究ができないね。

戦争と『完全なる世界』への対処が終わったら思いっきり羽目を外してもうジガンスクードとかデイスIIアストラナガンとかSRXとかRVとか e t c ……作ってやろう！

作ってやるんだあ……………うふふふふふ。はあ。

第十三話 学術都市（後書き）

たぶん次は戦争編終結に入るとオモウ

第十四話 英雄戦記（前書き）

地震ニュース見てびっくりした。

幸い地震の範囲外に居たけど、実家震度5弱だったらしいからちと心配。

第十四話 英雄戦記

時は流れて紅き翼のアリアドネー入りからもう半年が経とうとしている。

ここに至るまでに数々の敵を打ち倒し、また地道に協力者を増やして来た。その甲斐もあってタイムリミットぎりぎりではあるものの何とか『完全なる世界』を追い詰めることができた。

その過程ではウェスぺリタティア王の解呪も行い、無事に成功させることができた。

実のところこの後に行った王宮内の粛清に二ヶ月もの時間を費やすことになって焦っていたのは内緒だ。こうも時間がかかったのは一年以上も操られていたことで要職についているものまで居たことと、それぞれが巧妙に売国の証拠を隠蔽していたことが原因だ。

いかに内定を以前から密かに進めていたとしても、所詮は外野である。そこからできることは限られ、当然そこには限界が存在する。それまでの段階では怪しさのかけらも無かったような人間が、内部からの捜査では微かに疑わしい要素が見つかり、それでも決定的な証拠はなかなか出さずに長い時間をかけてようやく追い詰めることができたというのが珍しくなかったのである。ましてそのような人間ほど上層部に居る傾向が強く対処を後回しにすることもできず、といった状況に見事な遠回りを強いられた、と言う訳だ。

さて、話は逸れたが今私達は『完全なる世界』の最終拠点である墓守り人の宮殿を前にして最後の作戦会議をしている。

「確認するぞ、斥候からの報告により敵戦力はほとんどが自動人形と召喚魔で構成されていることが確認されている。こちらの布陣は

連合・帝国混成部隊は外郭から敵の包囲、アリアドネー各騎士団は宮殿周囲の敵の掃討、突入部隊は『紅き翼』のみの少数精鋭だ。これだけの召喚魔を使役していること、既に相手には人員がほとんど残っていないことから宮殿内部の敵は相応の精鋭を配置している事が予想される、そのためこちらでもそれだけの戦力を持つていなければ無意味どころか足手まといにもなりかねんからな。それと、私は万が一の時の保険として外に残るが、露払いくらいはしてやろう。」

「了解！任せてください！」

「細けえ事は分かんねえが、俺等に任せとけ！！」

「最終作戦は明日の夜明けを以って開始とする、以上。」

はてさて、大丈夫だとは思いますが、作戦開始までに儀式が行われなければいいのだけどね。

「明日の決戦に備えて各自休養を取って置くように。」

「なあ。」

「ん？」

「なんで突入部隊が俺たちだけなんだ？ナイトとかアレックスなんか俺たちよりもよっぽど強いじゃねえかよ。ゼータやニューだって居るしよ。」

「そうだな、確かに彼等なら十分な強さを持っている。だが彼等には指揮官という役目がある。総力戦になるだろう明日、指揮官は誰一人欠かすことはできないからさ。それに、君たちは自分自身で思っている以上に強いよ。君たちの力はもう彼等に匹敵するほどなのだからね。」

しかし、この短期間でここまで変わるとは自分でも思いもしなかったよ。詠春やゼクトはともかく、ナギは基本あんちょこ廃止のみで後は魔法運用の工夫、ラカンも基本動作の無駄を排除したただけなんだがね。

実際ナギはあんちよを使わなくなったことで戦闘時の隙が軽減されて、しかも詠唱の精度が大幅に向上しているし、ラカンもラカンで元々の異常な身体能力に加えて極力無駄を省いた攻撃は以前とは比べ物にならない威力と精度を誇るようになった。

「へっ、分かりきったこと言ってんじゃねえよ。」

「ま、事実だからね。」

「俺はもう寝るぜ。明日は早いんだろ？」

「期待しているよ。」

「任せときな。」

ナギに言われるまでも無く明日は早い。

私も早く最終調整を済ませてさっさと寝るとしよう。

夜明け前

既に集合している全軍にアリカ王女が出撃前の激励をかける。

「ついに決戦の時が来た。皆、これが最後だ。この戦、負ければこの世界に明日は無い。だが、私は必ず勝つと信じている！だから、皆の力を貸して欲しい！勝つぞ！！大切な者達の為に！！！！」

「「「おおー！！！！！！！！！！」」」

ついでに『大激励』も2回ほどかけておく。これで兵の士気は普段の一割り増した。

「ふふふ、様になったものだね。」

「そうか？いつも通りじゃねーか。」

「そうでもないさ。始めの頃は見てられないものだったからね。」

「へー、そんなもんなのかよ。」

「そうさ。さあ、そろそろ夜が明ける。作戦の主役がいつまでもこんなところに居ないで、行くぞ。」

「ああ。」

いよいよだね。

この戦いの結果次第で世界の命運が決まるんだ、負ける訳には行かないね。

「ナイト、周辺区域の兵の配備は？」

「既に完了しています。」

「よし、それでは夜が明け次第最終作戦『オペレーション・ブレイクアウト』を開始する。」

「了解。」

夜が明ける、この世界の存亡を賭けた戦いが、始まる。

「準備は良いな、セラス、ナイト。」

「魔法騎士団は完了しています。」

「機甲騎士団も問題はありません。」

「これより作戦を開始する。各員の奮闘に期待する！」

「「応！！！！」」

さて、ああ言ってしまった手前少しくらいは手伝ってやろうかな。

「ふふ、まあ開戦の一撃くらいは任せてくれないかな。場合によっては出番も無いことだしね。」

どうせ継続戦闘はしないんだ、だったら思い切って弩派手に行ってみようかな。

「来い、『フルガンARGUN』！」

白と暗い青色を基調とした甲冑の様な物が隣に現れる。

「メタルジェノサイダーモード、起動。」

それは瞬く間に（ヨガもびっくりの）変形をして、甲冑から銃へと変わる。

さあ、諸々の問題からいまだに色々と実用化できない鬱憤をぶつ

けさせてもらう！

「続けていくぞ、喰らえ、メタルジェノサイダー、マキシマムシュート！！！！」

シューウウン…………、ゴオオオオオ！！！！

わずかな収束の後、莫大な魔力を銃口から放射する。

その威力の前に敵の召喚魔群は次々と消滅し、宮殿入り口に向かって一本の道ができていく。

しかし、その威力は銃自体にも牙をむく諸刃の刃である。

むう、やはりまだ一発でも厳しいか。銃身が軋んでいる、と言うかむしろ溶解してきている。

だが威力は凄まじいものだな。

大型化で充填時間の短縮を図ったものの、結局はその威力に変形機構付きの本体が耐え切れない、それ故に未完成、本来は秘匿用であったコードネームを与えられた『ARGUN^{アールガン}』。

メガバスターキャノンと比べても遜色はないし、充填時間の短さを考えるとこちらのほうが強いのだろうが、やはり一発で損傷どころか大破してしまうからな。

ん、変形機構オミットしろと？そんなことをしたらR—GUN^{アールガン}じゃなくなるから勿論却下だよ。威力ダウン？今の威力だってR—GUN^{アールガン}基準ぎりぎりまで落としてあるのにこれ以上は落とせないね。

まあ、なんにせよこれで露払いは十分だろう。

「さあ、行け！行って活路を切り開いて来い！！」

うん、クサイね。

Side ナギ

「さあ、行け！行って活路を切り開いて来い！！」

「言われなくてもやってやるよ！！」

まったく、何なんだよこいつは。

こいつの戦いはこの半年で詠春とのやつしか見てねえが、ホントはこんなにつええなんてなあ。

これはこの戦いが終わったら絶対に戦うしかねえな。

「行くぞっ！！！！」

宮殿内部

誰も居ない？

「おかしいな。」

「ええ、ここまで来るのに一人の敵にも遭遇しませんでしたから。さすがに不審ですねえ。」

ん？向こうに誰か居るな。

あれは！ずいぶんと前にマクギル議員に化けて俺達に濡れ衣おっ被せてきた奴じゃねえか！！

他に居る奴なんて関係ねえ！あいつだけはこの手でブン殴ってやらなきゃ気が済まねえ！！

「真ん中の白いのは俺がやる！周りはお前等に任せた！」

「ちっ、しゃーねーなあ。」

「ナギは一度言い出したら聞かないからな。」

取り巻きはうまく引き剥がしたか、いや、わざとか。

「ふふ、お尋ね者の生活はどうだったかな、ナギⅡスプリングフィールド。」

「うるせえ！百重千重と重なりて走れよ稲妻、くらえ！千の雷・収束！！！！！」

本来は広域殲滅魔法である千の雷を圧縮することで威力を増幅させた魔法……らしい。細かいことは分からねえから強引に力技でやっている。

「おらあっ！まだまだ行くぜ、オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ！！！！！！！！！！」

くそっ！手応えがまるでねえ、障壁かよっ！

「はあっ、はあっ。」

ちっ、魔力がほとんど残ってねえ。

だが、あいつ等もどうやら取り巻きを倒したみてえだな。

「ここまでだ…！」

「ふふ、まさか君は未だに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「どう言う事、ぐっ…！」

なんだ？今、いったい何処から攻撃が来たんだ。

「ナギっ…！」

「いかんっ！最強防護…！」

「待てコラてめえ…！！」

まったく、そんな体でしょうがねえ奴だな。

「任せなジャック。」

「いけませんナギ！その身体では。」

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ。」

「し、しかしそんな無茶な治癒ではっ！」

「30分もてば十分だ。」

どうせそれ以上は魔力がもたねえからな。

「ですがっ…。」

「ワシが行こう。この中では一番傷も浅い。」

「お師匠…。」

「ゼクト！たった二人では無理です！」

「ナギ、待て！奴はマズイ奴は別物だ！死ぬぞ！態勢を立て直して
だな…。」

何弱気なこと言ってんだよ。

「バーカ、んなことしてたら間にあわねえよ。らしくもねえな、ジ
ヤック。俺は無敵の『千の呪文の男』だぜ？俺は勝つ！勝って活路
を切り開く！！任せとけ！！！！」

それから間も無く

「例え明日世界が滅ぶと知ろうとも！諦めねえのが人間ってもんだ
ろうが！」

一撃でいい！

「人間を！！」

後一撃、入れてやる!!!!

「なめてんじゃねえー!!!!!!」

第十四話 英雄戦記（後書き）

ちなみの説明

A R G U NはRーGUNの開発段階での秘匿コードネームスーパーヒーロー作戦ではこの名前が先に出て後に正式名称が明かされる。この頃は変形もマイルドだったがそれでもヨガもびっくり。

第十五話 鋼の救世主《メシア》（前書き）

ヒヤッ、ハ、戦争編終了だあー！！！！！！

第十五話 鋼の救世主 《メシア》

「マスター、周辺区域の敵掃討完了しました。」

「分かった。」

これで後は彼らの帰還を待つばかりだか。

今のうちに事後処理を済ませておいたほうがいいだろうね。

「機甲騎士団一番隊から五番隊までは連合・帝国混成部隊を含む被害状況確認および負傷者の収容、残りの隊と魔法騎士団は周辺の警戒をしろ。ただし各隊回復魔法を使えるものは最優先で負傷者の治療に当たれ。」

「了解。」

宮殿内部の動きはいまだ不明、か。

ゴオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！

っ！これは！？

「報告します！宮殿内部から高エネルギー反応あり！広域魔力減衰

現象です!!」

「紅き翼の脱出は？」

「確認できていません！」

くっ、間に合わなかったか。

「スペースノア級特殊艦隊、包囲陣形で展開急げ！」

「はっ。」

「私は保険の発動に行く、後は打ち合わせ通りにしろ！」

「分かりました。」

「……エヴァにはこの事は伝えては居ないな？」

「ええ、今は治療部隊の指揮に当たっています。もともと、私はこの程度の事で貴方が斃れるとは思っても居ませんが。」

「すまないな、私は行くぞ。」

「御武運をお祈りしています。」

さてと、できるだけ早くこれをどうにかしないとね。

はあ、無ければ良いと思っていたことが起きてしまうのは悲しいものだねえ。

さて、作戦通りの位置に着いたな。

連絡用に通信ユニット展開つとね。まあ、普通なら念話でも十分なんだが、これなら念話に魔法リソース一切割かなくて済むし、今回みたいに全体の指揮を執らなくてはいけない時には都合がいいか

らね。

『こちらディア、所定の位置に着いた。各艦、抑制結界を展開しろ。』

〈了解。艦首特殊装備『超重力アンカー』、展開します。〉

ゴオオオオ……、カッ

アンカーの包囲展開が完了したな。

ブウン

よし、発動確認。重力の檻が現象の拡大を押さえ込んでいる、成功だね。

『展開、および発動を確認した。これより行動に入る。各艦結界の維持をしつつ宮殿より距離を取り待機しろ。』

〈了解。〉

始めよう、創めよう、はじめよう、許されざる業を。時を歪める、空間を歪める、この世の理に逆らう業を。我が身の、我が力の全てを以って。今、この時。さあ、神の摂理に挑もうじゃないか。

「テトラクテュス・グラマトン、我が下へ来たれ、デイスの銃神よ！！」

機械的でありながら生物らしい禍々しさを感じさせる、本能的な恐怖を喚起する姿を持つ悪魔王の名を冠する銃神、デイス・アスト

ラナガン。かつての平行世界の番人の力を受け継いだ新たな番人、その愛機。

「さあ、始めようか。」

背部から悪魔を思わせる翼を展開し、高空へと飛翔する。

「行くぞ、アストラナガン。」

本来ならデイス・レヴの負の無限力を必要とするのだが、アカシツクレコードからの正の無限力をその代わりとさせてもらう！

「T—LINK、フルコンタクト！！回れ、インフィニティ・シリンダー！！！」

胸部装甲を開いて内部機関を露出させ、起動する。

機関は即座に反応し、その出力を全開にする。

「さあ、時の流れを垣間見ろ！！」

激しく回転する機関のエネルギーが徐々に収束し、闇色の光球を形作る。

「アイン・ソフ・オウル、デッドエンドシュート！！！！」

ゴォッ

膨大なエネルギーの塊はそれに見合わない静かな音と無数の魔法陣を残して放たれ、数瞬の後に雲を貫き一条の閃光となって降り注

ぐ。

ズウン

それは正確に現象の中心地点に着弾し、その全てを囲う巨大な魔法陣を描く。

ブオン

次の瞬間には周囲を莫大な質量を持つ無数の光球、中性子星が飛び回る。

ヒュッ

その光球が触れた部分は文字通り、まるで切り取られたように消え去る。周囲からの侵食も無く綺麗に穴が残り、次々と光球が『現象』を削っていく。

徐々に小さくなっていく『現象』。わずかな時間が流れる間に既に中心である宮殿を残してほぼ全てが消え去ってしまった。

そして、最後に残った宮殿にもついに光球が直撃する。しかしこれまでとは違って宮殿は消えず、さらに他の光球が殺到し収束する。

ドゴオオオオオオン！！！！！！

最後に激しい閃光を放ち、光の収まった後には何事も無かったかのように宮殿が在った。

「どうやら、無事に成功したみたいだね。一応計算と実験から確信はあったんだけど、実際やってみると成功するか不安だったからね。

「デイス・アストラナガンの持つ最大級の武装『アイン・ソフ・オウル』。特殊な装置であるティプラー・シリンドーを用い、対象の時間を逆行させることで存在自体を消し去るものである。」

今回は出力を調整して逆行させる時間を調節することでうまく儀式の結果のみを消滅させることができたのである。もっとも、そのために使い捨ての擬似ティプラー・シリンドーが完成した後に、残り時間のほぼ全てを出力計算に費やすことになった訳なのだが……。まあダメージについては『てかげん』があるから危害があっても何も問題は無いんだけどね。

『こちらディア、現象の処置を完了。これより状況の確認を行い、完全な消滅が確認され次第宮殿内部の探索を行う。』

へ了解、お気をつけて。▽

宮殿内部

む、あれは『紅き翼』じゃないか。

ふむ、戦闘による外傷と消耗以外は無いか。傷もこの場で応急処置を施しておけば問題無い程度だな。

………これでよし、と。人数が多い分時間がかかってしまったかな。

ふらあつ

む、眩暈か…、だが今はそんなことを気にしている場合ではないな。

しかし、周辺のこの惨状、ずいぶんと派手にやってくれたようだね。こちらのメンバーは特に酷い奴等が最近は周囲に被害が少ない戦いができるようになっていくからな。ほとんどは敵の攻撃によるものだろう。

『こちらディア、『紅き翼』のメンバーを発見した。外傷の応急処置は私が済ませておいたので回収を頼む。場所は宮殿中心部からやや南、目印として発信機を残しておく。』
へ了解、直ちに部隊を編成します。✓

さて、ここはこのくらいでいいだろう。
後は『黄昏の姫御子』、か。

まず生きているのか、そして生きていたとしても果たして五体満足なのか、状況が一切不明だが、まだ幼い子供が存在を見放されたのだ、放っておくわけには行かない。

くらあつ

くつ、またか。何だと言うんだ、この眩暈は。

あれが儀式の祭壇か、中心に居るのが『黄昏の姫御子』だな。
見たところ外傷は無いようだが……………。

「まいったな。」

ふむ、この子は因果律に影響を受けてしまっているようだね。

「どうやら逆行の余波をもろに受けているみたいだな。」

宮殿の中心近くとは言え離れた場所にいた彼らと違って、この子の場合中心どころか発生源だったのだから影響が出てしまったのだろう。まあ、その条件だったら『てかげん』があっても直撃弾では死んでいてもおかしくないのだから、生きていただけても儲けものと考えるべきだろう。

意識も失っているようだし、とりあえず連れて帰ろう。詳しい事はここでは分からないが、おそらく肉体の変化、つまり成長は一切できないだろう。もっとも、治療せずとも時間の経過で自然治癒す

る可能性は高いと思うがね。

これでここですべきことはもう無い、あとはこのお姫様を連れて帰るだけだ。

「……？ 転移が……。」

ふむ、通常の転移魔法はできないか……。
なら、こっちで、ね。

「宮殿の外に！ 次元斬！」

本陣

「戻ったぞ。」

「お疲れ様です。宮殿内の『紅き翼』のメンバーには先ほど回収部隊を派遣しておきました。」

「セラスか、分かった。」

「その子は……。」

「ああ、『黄昏の姫御子』だ。どうやら逆行の余波を受けてしまっているようで、命に関わるようなものではないんだが、成長が止まってしまったな。時が経てば自然に回復することも有るだろうし、治療もそう難しいものではないだろう。」

「それならば問題は無いのでは？」

「いや、そんなことよりも心配なのは感情の揺らぎがほとんど無いことだ。祭壇からここに来るまで、普通なら何かしらの反応があっ

てもおかしくは無いのだが、それが一切無い。」

「敵の手によるものでしょうか？」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない。あるいは幼くして家族に見捨てられた境遇ゆえかも知れん。精神的なことだからすぐにと言う訳にも行くまい。徐々に治療して、行…く。」

ふらあっ

ドサッ

これは、まずいな。

すまない、面倒をかけてしまうな、セラス、ナイト。
帰れなくてゴメン、エヴァ。

うう、意識も、保てなく……。

「なっ、ディア様！ディ□▲◆※＊■＋」

この日、世界を二分した大戦争が終結した

その事実にて人々は歓喜し、再び平和を謳歌することのでき

る喜びを味わっていた

一部の者達を除いて

それは信頼する指導者を失った国民であり

それは尊敬する先達を失った探求者達であり

そして何より、姉と慕うかけがえの無い存在を失った妹であった

大分烈戦争（仮称）停戦計画報告書〔最終〕

1. 外交

戦争自体の終結には成功、両陣営上層部に対しても相応の影響力

を得てはいる。しかし、依然としてメガロメセンブリア元老院には腐敗議員が多い為注意が必要。

2. 広域魔力減衰現象

『紅き翼』のアルビレオⅡイマの協力により開発に成功した抑制結界、デアⅡマクダウエルの間逆行を用いた処置により完全に消滅。現時点ではその影響は確認されていない。

3. 『完全なる世界』

『紅き翼』のメンバーからの情報により、敵首領を含む主要メンバー複数の撃破を確認。組織としてはほぼ壊滅状態であり、仮に幹部が生存していれば復活する可能性はあるが、それにも相当の時間を要するものと見られる。

儀式の中核である『黄昏の姫御子』は処置の直後に宮殿内部に侵入したデアⅡマクダウエルが収容、現在はアリアドネーの療養施設にて治療中である。なお、儀式の中核であったために逆行の余波を受け、身体的変化を受け付けない状態である模様。時間の経過により回復する可能性は有るようである。

ただし、詳細な情報は唯一診察の可能な人物であるデアⅡマクダウエルが倒れたため不明である。こちらは処置の反動によるものと見られるが、状態に不明な点が多く回復の見込みがつかないため現状維持を目的として治療を行うものとする。

最後に、本報告の提出時刻を以ってこの戦争に関わる事項への全
ての介入を終了するものとする。なお、これはディアルマクダウェ
ルの遺した指示に基づく決定であり、一切の意義を受け付けない。

第十五話 鋼の救世主《メシア》（後書き）

もうすぐ原作突入なんだぜ！
たぶんあと一・二話くらい？

今回も一応な解説だぜ！

デイス・アストラナガン

言わずと知れたチート兵器

アストラナガンとバルマーの兵器の融合体であるベルグバウに死霊を動力とするデイス・レヴを積んだ物

デザインがアトラスのあの人のため全体的に悪魔っぽくてロボっぽさが足りない

アストラナガンではなくこちらを選んだのはこっちの方が魔術的なエフェクトがあっという間かと思っただから

スペースノア級戦艦

シロガネ・ハガネ・クロガネのこと

現在は六番艦までの建造を進めているらしい

OGの頃の魚雷は異常

外伝 タカミチの受難（前書き）

さっき確認したらユニーク2万超えててびっくりした

こんな拙い文を読んでもくれる人が意外といってくれることに感謝しつつ投下します

今回は外伝です

内容はムラムラしてやった後悔と反省はしていないといえれば嘘になる、な感じで

ちよっと実験的に三人称ベースで書いてみました

外伝 タカミチの受難

それは『紅き翼』がディアに連れられてアリアドネーへと向かう旅路での事だった。

日中ほぼ全ての時間を移動に費やした一行は夜に備えて早めの野営の準備をしていた。

前日にディアは特製の料理をナギとラカンの突発的な喧嘩によって台無しにされたため、柄にも無くすねていた。

当然、今日は何もしてはいない。故に、暇を持て余していたのだった。

そんな訳で彼女が考えたのがこの所研究や仕事が忙しくて風呂に入っていないという事だ。いかに前世が男で、しかも身なりをあまり気にしない性格であるとはいえ600年も女性として生きている以上研究に没頭しているのでもなければ最低限の身だしなみはする。幸い、自分は暇を持て余していて、彼等は皆何かしている。

ならば、水浴びをするのは今しかない！

「私はこれからちょっと出掛けてくる。夕食までには戻るから心配しないでもいい。」

「何しに行くんだ？」

「気にしなくていい、むしろ気にするな。」

「お、おう。」

詮索しようとして薄く笑みを浮かべた顔で威嚇されたナギは前日の惨劇を思い出したのかおとなしく引き下がる。

これは決して彼が情けない訳ではない。その時の様子を見ていた青山詠春は後にこう語る、あれは制裁ではなくまるで調教だった、と。

話を戻そう、魔法や他の技能の習得に伴って使用する機会が少なくなっているが、ディアは地殻レーダーが使える。そのため例えば未知の土地であっても、泉あるいは水脈を容易に探知する事ができるのだ。

それを用いた結果、現在居る場所からほど近い森の中に泉を感知した。ここから距離があまりなかった事が後に騒動を引き起こすのだが、それはまた後で語る事しよう。

水浴びができそうな場所を発見したディアはすぐにそこに向かった。

そして目にしたその場所はまさしく澄み切った泉で、その気が無くてもしてみようかと思ってしまうようなほどのものであった。

あまりに見事な光景にしばし目を奪われ立ち尽くしていたディアだったが、当初の目的を思い出して行動を再開した。

「……………はっ。う、うん、これはいい場所だね。それではさっそく、…変・身!」

言葉とともに光に包まれた彼女の姿が縮んでいく。

「完了、ちんちくりんモード!」

光が収まった後、そこに立っていたのは推定10歳の幼女であった。

説明しよう！

ディアⅡマクダウエルは忘れられがちだが一応神族であるため、幻術等によらず文字通り自らの体を変化させる事ができるのだ！

ただし、完全な他者への変身は非常に疲れるため普段は年齢程度の変化しかしてはいないのだ！

ちなみに、入浴時に幼女化するのは身体を洗うのが楽だからである。決して貧相な胸をごまかせるからではない！断じてない！違うんだ！！

なお、幼女化しているのは近しいものの中では基本的に周知の事実ではある。

「ひぁ・うい・ごー！」

と、ここで奇妙な掛け声とともに突然泉に突入するディア。それにしてもこの幼女一（?）、ノリノリである。

ザパン！！

「ぬお！冷たっ！」

そしてさらに温度も確認せずいきなり飛び込んだため予想外の冷たさに悶える幼女。

テンションが上がり過ぎておかしくなっている様である。

「実にいい気分だ！最高に！ハイって！ヤツだぁー！！！」

訂正、完全におかしくなっている。

ディアが水浴びに行ってから小一時間ほど経った頃。

『紅き翼』の少年A、タカミチは催していた。

しかし今は野営中、当然トイレなど有りはしないが、タカミチが感じているのは尿意ではなく便意である。さすがにこの近くでするわけにも行かず、彼は仕方なく手ごろな茂みで致してくる事にしたのだ。

こそこそ…そろり、そろり

タカミチは脱出に成功した！

ちなみに、普段ならば気付かれてしまうのだが、幸いにも今は全員が全員夕食の支度などで忙しく働いていたので無事に抜け出す事ができたのだ。

しかし、幸か不幸か彼が向かったのはディアが水浴びをしている泉の方向だった……。

その頃のディア

初めこそハイテンションで騒いでいたが、小一時間もはしゃいでいるとさすがに冷静になってきた。

「ふう。」

賢者タイムである。

今はごく普通に水浴びを楽しんでいる

ウフフフ、アハハハハ

これが彼女の普通だと思う。

S i d e タカミチ

「ふう。」

良かった、間に合った。さすがに大きいほうをみんなの近くでするわけにはいかないからってこんなところまで来て、ぎりぎりまで我慢しちゃったから危なかったよ。

さあ、早く戻らないと。

ぱしゃぱしゃ

…ん？

何だろう、水音？何か居るのかな。

……あっちの方だね。行ってみよう！

何か見えてきた……、あれは…泉かな。

…えええ！！女の子が水浴びしてる！？

何でこんなところに？って、それよりもこれじゃあ覗きじゃないか！

……でも、ちょっとくらいならいいよね。

「誰だっ！！」

ヒュッ

うわっ！氷！？

「ひゃっ。」

ばれたっ！声も出しちゃったし、逃げないと！！

「はあつ、はあつ、はあつ。」

なんとか、逃げ切ったかな？

追いかけてくる様子もないし、大丈夫だね。

それにしても綺麗な娘だったなあ。

またどこかで会えないかな、できれば普通のシチュエーションで。
どこかで見えた事があるような気がするんだよね。それに、魔法使
ってたって事はあの娘魔法使いだったんだよね。僕と同じくらいな
のにすごいなあ。

……ここ何処だろう？

ああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！

どうしようどうしようそういえば逃げるのに夢中で道なんか覚えてないこのままじゃ帰れないそれじゃあだめだみんな来てくれない
だろうしこのままじゃ死んじやう死ぬのは嫌だ死ぬのは嫌だああも
う何で覗きなんてしたんだろう覗きなんてしなければこんな事には
ならなかったのにどうすればいいの誰か助けて誰か助けて……………
……………。

……………そうだ、こんなところに居たってしょうがない

「とうとうか。」

どどどどうしよう、なんか大変な事になっちゃった！

「ふふふ、冗談だよ。私はディアマクダウエルだよ。」

「え？それって、どういうこと？」

「私は幻術などで無く、実際に肉体ごと変身する事ができるのさ。まあ、完全な別人になるのは疲れるから普段は年齢くらいしか変えないけどね。」

「へー、そうなんだ。」

「ま、冗談は置いて、君が覗きをしたのは事実だから制裁はないとね。大丈夫、最初に見てからしばらく覗きっぱなしだったのは確認しているから、エロミチ君!」

やっぱりかあ
――――！！！！

Side out

数時間後、そこには元気に走り回るタカミチの姿が！

「もう覗きなんて絶対にしないよ！」

「しないよ、しない……覗き怖い覗き怖い覗き怖いノゾキコワイノゾキコワイノゾキコワイ……………」。

外伝 タカミチの受難（後書き）

三月中はもう投下はできないと思います
次回は四月になります

第十六話 終戦、それぞれの想い（前書き）

遅くなってしまって申し訳ないです

今回は話の都合で少し短めです

そしてかなり説明臭い内容になっています

第十六話 終戦、それぞれの想い

side ナイトガンダム

大戦が終わってから既に二ヶ月が経ちました。

マスターは未だ目覚める気配も無く、事前にその可能性も知らされずにマスターが倒れた事を聞かされたエヴァンジェリン様もまたディア様の部屋に籠ってしまい、あれから一度も姿を現すことはありません。

考えるまでも無く当然の事でしょう。私とて事前に覚悟する事ができていなければ今このような事を考えていることはできなかったでしょうし、ましてエヴァ様にとってマスターは唯一姉と慕う存在、我々以上にその衝撃は大きなものだったであろう事は想像に難くないですからね。

しかし、今はまだ考えている場合では無いのです。

未だ傷が癒えないのはマスターからお任せいただいたこの国も同じ事、今私がすべきはこの国をマスターが戻ってくるその時に胸を張って見せる事のできるようにする事なのです。

とは言うものの、この国の現状は非常に不安定にです。

何よりも、建国以来常に先頭に立って国を動かしてきたマスターの不在に国民全体が大きな不安をいだいており、一向に落ち着く気配がありません。

また、基幹産業である魔工業で使われる卑金属はその大半をマスターが生成する物に依存していたため使用量こそ少ないものの、都市国家であるが故に国土の無い我が国にとっては自力での確保は絶

望的なのです。まして今は大戦争の後、他も国も余裕など無く、輸入もほとんど期待できないので資源不足による影響は避けられないでしょう。

そしてさらに、中央研究所にもかなりの影響が見込まれています。現在進めている研究の多くがマスターの関わっているもので、しかもその半分が中核となる部分はマスター以外の人間では手の出しようの無いもので凍結せざるを得ないのです。

加えて、国外ではメガロメセンブリア元老院の策略によりアリカ王女が戦争を拡大させた罪で身柄を拘束されてしまいました。王も突然の逮捕に強く抗議したようですが、既に身柄を確保していた事もあるって力及ばず王女との面会を許されるに留まったようです。

…もうこんな時間ですか。

演説は苦手なのですが仕方が無いでしょう。この様な厳しい状況では、せめて皆の士気をあげなければ乗り切れるものではないですから。

本来ならばマスター不在の今、適任はエヴァンジェリン様なのでしようが、あのような状態では無理でしょうから同じく建国よりこの国に関わってきて相応の影響力を持つ私にその役目が回ってきただけなのですけどね。

「皆、聞いて欲しい。」

「先の大戦において、我等が指導者ディアマクダウエルが倒れ、未だ回復の兆しは無い。」

「だが、彼女が倒れる前にこの国を頼むという言葉を我等に残した。」

「我等は国を託されたのだ！今はまだ眠っているが、彼女は必ず帰ってくるだろう！」

「その時まで、我等がすべき事は何であろうか？」

「決まっている、彼女が帰ってきたときにこの国の無事な姿を見せる事だ！」

「皆、そのための力を私達に貸してほしい！」

「才才才才！」「」

「厳しい道になるだろうが、我等ならば成し遂げられると信じている！」

「やるぞ!!!」

[illegible]

マスター：、見ていてください。

貴女から託されたこの国、何があっても守り抜いて見せます……！！

Side out

Side
セラス[illegible]

ナイトの演説が始まつたわね。

ディア様が倒れて以来国全体がずっと沈んだままだったけど、この様子ならなんとか持ち直せるかも知れないわね。

悔しいけど、こういう事ではナイトには絶対に敵わないもの……。

私はできる事をするだけ、ナイトと協力して内政を立て直して国を安定させる事に専念する。

そのためには、今は復興のために必要な各騎士団の被害状況の整理を進めないと……………。

パラ：パラ：

はあ、現場で指揮していて分かっていたはずなんだけど、こうして改めて数字にしてみると機甲騎士団と比べて魔法騎士団の方が圧倒的に死傷者が多いわね……。

やはりMS族の基本的身体能力の高さが原因なのかしら。そこだけはどうしようもない部分だからこれまでではできる限り練度を高めるよう訓練に励んできたけれど、それだけじゃ駄目みたいね。

それなら、新装備を作る方向で考えたほうが良いかも知れないわね。その方面の資料なら研究所にかなりの量があったはずだし、手元にはアンジュルグもある。これなら武装までは無理でも高機能で堅牢な鎧程度の物ならどうにかなるはずね。

…

……

……

……

……

……これで中央研究所への申請は済んだわね。

あとは試作品の完成を待つだけ。とは言っても、あちらも大変だろうから緊急性の低い優先順位最低ランクにしておいたからかなり待つ事になるでしょうけどね。

本当ならこんなもの使う事が無いに越した事はないのだけどね……。

………ああ、そう言えばお姫さまの事もどうにかしないといけないんだったわね。

『黄昏の姫御子』、どうしたものかしらね。

アリカ王女が逮捕されてからウェスペリタティア王を通して頼ま

れてしまったけど、今のアリアドネーには少しばかり重すぎる負担にもなりかねないのよね。それでも内密のものとは言え王族直々の依頼という事になるから断わる訳にも行かないし、どうにかするしかないわね。

まったく、厄介事ばかり持ってくるのはあの国の伝統なのかしらね。

ディア様、私達は貴女の帰りをいつまでも待っています。

s i d e o u t

s i d e エヴァンジェリン

終戦から数日後

「うう…、姉さま……、姉さま………！」

どうして！

私に何も言ってくれなかったの？

私が弱かったから？

私はそんなに頼りなかったの？

.....いや、分かってはいたんだ。姉さまが私に心配をかけたくなかったことぐらい。

でも、それでも知らせて欲しかった。
たとえ絶望的な結果であったとしても、私は知らせて欲しかったんだ.....。

今私がすべき事は何だ？

姉さまの治療.....、私にできるのか？

いや、できるのかなんて事は関係ない。

私には姉さまならこんなときにどうするのかなんて事は分からない、だが一つだけ確実にわかる事がある。

それは、姉さまならば何もせずに諦める事だけはしないということだ！

やってやる、やってやるぞ！

幸いここは姉さまの部屋だ、姉さまに関する事を調べるならここ

以上に適した場所はない。例え何年かかろうとも、何十年かかろうともやり遂げて見せよう。

今の私にはそれしかできないのだから……。

さあ、まずはこの辺りにある自身の能力についての研究の書類からだ。

姉さま自身について知らなければ何もできないだろうからな。

そして今に至る

パラパラ……

「ふう……、二ヶ月フルに使ってようやく一割にとどくかどうか。さすがは姉さま、600年分は伊達ではないということだな。」

だが、そんな事では負けはしないぞ。

これが済んだら姉さまの状態を知るための手段、その後には治療法を探さなくてはいけないんだ。

こんなところで躓いてなんかいられる筈がない！

姉さま、待っていてくれ……。

必ず助けて見せるから！

私は！

姉さまを救えるのなら私は地獄を見てもいい!!

今はただ、私の全てを姉さまのために!!!!!!

第十六話 終戦、それぞれの想い（後書き）

今回は自分でもだいぶ不満な出来でしたorz

次回をもっと滾りたい

ああ、ネタは出るのに話にならない……

設定紹介〔大戦終結時〕（前書き）

自分でも良くわからなくなってきたので作ってみた
面倒な人はスルーしてください

4／26 人物以外も有るので設定紹介にタイトルを訂正

あと、精神コマンドについて書き忘れてたので追記

設定紹介〔大戦終結時〕

ディアールマクダウエル

主人公

外見

目と髪は茶色

髪は腰まであるストレート

通常時

ちんちくりん時

見た目 20代前半

10歳くらい

身長 170cmくらい

125cmくらい

体重 標準値くらい

左に同じ

しかし結局胸は無い

年齢…そろそろ700歳

種族…一応神族（大地の神様）

基本の服装…薄緑のローブ的な服

趣味…SRW的装備の研究

好きなもの…エヴァ、趣味の時間、アリアドネー、アリアドネーの
発展を見守る事

嫌いなもの…（孤独）、（失う事）、趣味の時間を邪魔される事、

戦争

性格：趣味人、興味の無い事にはだいたい無関心

表面上は裏表無く気楽な道楽者、他国同士の戦争は趣味の邪魔にならない限りスルー

常に薄く笑みを貼り付けているため内心はともかく表情は喜怒哀楽が分かりづらい

ただし研究モード中はその限りではない

ちなみに実践派学者

基本的に身内には甘い性格だが外敵は過剰な火力で打ち払う

エヴァの事件から失う事を無意識的に恐れているのか？
本人に自覚は無い

なお、貧乳コンプレックス持ち
本人は認めないが自覚有り

技能：OGのパイロット技能全種&示現流（fromリシュウ先生）

精神コマンド（SPはおよそ200ほどでS

P回復は毎分10%の仕様）

消費：覚醒などの上位

精神は60消費

熱血などの中位

精神は40消費

ひらめきなどの

下位精神は10消費

XNディメンジョン（現状では魔法とは別体系の転移手段にとどまる）

R-1、R-3の念動武器は生身で使用できる

(第二話のジェットマグナムはT—LINKナックル)
ただし念動力を使いすぎると倒れる(現在その状態)
大地を操る能力—(地形変化から鉱物生成まで色々できる)

変身(幻術等と違い実際に肉体を変化させる

年齢変更の場合実際の成長に見合った変身になる
ちなみに体型を変える場合は別人扱い
でも別人になるのはすぐく疲れるので普段は年

齢の変更程度しかない

魔法ではないため見破る事はできても困難
実在の人物以外の場合は全く不可能)

主な装備…ゲシュペンスト(OG・ヒーロー戦記の半端ハイブリット)

最初のパワードスーツ、少しずつ改良を重ねている
専用・固定武装…スプリットミサイル・M

メガバスターキャノン(長チ

ヤージの要改良武器)

汎用武装…スラッシュリッパ―

メガビームライフル

M950マシンガン等

いつかはRVに……

デイス・アストラナガン(使い捨て&見た目だけ)

専用武器…アイン・ソフ・オウル(一発限り)

他に武装は無し

まずはアストラナガンかベルグバウからだろう……

シシオウブレード

スーツを出すまでも無い時などに使う剣

基本的にはロマンに因る

現状では名前だけ借りている状態

これも日々試行錯誤を重ねながら改良している品
詠春には敗れている

ヒリュウ（水上船）

速い、異常に速い

しかし欠陥品、乗ると深刻な船酔いに陥る

（しかもなぜか長期間にわたって継続する）

たぶん今頃は改修されて立派なFUNEになっ

ているはず

ヒリュウ↓ヒリュウ改って見た目以外の変更点っ

て何だっけ？

スペースノア級戦艦

最終決戦にて艦隊で投入された

重力結界『超重力アンカー』を艦首に装備した

特殊型

その実体はスペースノアとは名ばかり

テスラ・ドライブ無し、水中不可の魔法世界に

おける通常仕様の高性能艦

現在開発中のテスラ・ドライブが実用化すれば

……

シロガネ・ハガネ・クロガネタイプ以外にもバリ

エーションが欲しい

その他開発物

テスラドライブ：テスト段階、たぶん実用化までは

近い

プリズムファントム：実用化済み、ただし魔力消費

に改良の余地有り

諸々の問題から完成しなかったもの

ヒュッケバイン：ブラックホールエンジンの開発に

失敗

グルンガスト：ブーストナックル後の腕に難有り（
ロマン的な問題）

エヴァンジェリンⅡマクダウエル

義妹

原作との相違点など

ミドルネーム：無し

魔法：変更無し

闇の魔法：開発済み

断罪の剣：なにそれおいしいの？

チャチャゼロ：一応居るが空気以下

茶々丸：まだ

性格：ちよつと素直になっている

魔法以外の

事件の記憶から理不尽な力を嫌っている

装備：ブランシュネージュ

ディア謹製パワードスーツ、変に強い

変更点

デフォルトのアームをビーム（？）ブレードに
してあること

各武装を腕を差し込むような形で保持するよう

にしていること

存在自体がパワーアップフラグ

アルスノーヴァ

ブランシュネージュの支援用ガンシップ

各武装はコイツから射出される

基本はオートパイロット

本体武装はバルカンのみ

シトリー

ペンダントを目印にして展開する方式

今となってはもう予備

たぶん活躍の機会はもう無い

学術都市国家アリアドネー

だいぶマ改造済み

見た目未来都市？

公共交通機関として魔列車を完備

主な産業は魔法工業

学問はライトからマッドまで手広くカバー、むしろマッド比率高し
理論派より実戦派が多い

MS族

機甲騎士団隊長以外にはガンダム系は居ない

一般人はほとんどがジム系で、他に少数ながらメタスやガンタンク？が居る

所謂支援機系は魔法適正が有る事が多い

国立中央研究所

アリアドネーの技術の中枢、別名マッドハウス

所長はディア

副所長はガンタンクR44

常に複数のSRW系技術の研究がされているのは所長の趣味に因る所が大きい

騎士団は二種

機甲騎士団：MS族だけで構成されている

団長はナイトガンダム

各隊の隊長は

一番隊アレックス（混成部隊）

二番隊ゼータ（騎馬隊）

三番隊ダブルゼータ（重装歩兵隊）

四番隊ニュー（法術隊）

五番隊ガンキャノン（軽装歩兵隊）

六番隊ガンタンク（治療・補給部隊）

七番隊ジムスナイパーカスタム（砲兵隊）

八番隊ネモ（格闘家隊）

一般隊員は多くがジム系

ただし四・六番隊は適正の関係からメタスやジムキャノン、ガンタンク？などの比率が高い

魔法騎士団：MS族以外はコチラヘ（亜人、魔族なども）

団長はセラス

装備はアンジュルグ

以下の隊長格は知らん

設定紹介〔大戦終結時〕（後書き）

これだけというのもアレだし次も行くぜ

第十七話 覚醒（前書き）

しかし人物紹介で出した性格が描写できているかと言えば……自信は無い

第十七話 覚醒

ずいぶんと長く眠っていたような気がする

ここは何処だろう

水の中に居るような

空に浮かんでいるような

なんともつかない感じだね

暗い

それに静かだ

何も無い

見渡す限り何処までも続く闇

時間の感覚さえ無くなっていく

自分の身体さえ

まるで自分という存在が無くなっていく様な感覚だ

静寂の世界

彼らもこの様な場所で生命いのちを見守っていたのだろうか

あまりにも永い刻の果てに壊れてしまったのだろうか

それとも

自ら進化する生命いのちに憧れていたのだろうか

憧れて、妬んで、嫉妬に狂ってしまったのだろうか

寂しいな

誰も居ない

エヴァも

ナイトも

セラスも

誰も居ない

嗚呼、もうこの際ナギとかラカンだっバカどもていい

誰も居ないのは寂し過ぎるから

どれだけの時間が過ぎたのだろう

何時間？

何日？

何ヶ月？

何年？

自分以外誰も居ない

何も無く

何かを感じる事もできない

自分の存在さえも

考える事以外何もできない空間

意識を手放す事さえも

辛い

気を紛らわせるための考え事

その最中に思いがけず浮かんだ名案

それを試す事ができないのも歯痒いね

ああ、あれは何だろう

遠くに何かある

はつきりとは見えないけど

エヴァ？

それに

皆？

幻？

でも

今はそんな事はどうでも良い

幻だって何だって良い

皆のところへ！

動け！

動くんだ、私の身体！！

動いてくれ！！！！

動け、動けよ！！！！！！

ああ！！

待って！

待ってくれ！！

行かないで！

もう

私を一人にしないで!!!!!!!!!!!!!!

一人は嫌だ!!

一人は

ヒトリハモウイヤダ

ダレカ

ダレカタスケテ

「誰かつ!!」

「ハアツ……、ハアツ……。」

ここは……、何処だ？
何故私はこんな所に居るんだ？

……頭が痛い。

それに、寂しい……？
何だ、この胸に残る言いようの無い寂しさは……？

いや、それよりも私は一体誰だ？

思い出せない。

何も分からない。

分からない。

分からない、わからない、ワカラナイ、解らない、判らない、分から
ない、解らない、判らない、わからない、ワカラナイ、解らな
い、判らない、わからない、解らない、ワカラナイ、分らない、
解らない、判らない、わからない、分らない、ワカラナイ、分か
らない、判らない、わからない、ワカラナイ。

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
あああああああああああああああああああああああ
ああ阿ああア嗚呼アああ阿ああアああ嗚呼アアア阿嗚
ああアアあああ嗚呼ああ亜亞ああアアああ亞ああ啞ああ
ああアアあああアア嗚呼アあ亜啞亞阿亞ああア亞阿亞アアあああ
あ亜ああア亞あ阿アアあ亜ああアアアア阿アア嗚呼アああアア
アア阿亜亞啞亜！！

チャリン

h?

何かが……首に……？

これは……、このペンダントは……。
そうだ、昔……エヴァにあげた……、まだ……持って……。

………っ!!

そうだ…、私は…ディア…マクダウエル。
この国…、アリアドネーの…指導者。

そして何より、エヴァの…、あの子の………家族だ!!

「誰か!…誰か居るか!」

ダダダダッ

「ディア様!!」「マスター!!」

「ナイトに…、………セラスか。」

「……先ほどの間については気にしないでお願いします。」

「私はどのくらい眠っていた?」

「あの日、ディア様が倒れてから既に15年近くの月日が経つていきます。」

15年…、そんなに眠っていたのか…………。

「マスター、ご無事で何よりです。」

「……私が居ない間苦勞を掛けたな、二人とも。」

「いえ、ディア様を…信じていましたから。」

信じていた……、か。

私はこんなにも想われていたんだな…。

いや……………、何かおかしい。

足りない、エヴァが足りない！

「セラス、エヴァはどうしたんだ？姿が見えない様だが。」

「え？ええと、その…申し上げ辛いのですが、実は…………。」

クソッ、そんな言い方じゃあ嫌な予感しかないじゃないか。

第十七話 覚醒（後書き）

ちよつと展開が強引だった気がするね！
でも負けないよ！（何にかは知らない）

大学が始まったのでたぶん限界は週一になるでしょう

第十八話 インターミッション（前書き）

いやー、気がついたらスパロボクリアしてたんだぜ
勢いって怖いねー

…………ごめんなさい、今度からは気をつけます

第十八話 インターミッション

「…続けてくれ。」

「実は現在行方不明になっていまして…。」

「何だと!!」

悪い予想が当たってしまった、と言う訳か……。

「マスターが倒れてから4年程が経った頃に突然失踪してしまいました。あの日以来マスターの部屋に籠っていた事及びその部屋の状態から考えてマスターの治療法を探していたものと推測されます。」

「そうか……。」

ふーむ、これだけ時間が経過していてなお発見できていないのであれば既に魔法世界を出ている可能性が高いな。

まあ、何にせよ目的がはっきりしているのは幸い、と言ったところだね。

「搜索は？」

「両騎士団各隊可能な限り人員を割いて行いましたが発見には至りませんでした。魔法世界を出たとの情報もあり、団員の大半が旧世界では活動できない事もあって搜索は断念せざるを得ませんでした。」

「そうか、ご苦労だった。」

やはり、か。

ならば私自身が探すしかあるまい。

だが、その前にしなければいけないことが有るな。

「セラス、ナイト、この15年の国内の状況、他国の動き、研究の進展、全てが知りたい。すまないが資料を手配してくれ。」

「了解しました。」

情報を把握できていなければ思わぬところで足をすくわれかねないからね。そうやってしまえばエヴァを探す所ではない。

「お待ちせしました、ディア様。こちらから国内、国外、研究所の順になっています。」

「ご苦勞。集中したいので、すまないがしばらく一人にしてくれ。」
「はっ。」

時間がもったいないな。精神の続く限り『覚醒』して全速力で済ませてしまおう。

さて、まずは国内事情からだ。

……ふむ、国内については一時混乱したもののよく持ち直しているな。

どうやらナイトが表で国民を鼓舞してくれていたのが効いた様だな。だが、それ以上にセラスが裏でずいぶんと支えてくれていたらしい。二人には感謝してもし切れないね。

ふーむ、産業は主原料の供給が安定しないせいで一時期に比べるとうちでも生産量は減っているか……。それでも性能を維持しつつ省資源化するなど私が居たら有り得なかった発展を考えると必ずしもマイナスとは言えないのは救いだね。

む、これは『黄昏の姫御子』……。うちで預かってたのか。成長自体は5年前から再開したようだね。私をもっと早く目覚めていれば……。いや、その場で処置できなかった以上下手にいじるよりは自然に治るのを待つのが最善か。

しかしセラスの肩書がなんか変わってたな。事務方に異動したかららしいが、執政官代行って……。元々執政官なんて役職は無いんだから無理に代行なんてつけなくてもいいのになあ。

ふむ、セラスが事務方に移行した関係でナイトが両騎士団の統合団長になったか。それに伴い両騎士団でずいぶんと大規模な人事異動があったようだな。

騎士団と言えば、セラスの依頼で開発された新装備が魔法騎士団に配備されているね。ふうむ、

ヴァルシオーネか……。未公開のアイデアが採用されているとなると、あきらかに部屋を漁ったとしか思えないな。……。いや、どうせエヴァに手当たりしだい読破されていただろうしもうこの際そこはどうでもいいか。

……………どうやら国内についてはこれで一通り済んだようだな。

次は国際情勢だな。

………むう、アリカ王女が逮捕、処刑か。『黄昏の姫御子』の件はこれが原因だったようだな。実際状況を引っ掻き回してくれた事もあるだけに口実には困らなかっただろうがなあ。まったく、メガロの老人共は碌な事をしでかさないね。

まあ、処刑自体はナギが妨害しているみたいだし良いか。奴等、失敗を隠蔽して処刑が無事に済んだことにしているな。なんとも滑稽な事じゃないか。

ただ一つ、それがウェスペリタティア王に対して痛手だったのは確実な様だ。もともと体は丈夫な方ではなかったらしいが、戦後復興と王女の逮捕・処刑による心労が重なって倒れてそのまま……か。一時傀儡と化していたとは言え為政者としては優秀な人ではあったからな、惜しい人を亡くしたものだ。

しかも、王を亡くした事で公式には王家の血が途絶えた事になってしまったな。これでは遠くない未来、ウェスペリタティアは連合・帝国のどちらかに実効支配される事になるだろう。個人的には連合、もといメガロが強行するに一票、と言ったところかな。

それで、ナギ自身はと言えば連合に立派な魔法使いとして祭り上げられた挙句に5年前に死亡が発表された、と。アレは寿命以外で死ぬような奴じゃないから何か理由があって潜伏しているのだろうかね。

で、5年ほど前にナギに息子が産まれて、しかも昨年には預けられていた村が襲撃を受けて壊滅するとはね。詳しい情報が入らない以上なんとも言えないところはあるが、十中八九メガロの連中の仕業なんだろうな。ナギの息子は無事だったらしいが、それ以外の生存者はほぼ無し、か。なんとも：ねえ。奴のお相手は大よそ想像つくけど、息子君もずいぶん厄介な血を引いてしまったものだね。こればかりは同情せざるを得ないよ。

……………ふう、これで国外も終わりか。情報自体は多かったが、旧世界の情報がほとんど無いのは仕方ないと言えば仕方ないからね。

……………ふはははっ！！

最後はお楽しみの研究所の報告だ！

……………ほう！ついにBHエンジンフラックホールの試作品ができたか。

アルの協力のおかげで重力魔法そのもののノウハウは蓄積できていたにせよ、本来は私が付きっ切りで開発する予定だったものをよくもたかだか15年で試作段階にまでできたものだね。案外、十分な知識さえ蓄えられてれば私よりも優秀なんじゃないだろうか……。それにテスラ・ドライブも大型サイズではほぼ完璧に実用化できているし、後は小型化するのみ、と言ったところだね。

しかもプリズムファントムの燃費まで改善されているね。これなら私やエヴァ以外でもそれなりの稼働時間が確保できそうだ。

他の物もかなり開発が進行しているようだし、これなら私がかか

りきりにならなくても大丈夫だろう。

.....よし、この実験記録で最後だね。

ふう、これで大体の状況は把握できたな。

どうやら今私がすべき事はあまり無さそうだな。

とりあえずは研究所に行って研究成果を直に確認して、凍結中の研究をどうにかしておきたい所だね。

ま、大体は簡単なアドバイスくらいで済むだろう。どうやらこの15年で私でなければ進められない研究と言うのも大幅に減ったらしいからね。

：

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「これで準備は完了したな。」

まあ、いざとなればセラスやナイトも居るし、これだけやっておけば私が常駐していなくともそう問題は起こらないだろう。

これでやっと出発できる……。

国家元首にして賞金首と言う面倒な立場だからおおっぴらに出歩くのは問題があるが、さすがに旧世界は自分で探索するしかないしね。

……いや、むしろ外にはまだ目覚めた事は発表していないからばれたらもっと面倒な事になるか？

まあ、自分から明かさない限りは露見するような事は有り得ないと思うから大丈夫だろうけどね。

「…さてと。」

「エヴァンジェリン様を探しに行くのですね。」

ぬおうつ！

……って、なんだセラスか。脅かさないでくれよ。

一人になってからかなり動き回ってたのになんでいきなり出て来れるんだ。忍者か、お前は！

「ああ、エヴァは大切な家族だから、ね。」

「どうか、お気をつけて。」

「行ってくるよ。」

「待つて。」

『黄昏の姫御子』……………？

「これはこれは、お姫様。一体「アスナ。」…?」

「アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。」

これは、名前で呼べって事かな。

「それではアスナ、私に何の用かな?」

「わたしも連れてって。」

そう来たか。

「…私はこれでも一応名の知れた賞金首でね。アリアドネーの国内ならばともかく、外に出れば私の首を狙う者も少なくは無いだろう。そんな私の旅に着いて来るという事がどういう事か、分かっているのかな?」

「…分かってる。ディアはわたしを助けてくれた。だから、今度はわたしがディアを助ける。」

どうやら意思は固いらしいね。

「セラス、どういう事?」

「ディア様に助けられたのを覚えていた様で、強くなると言って聞かなくて…。普段の学業の他にも、ほとんど毎日騎士団の隊長たちに稽古をつけて貰っていたそうです。」

「ふむ……。」

「今では機甲騎士団の隊長でも十回に一回は引き分ける程の強さで…。」

「強さは問題なし、ね。」

報告書見る限り通常業務だけでも目が回るような忙しさだったろ

うにねえ。なんと言うか：隊長達、ご苦勞様。今度何か埋め合わせしないとなあ……。さすがにこれは、ねえ。

ナイト達やアルガス組を相手にして今まで訓練を続けてこられたのなら、その精神の強さはもはやいうまでも無い。彼らの訓練の苛烈さは十分に知っているからな。

ならば、残るはその意志を測ることのみ。

その心、試させてもらおう。

「ならば問おう。」

「……！」

「これより私が進むのは当ての無い旅路だ。何処まで続くのかも分からない。時には戦い、自分の命を危険にさらし、人を殺めることもあるだろう。アスナ、君にその覚悟は有るか？」

「ある……！」

「……………」

「……………」

なんか見つめ合ってたら私の方が気まずくなってきたよ。
強い意志の宿ったまっすぐな、いい眼をしているね。

「：どうやら覚悟は本物のようだね、アスナ。支度をするから着いて来なさい。」

「うん。」

そういえば昔エヴァともこんなやり取りをしたなあ……………。

「ああ、ウェスペリタティア王家は公には断絶している事になっているからアスナには偽名を名乗ってもらうよ。私も面倒事は避けたいから偽名にするしね。」

「わかった。」

エヴァ、待っててね。

今行くよ……………。

第十八話 インターミッション（後書き）

ふう、ぎりぎり間に合ったぜえ

再世編早く出ないかなー

後悔はしているけど反省はあんまりしていない

第十九話 家族を求めて（前書き）

うーむ、途切れ途切れでGWって感じがしなかったのに確実に生活リズムは狂う不思議

とりあえず投下

第十九話 家族を求めて

さて、エヴァを探しに旅立ってからそろそろ三年目が終わろうとしている。

ちなみに、アリアドネーで使う私由来の物資とか思い付きで開発した物とかは、向こうにガイドポストを設置して月一くらいで定期的に次元転送している。さすがにまったく無くても問題無い物ではないし、無事を知らせる連絡も兼ねているからね。

初めの一年は念のため魔法世界全体を探索してエヴァがいないことを確認して、次の一年は主に旧世界のヨーロッパ付近を重点的に捜していた。もっとも、ヨーロッパから探し始めたのは、一応は賞金首であるのだから堂々とゲートを使う訳にも行かないと考えて、次元斬で移動しようとしたら旧世界上の転移目標の座標が初めに魔法世界に来たときの場所しか分からなかったただけなのだけどね。

目的が目的だけに魔法関係の情報を得る必要もあったので、メガロの力に頼る形になるのも気に食わないが多少の正体露見のリスクは承知の上で各地の魔法協会を当たってみるも残念ながら収穫はまったく無かった。

その道中で感じた事だが、アスナはどうやら感情表現があまり豊かではないようで、18年前に私が助けた時と比べれば……と言う程度である。原因はおそらく私が倒れてからの15年間ずっと学業と訓練に没頭していた事だろう。聞いたところによると一日のほぼ全てをそれらの時間に当てていたらしいから当然と言えば当然だろう。まあ、無愛想とは言っても、一応この3年でだいぶマシになった方ではあるんだがね。

なお、偽名は私がラトゥーニースウボータ（愛称はラト、当然私はちんちくりん状態である）、アスナはなんとなく日本風にして苗字を変えた渚明日菜とした。

ちなみに危惧していた賞金首には遭遇せず、変態（＝変質者）を五十人余り撃退している。（埋めた、ただし死なない程度に）

一昔前なら莫大な賞金に釣られた奴らが次々とやって来たものだが、さすがにちんちくりんモードと偽名のダブル効果で完全に誤魔化せているらしい。その分幼女の二人旅ということで変態どもに盛大に絡まれた様だ。以上。

現在は既にアジアも終わりに近づいてそろそろ日本だと言うところまで来ている。

「はあ、三年かけて手がかり無し、かあ。」

「しょうがない。当てが無いって自分で言ってた。」

「うん、まあそうなんだけどね。さすがに足取りの一つも掴めないのはキツイのさ。」

ふう、もうそろそろ日本か…。一応前世での故郷だけどころも空振り続きの状況じゃ素直に喜べないなあ。

「ん？」

「どうしたの？」

「いや、何か気になる気配がね。」

うーむ、薄いがこれは、何となく覚えのあるような…。

うん、まあ空振りでもいいからとりあえずこの気配を追いかけて

みよう。近づいてみたら詳しく分かるだろうし、どうせ手がかりも無いのだから問題ないだろう。

ふーむ……方角は……なるほど、日本の方か。まあ、行く当ても無いのだし丁度いい、約700年ぶりの里帰りと行こうじゃないか。

「次の行き先が決まったよ、アスナ。」

「さっき言ってた気配？」

「うん。日本の方から感じててね、日本にも魔法関係の組織があるから丁度いいと思ってね。」

「そう。」

「だから、まずは船を出すために海に向かうのさ。」

よし、ここなら船が出せそうだな。

「出る、ヒリユウ・カスタム！」

うーん、このデザインでも大丈夫だね。……たぶん。

「これは何？」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれた！このヒリユウ・カスタムは基本性能以外は最悪だったヒリユウを改修した機体なのだよ！劣悪だった乗り心地は試作型テスト・ドライブを搭載して慣性制御する事で改

善、装甲及び速力も当社比三割増しの上、武装として魔導ビーム砲を搭載してついでにプリズムファントムまで付けたファンタスティックな逸品なのさ!」

「……そ、そう。」

「うう、そんなに引かなくなっているじゃないか……。だが構わん！ さあ、乗るんだ！」

ふははははは、逃がさんぞー！乗せてやるー！

「乗らない、乗らないよ！むしろ自分で泳いで行く方が良いから！」

「いいではないか、いいではないか！」

はっはっはっはっ、私から逃げようなんて六万光年早いのだよ。

「 $\zeta\zeta\zeta$ 」

「プリズムファントム起動! いざ、発進!」

ズゴアーーン（注：これは発進時の音です）

「わきやあああああああああ……！！！！！！！！！！」

「はあーっはっはっはっはっ！」

「改修後に実際に乗るのは初めてだったが、ずいぶんと乗り心地は改善されていたな。」

「あ、あれで、か…改善されてたとか、…アリエナイ。ぐふうっ。」

ふむ、どうやら順調に近づいているらしいな、気配が普通に感じられるようになってきた。場所は、ここからかなり東に行った所のようなのだ。しかしこの気配、知っているような気がするんだが何だったかな。

近くには強烈な樹木の気を感じるな。この距離でこの強さである事を考えるにおそらく神木とか世界樹とか言われるクラスのモノだろう。確かそんなのが日本に有ると聞いたことがあるな。

「さあ、行くぞアスナ。」

「うう、ま、待って、まだ気持ち悪い。」

ああ、そういえば詠春が京都だったかで魔法関係の組織の長やってるとか報告にあったな。まあ、急いでいる事だし後回しでもいいな。元々いつまでかかるかも分からない旅だったんだし、二度手間の一つくらい問題ないだろう。まあ、当たり前だったとしてもそのうち顔でも出しに行こうかとは思っているがね。

「ん？まだダウンしてるのか。しょうがないな。」

「え？ちょ、ちょっと。これって？」

「動くなよ、今の体格差じゃこの体勢でしか抱えられないんだから。」

アスナはどうしたんだ、急に顔を赤くして。……まあ、いいか。

さて、気配を追って彷徨っていたらとうとう関東平野にまで来た訳だが。

ここまで来るとさすがにずいぶんとはっきり感じられるんだが、いまだにそれが何なのか思い出せない。いつかどこかで感じた事があるのは間違いないのだけど、頭に靄がかかったように答えに辿り着く事ができない。

「うーん……。」「

「どうしたの？」「

「この間から感じ続けている気配の正体がどうしても思い出せなくてね。心当たりはあるのにどうしても答えに行き着かないのがどうにも気分が悪くてね。」「

「思い付かないんだったら考えていたって始まらない。行けば分かるのだからとにかく行動すればいい。」「

「まあ、実際そうなんだけろうどね。」「

「ラトはいつも頭で考えすぎ。」「

「ははは、確かにそうだね。」「

実際に会えば分かるのだから、ここまで来たのなら考えるまでも無いか……。確かにそうだね。

「それじゃあ、そうと決まれば急いで行こう。」
「うん。」

ああ、そう言えばこの近くには関東魔法協会とか言う魔法関係の組織があったな。場所は確か埼玉の麻帆良だったか、気配もその辺りだし、ついでに話を聞きに行こうかな。

しかし日本に魔法関係の組織が二つもある理由はそれらの名前を見れば一目で分かるからな。関東魔法協会と関西呪術協会、どう見ても日本古来の呪術と西洋の魔法の対立ですねー。

アスナの言うとおり、気にしていても仕方ないね。気配の正体は自分の目で確かめる事しよう。

いやあ、気配を追ってきたらちようど関東魔法協会のあるらしい麻帆良学園都市に着いたね。

しかもその気配がここまで強く感じられるようになってようやく分かったよ。

ブランシュネージュの飛行ユニットの補助動力として搭載してある試作魔法石だね。その魔法石は後でバリエーションやらバージョンアップやらして原型をとどめなくらい改変されてたから、初期型のことなんてついさっきまでほとんど忘れてたよ。どうやら一応自分の身から生み出した物だから遠くからでも気配を感じる事ができたみたいだね。

まあ、何が言いたいのかと言うと、つまり、何らかの事情がない限りここにはエヴァが居るという事なんだ！

眠り続けた15年、目覚めてからの3年、捜し、求めてきた家族が！

だが、この結界は不快だ。軽く見ただけでも通常の結界の効果の他に何らかの精神的な効果――おそらくは意識を一定の方向に誘導する程度の物だろうが――があるのが分かる。

正直な所、エヴァの為でなければまず自分から足を踏み入れようとは思えないモノだ。

しかし、エヴァが居る。

それだけでその全てを無視できる。彼女は私のたった一人の家族なのだから。

「行こう、アスナ！」

「うん。」

…!!

これは…、エヴァの魔力！？結界に入った途端に感じるなんて、いや、そんな事は今はどうでもいい！

…あちらか？…いや、こちらだ！

ええい！何故だか知らないが魔力が弱弱しくて正確な位置が掴み難い。

『探索』では人を探すには不向きだ。ここまで近づいているのだからむしろ自分の目で、足で探した方が早いな。

「アスナ、着いて来い！」

「あっ、待って！」

何処だ！何処に居るんだ！

森の一軒屋

……ここだ。間違いなく、ここにエヴァが居る。

ガチャ

キ
イ
:
:
:
:
:

第十九話 家族を求めて（後書き）

誤字脱字や不自然な表現等指摘していただけるとありがたいです

次は少し早めに投下できるかも

くそう、少し前にもう少しで原作突入とか書いてたのに全然話が進まない…orz

第二十話 再会と世界樹と（前書き）

修正したり書き直したりしてたら思ったよりも早くならなかった

とりあえず再会

そして世界樹との二本立て

第二十話 再会と世界樹と

ドアが、開いた。

「どちら様でしょうか？」

誰？

「あ、ああ、私は……。」

魔力反応を見る限りここにエヴァが居るのはほぼ間違いないが、果たしてこの場で素性を明かすべきなのだろうか……。確実なのはエヴァが『居る』事だけであって、今出てきた人物が敵でないという保証はどこにもない。むしろここがどこなのかを考えれば味方である可能性のほうが高いと考えざるを得ない。

「どうかなさいましたか？」

「いや、なんでもない……。」

「なんだ茶々丸、誰か来たのか？」

「ッ！」

やっと…、やっと会えた！

もう、二度と離さない！

私の大切な、この世でたった一人の義妹^{カソク}。

「エヴァ!!!」 「姉さま!!!」

「逢いたかった、ずっと…探していたんだ!」

「私も、姉さまが帰ってくるって…信じてた!」

「ごめん…、心配かけて本当にごめんね。」

「いいよ、もう。こうして帰ってきてくれたんだから。」

「あの…、マスター、そちらの方は一体…。」

「あ、ああ、スマンな茶々丸。このヒトは私の姉だ。」

「と、申しますと…あの?」

「そうだ。」

「申し遅れました、私はマスターの従者を務めさせて頂いている絡繰茶々丸です。」

「よろしく頼むよ。」

おっと、そういえば私もアスナを紹介するのを忘れていたな。

「あー、アスナ!入ってきて!」

「…遅い。」

「いやあ、ごめんごめん。エヴァ、紹介するよ。エヴァを探し歩いていた3年間の旅の連れだったアスナだ。今は渚明日菜を名乗らせているよ。」

「ヨロシク。」

「アスナ、と言うとあの…。」

「そう、そのアスナだね。」

いやあ、察しが良いねえ。ま、普通にアスナがそれだけの存在なだけなんだけどね。心当たりもかなりあるしね。

「しかしエヴァ、見たところ何らかの呪いが掛けられているみたいだけど何があったんだ。その弱弱い魔力と関係が有るのか？」

「ああ、これか。これは、姉さまの治療法を探すために図書館島の蔵書が必要だったから、私がここに滞在し、図書館島を利用するための条件として魔力を制限されたんだ。それだけならまだ良かったんだが、弱っているところを突かれてこの登校地獄とか言うふざけた呪いを掛けられて終わらない中学生をやらされているのさ。」

「私の為にそんな事に……、ごめん。」

「いや、もういいって言ってるじゃないか。」

……

……

……

…

おっと、もうこんな時間か…。

どうやら時を忘れて話し込んでいたみたいだね。いい加減眠くなってきた所だけど、最後に一つだけ話しておかないといけない事があるな。

「ねえ、エヴァ。」

「何だ、姉さま。」

「アスナをここで学校に通わせようと考えているんだ。」

「何を考えているんだ。ここは直轄でないにしろメガロの勢力圏内だぞ。」

「だからこそだよ。灯台下暗しってやつさ。」

それに、私も図書館島には興味があるからね。まあ、怒られるだろうから口には出さないけど。

「ふむ、確かにこんなところに堂々と居るわけがないと奴らも考えるかもしれないが、万が一のときにはどうするつもりだ。」

「それも問題はほぼ無いよ。保険はいくつか考えてあるからね。」

「それは？」

「秘密さ。楽しみにしていると良いよ。」

「いや、そんな言い方をされたら余計不安になるよ…。」

「はっはっはっ、大丈夫大丈夫。」

ま、間違いなく呆れられるだろうがね。

翌朝

……エヴァはまだ起きていないみたいだね。

さて、しばらくの間厄介になる事だしこの土地の主にし挨拶をしてこようかな。

茶々丸は起きて(?)いる様だし、伝言を頼んでから行けばそう心配もかけないだろう。

「茶々丸、と言ったかな。」

「ハイ。」

「これから出掛けるので、エヴァとアスナの二人に少し伝言を頼まれて欲しい。私はあちらにある大木の所に行って来るけど遅くとも昼頃までには帰る、とね。」

「分かりました。」

……しかし行くにしても歩いて行くのはこの辺りの地理には疎い少々面倒だな。目に見える場所なのだから一気に転移しても誰かに見られなければ問題ないだろう。幸いあれだけの大きさだから頂上付近ならまず安全なはずだしね。

まあ、転移するなら普通の転移魔法使って嗅ぎ付けられるのも面白くないし、XNディメンジョンを使う方がいいかな。

「何にせよ、行くなら早いに越した事はないってね。……次元斬！」

世界樹頂上付近

うん、出現場所は完璧ってね。

時間も早いし周囲には人の気配も無いから見られたはずも無い。

さてと、さっさと挨拶を済ませてしまおうかな。

そう言えば…………話すのは一応根元の幹の方が良いだろうな。
降りるのも面倒だけど、さすがに根元に転移するのは誰かに見られるかもしれないし、ねえ。これじゃあ歩いて行くのも大して変わらなかったかもしれないなあ。

はあ、こうして考え込んでてもしょうがないし、行こうか……。

世界樹根元

ふう、疲れた……。

いや、肉体的な疲労は無いんだけど精神的にね。人の気配は無かったけどあまり目立つものではないと思っただけなら一気に飛び降りるところか駆け降りるのも躊躇われたから、普段遣わない気を遣ってずいぶんと気疲れしてしまった。

さて、樹木との会話なんて傍から見られてもそこまで問題になるような事にはならないだろうが、かと言って堂々とするものでもないし、早めに終わらせてしまおう。

さすがの私も樹木とは普通には話せないから、相応の手順を踏まなければならぬね。

まずは手を当てて、次に意識を集中して潜り込ませる。そこからさらに深く、深く『同調』して、最後に精神を繋ぐ。

……………よし、成功つと。

―やあ、はじめまして。

―……………えっ！？えええええ！かつ、神様？わ、私は蟠桃と申しますっ！見ての通りの大木ですっ！

―おっと、名乗りもせずに失礼したね。私はディアマクダウェルと言う。

―あ、貴方様の様なお方がどっ、どうして、このような所にいらっしゃっちゃったりしちゃったのでございますのでしょうか？

―訳あってしばらくこの地に滞在する事にしたのでね。この土地の主であるキミに一言挨拶をしに来たのさ。あと、少し落ち着け。言葉遣いが崩壊しているよ。

―わ、わわわ私の様な者の為に態々ご足労頂けるなんて光栄ですっ！
（ちよつと落ち着いた）

―いや、そんなに畏まらなくてもいいから…。

―い、いえっ、そんな恐れ多い事をする訳には参りません！

―私がそういうの苦手なだけなんだけど……。いや、もういいや…。それじゃ、しばらくはここに留まるつもりだから宜しく頼むよ。

―はっ、はひっ！

ははは、こうも畏まられるとなんかも苦笑いしか出ないね。すっかり忘れてたけど、私って一応本当に神ではあるからねえ。しかも大地を司る神とくれば、大地に根付く植物から見たら確かに畏れ多い存在だよな。

まあ、一度こうしてパスを繋いだから、これからはこの都市の中くらいの距離なら間接的でも地面に触れてさえいれば自由に話せるようになるだろうね。そんなに頻繁に話す事もないだろうけど、会話するたびにいちいち畏まられるのも面倒臭いし、せめて普通に話せるくらいは親しくしておこうかな……。

ふう、主(?)への挨拶も済んだし、一度家に帰って、それから魔法協会の理事長とO H A N A S H Iして、その後はエヴァといろんな話をしよう。これから時間は沢山あるけど、それでも、ね。

第二十話 再会と世界樹と（後書き）

誤字脱字や不自然な表現等指摘していただけるとありがたいです

ああ、早く原作開始に辿り着きたい

第二十一話 仮契約と交渉と（前書き）

ぐふうっ

交渉ごとなんぞ全然分からんしジジイの口調もサッパリなんだぜ
…今回もまた二本立てになってしまったorz

第二十一話 仮契約と交渉と

……………何故だ。

世界樹から戻ってからずっとエヴァが（物理的に）くっついて離れない。

挨拶が予想よりは早く済んだから十時前には帰れたのはいいのだが、帰るなりエヴァが抱きついてきた。しかも離そうとしても離れないからそのまま出掛けようとすればそれも阻止される。

どうやら私がまた居なくなる事を恐れているようなのだが、予想していたよりも遥かに重症らしい。

ちなみにどうでもいいことだが、今の私はちんちくりん状態なので傍から見ると10歳程の女兒が同い年くらいの女兒にしがみついているというよくわからん状況に見える。何をどう間違っても姉に甘える妹なんて状況には見える事は有り得ない。

さて、どうすればエヴァは安心してくれるのだろうか。

あの時はエヴァに何も言わずにあんな事になった訳だし、そもそもあれだけ重症では言葉では到底効果があるとは思えない。他の手段として高が知れている。

はあ、あまり気は進まないが目に見える形で絆を作るしかないか

な。

そう、仮契約だ。

仮契約とは、魔法使いとその従者の間に魔力のパスを作る儀式：の制限付き簡易版なのだが、今回の場合はそのパスと契約の際に出てくるカード重要だ。それに主は従者を召喚する事ができるからね、これで駄目ならもう打つ手は無いよ。

本当なら私達には特に必要が無いものだし、必要が無いのなら義姉妹間でするものではないと思うんだけどね。

「ねえ、エヴァ。」

「何だ、姉さま。」

改めて言うが、今エヴァは私の背中にくっついてる。

「仮契約、しようか。」

「急だな、一体どうしたんだ。」

「私もね、不安なのさ。エヴァがどこかに行ってしまったかわからないから、目に見える絆が欲しいんだ。」

「そ、そうか、姉さまがどうしても言うのなら、私は構わないぞ。」

ん、成功成功。

まあ、さっきの言葉も半分は口実としてだけど、もう半分は本音だったんだよね。

「やるなら早いほうがいいけど、主従はどうする？」

私としてはどちらでもいいけど、こればかりは一人で決めるものじゃないからね。

「わ、私は姉さまの好きな方でいいぞ。」

「じゃ、どちらがって感じでもないし相互にって事でいいかな？」
「うん。」

それじゃあ、始めよう。

まずは仮契約の核となる魔法陣を展開する。私は儀式とかそっち方面の知識はそれほど多くないので改変は一度で相互契約になるという点のみ。

次の仮契約その物の方法についてはキスが一般的な訳だが、さすがにそれはなんか問題な気がするので血を介した手段を採る。

「準備はいいね。」

「も、勿論だ。」

「それじゃあ…、いくよ。」

……………血が出ない。

正確には血が出る前に傷が塞がる。なんという事だ、これも神の肉体のパワーなのか！？

くっ、これでは仮契約できない。何か、何か血を出させる手段は無いのか？

「ごめん、エヴァ。ちょっと待って。」

方法を！血を出す方法を考えなければ！

………ありませんでした。

注射器を使えば血は出せるんだが、それでは駄目なようだからね。

………仕方ない、このまま互いに不安を抱き続けるよりはいつそ………。

「ごめん。当初の血を使った仮契約ではなく、キスによる仮契約に変更するけどいい？」

「い、いいぞ。む、むしろ………。」

「むしろ？」

「い、いや、なんでもない！それより早く始めよう！」

「？……まあ、それもそうだね。それじゃあ、改めていくよ。」

魔法陣発動、正常。

動作確認。

チュツ

— 仮契約 —

あ、ちよつと気持ちいいかも。

「終わった…？」

「その様だね。これが契約のカードかな。」

「ふ、ふふふ、これが、私と姉さまの…。」

「エ、エヴァ、大丈夫？」

「……」

駄目だこりや。

数分後

「おい、エヴァ。いい加減戻っておいで。」

「うふふふふ…ふ？はっ、な、何か用か姉さま？」

「あー、うん。ちよつとこの理事長さんと O H A N A S H I したいのさ。それでね、ちよつとしたいことがあるからできればエヴァにはここに残っていて欲しいんだ。」

「分かった。」

うん、醜態については触れないでにおいてあげるのが優しさだね
……？

ようやく理事長さんの所に行けるね。

せっかくだからいきなり目の前に転移して驚かせてみるのも面白いけど、そうするといらぬ警戒心をもたれちゃうからね。今回の訪問では、初めにエヴァの件についてのあちら側の反応を見たいから可能な限り普通の魔法使いとして認識してもらいたいし、自重すべきだろう。

さて、確か理事長は麻帆良学園の学園長を兼務していたはずだったな。まだ日も傾いていないし、この時間帯なら特に用事でもなければおそらくは学園長室に居るだろう。で、肝心のその場所は……：、学園都市最奥部女子中学エリア内だと……、地理的に見ても機能的に見ても意味が分かん。普通中央とかせめて女子校エリア以外の場所じゃないのか。もしかして理事長はそっち系の趣味なのか？

まあ、例え理事長がそうだとしても私には何一つ問題無いからいいんだけどね。

時間はあると言っても無駄な時間を過すつもりは無いし、意味の無い考え事なんてしてないで、さっさと行こう。

どうやら、ここが学園長室らしいね。

「っ！…やあ、貴方が関東魔法協会理事長さんかな？」

何だあの頭部は、あれは本当に人類なのか？宇宙人とか妖怪と言われる方がまだ納得できる形状フォルムじゃないか。

「…人に名前を聞く前に自分の名前を言う物じゃないのかの。」

「ふむ、それもそうだな。私はラトウニースウボータという、ただの魔法使い、さ。訳有って人探しをしてもう数年になるのだが、これがなかなか見つからなくてね。関東魔法協会の理事長である貴方に心当たりでもないかと思って訪ねたのさ。」

「ほう…、そうは言っても一個人の行方なぞワシには分からんぞ。」

「何、ちよつとした有名人だよ。『闇の福音』エヴァンジェリンⅡマクダウエル、さ。」

「知らんの。」

ふむ、即答で白を切るとはなかなか……。
なら少し『威圧』してみようか。

「本当だね？」

「っ……勿論じゃ。」

ふん、多少は怯んでも事実を話すつもりは無い、と。
ならば、こちらもそれなりの態度で向かうとしよう。

「ほう…では、嚴重な抗議の上相応の対応をせねばならないな。」

さあ、ちんちくりんモード解除だ。

「っ!!!お主はっ!」

「『^{ダークフレイム}暗黒の叡智』『漆黒の堕天使』どちらでも好きなように呼べば良いさ。関東魔法協合理事長殿。」

「ぬう、お主が目覚めたという話など…。」

「私の情報は元々機密扱いだし、外部に漏らすことの無い様指示してあるからね。情報が漏れる事など有り得ないよ。」

しかし、それもどうでもいいことだ。

「だがね、今大事なのはそんな事よりも貴方が私の妹を^{カヅク}不当に拘束している、という事さ。ああ、言い逃れは無駄だよ。既にエヴァに事情を聞いて、裏も取ってあるからね。」

ま、半分はブラフだけどね。

「…既に退路は断つてある、と言う訳じゃな。」

「まあ、今日の私は非常に機嫌がいいから、条件付きで今回の件は不問にしても良いと考えている。」

「……。」

「…そうだな、まず初めに麻帆良学園女子中等部に私ともう一人を編入してもらう。クラスはエヴァと同じにしてもらう。次に、エヴァを含む私達全員に図書館島の蔵書を無条件で閲覧させてもらう。」

また、言うまでも無い事だが、当然エヴァの呪いも解除させてもらう。元々そちらが不意打ちに近い形でかけた物だからね。」

「…仕方あるまい。」

鞭は十分、この辺りで飴を与えようかな。

「まあ、私も鬼ではないからね。学園の警備くらいなら手伝ってやろう。余程恨みを買っているらしいね、昨晚も襲撃があったみたいじゃないか。」

「お主の力は十分知っておる、その力を貸してもらえるのなら願ってもないことじゃが…。」

「なら、決まりだね。今晚辺りにでも顔合わせをしよう。あと、分かっていると思うが、私は警備も含めて表向きはあくまで『ラトウニースウボータ』として行動するよ。面倒はごめんだからね。」

「う、うむ。」

さて、これで用事は大方済んだね。

「それじゃあ、話も終わったし、私は帰るとするよ。顔合わせの手配、よろしく頼むよ。」

歩いて行くのは面倒だし、帰りは転移にしよう。

くオマケく

ディアllマクダウエル契約カード

従者名

ディアllマクダウエル

称号

鋼の救世主^{メシア}

数字

20

色調

銀と茶

徳性

知恵

方位

中央

星辰性

地球

エヴァンジェリンllマクダウエル契約カード

従者名

エヴァンジェリン・マクダウエル

称号

氷雪の女王

数字

26

色調

紫

徳性

信仰

方位

北

星辰性

月

第二十一話 仮契約と交渉と（後書き）

誤字脱字や不自然な表現等指摘していただけるとありがたいです

アーティファクトについては一応幾つか案が有るからそのうち一つに搾ってお披露目という事で

第二十二話 月下に妖精は舞う（前書き）

最近リアルが忙しくてただでさえ不定期な更新が遅くなる方向でさらに悪化してしまいました
今後遅くなるかもしれません

第二十二話 月下に妖精は舞う

……良い月夜だ。

こんな夜は何か、非常に気分が高揚する……。

まあ、学園の警備に手を貸すと言って今夜顔見せすることを強引に決めたから、その顔見せのための集合場所に向かっている最中なんだけどね。

本当はエヴァとアスナも着いてくるって言ってたんだけど、一応正体を隠している身だからね。アスナはともかくエヴァは私のことを姉さまって呼ぶのが癖になってるからふとした拍子にそう呼ばれたら間違いないだろう。ただでさえエヴァンジェリンⅡマクダウェルが行動を共にする事で疑いの目を向けられかねないのに、彼女が姉と呼ぶ人物なんて唯一人しかないのだからね。そうなればただでさえエヴァという高額賞金首を学園内に抱えている事に不満を持つ輩が何をするかわかった物じゃない。

私は面倒ごとは嫌いなさ。大概はどうでもいいことの為に時間を無駄に浪費させられるだけなのだから。

それにしてもずいぶんと広大な学園を造ったものだな。今は蟠桃とのリンクでナビしてもらってるからいいんだが、それが無かったら間違いない迷っている自信があるよ。

まあ、そんな事を言うのなら仮にも国であるアリアドネーの方が実際かなり広いんだけど、そこは開拓からその後の発展に至るまで自分の手で行ってきたから大体の地理は把握してるしね。

……そろそろ集合場所に指定された広場かな。まだ結構な距離があったはずだけど、考え事をしながらだと時間が経つのが速く感じるね。

どうやらもう集まっているみたいだね。

全員召集したのだろう、かなりの人数が居る。見たところほとんどが大人のようにけど、おそらくは学園の生徒なのだろうが子供も少なくない数が居る。それだけこの顔合わせが重要な事なのか、それとも単純に暇なだけなのか。

どこことなく見覚えのある顔があるんだが、一体誰だったかな。

「やっと来たかのう。」

「時間通りのはずだが？」

「まあ、言葉のアヤという物じゃよ。」

ん、近くで見ると何となく心当たりが有るような無いような……。

って、私の顔見て驚いたような顔しているじゃないか。ちんちくりん状態の私の姿を知っているのはそう多くは無いし、あのどこかで見たような顔……もしかしてタカミチか？

なら、こっそり確認して、当たりなら口止めをしなければなるまい。まさかこんな所で傍受しようとしている奴何て居ないだろうし、とりあえずは念話でも問題無いだろう。

『タカミチ、タカミチ、聞こえていたら、むしろタカミチなら返事をしなさい。』

『ディアさん！？目覚めたんですか？』と言うより、何でこんなところに居るんですか！』

『まあまあ、積もる話もあるだろうが今は知らない振りをしておいてくれ。』

『分かりましたよ。あなたの様なヒトが居るのが知れたらろくな事にならないですからね。：でも、話は後でたっぷり聞かせてもらいますからね。』

よしよし、これで一応タカミチからばれる心配も無いだろう。
なお、この間およそ二秒の早業である。

「さて、今日皆に集まってもらったのは先ほど来た彼女を紹介する為じゃ。彼女はラトウーニースウボータ、学園の警備に参加してもらうことになる。一応、表向きは学園の生徒として生活してもらう事になっておるがのう。」

「ラトウーニースウボータだ、よろしく頼む。」

「まだ子供じゃないですか。」

「いや、それよりも名前だ。真鍮に土曜日なんてとても名前にするようなものではない。偽名ではないのか？」

「学園長、本当に信用できる人物なんですか？」

ふむ、あきらかに疑われてるな。確かにこんな子供の姿をしているにもかかわらず底が見えないような、どう見ても胡散臭い人間を初対面で信用しろと言うのは無理な話だね。私だって無理だろう。

「う、うむ。彼女は魔法世界のとある長命種で、う、外見と中身があっていいのはそのためじゃ。無論、実力もある。」

「本当ですか？」

あの顔が真っ黒な男、やけに噛み付いてくるね。

私はそんなに怪しいのか。さすがの私でもそこまで疑られるとちよっと傷つくよ。

「とにかく、彼女は信用できる人間じゃ。」

「：分かりました。」

「まあ、一応納得してくれたところでラトウーニ君の実力を見せてもらおうと思う。警備に参加することになるわけなのじゃから背中を預けるかもしれない者の力は把握しておいた方がいいじゃろうから。ラトウーニ君、よいかの？」

「構わないよ。」

「対戦形式になるが、相手は「タカミチ。」 ふおっ!？」

「タカミチ・T・高畑と戦^やらせて欲しい。」

ふふふ、驚いてるねえ。タカミチを呼び捨てで指名したからか。いや、でもタカミチ呼び捨てって余計怪しまれるだろうか。まあ、大丈夫だろう。

正直な所こっそり『偵察』した限りタカミチ以外『てかげん』の上で手加減しても殺さない自信が無いだけなんだけどね。

「う、うむ。ワシは構わんがタカミチ君はどうかの？」

「僕も問題は無いですよ。」

「それではラトウーニ君はタカミチ君との対戦でその力を見せてもらう。皆もいいな？」

「こんな子供が高畑先生となんて大丈夫なんですか？」

「まあ、実際に見てもらえば解るよ。私の能力^{チカラ}がね。」

実際に力を見せる。簡単に言う物だが、より効果的に行うとなるとこれがまた難しい。

先ほど集まっていた魔法関係者は、今はこの広場の中心に居る私達を囲む様に遠巻きに眺めている。

「どこからでもかかって来てくれて構わないよ。」
「……。」

タカミチは……、微妙な表情だな。一応は顔見知りだと言っても、見た目幼女と戦うのはさすがに気が咎めるらしい。

だが、それでは私が困るのさ。タカミチには本気で戦ってもらわなければ力を示す事が出来ないのだからね。

『タカミチ、本気で来い。』

『良いんですか？』

『問題ない。むしろそれぐらいでないと奴らは私の力を理解しないだろうからな。手加減でもされたら』

『はぁ、分かりましたよ。どうなっても知りませんからね。』

ふむ、タカミチの奴私のことを見くびっているようだな。

確かに、この数百年私はほとんどPバードスーツS着用でしか戦っていない。

唯一の生身での戦いは詠春との一騎打ちで、しかも負けているからその様に認識するのも無理は無い。

勿論、この状況下でそんな物を着用すれば正体が露見するのは目に見えているので生身での戦いになると予想しての言葉だろう。

だがな、タカミチ。誰も私が生身では弱いなどとは言っていない。事のついでだが、この際思い知らせてやろう。

その身を以って、な。

「二人とも、用意はいいかの？」

「僕は大丈夫ですよ。」

「私も問題は無い。」

「それでは、始めてくれ。」

さて、彼らの後ろを付いて回るだけだった少年がどれだけ成長したのか、見せてもらおう。

Side 三人称

「来ないんですか。」

「いつでも、どこからでもかかって来て貰って構わないよ。」

「それじゃあ、お言葉に甘えてっ！」

パンツ

言葉と共にタカミチの拳が並みの使い手では視認する事さえ困難な速度で繰り出される。

しかし、その攻撃は周囲に展開された緑色の障壁に阻まれ、ディアの身に届く事はなかった。

「ほう、居合い拳か。なかなかの威力だな。」

「僕だってあれから色々努力してきましたからねっ！」

パンツ

パンツ

パンツ

パンッ

タカミチは自らの攻撃が阻まれたと見ると連続で拳を放ち居合い拳の弾幕を張るが、それは光球を身に纏い宙に舞ったディアに届く事は無い。

「だが、これ以上は当たってやる訳には行かないな。」
「なっ!？」

杖も無く、魔法さえ用いずに空を駆ける。

ひらりひらりと月明かりの下で踊るようにタカミチの拳撃を避け続けるその姿は、知らぬ者ならばまるで妖精の様に見えた事だろう。

光に包まれて、踊る、踊る、踊る。雨の様に降り注ぐ破壊を物とせず、その顔に微笑みさえ浮かべて、満月の光をその身に纏う妖精は踊り狂う。

月下に妖精は舞う。

「ははははははっ! どうした? 全然当たらないじゃないか!」
「くっ!」

「この程度じゃあつまらないから、今度はこちらから行かせて貰うぞ。」

そう言うと、ディアは自分の周囲に先ほどの障壁と同じ緑色の剣

を無数に生み出す。

「さあ、今度はそちらが避ける番だ！」

ディアの手の動きに呼応して降り注ぐ剣の雨。

辛うじて剣そのものを回避する事ができたとしても、地面に突き刺さった剣は爆ぜ、周囲に破壊を撒き散らす。

初めこそ多少の余裕をもって回避する事ができていたタカミチだったが、徐々に数を増してくる剣の爆風を避けきけることは叶わない。時間が過ぎるにつれ、その体のあちらこちらに傷が増えていく。

攻撃を回避できなくなってからはそれほどの時間もかからず、タカミチは徐々に追い詰められていた。

全身に傷を受けていない箇所は無く、息は切れ、足は辛うじて戦闘に耐えうる速度を保つのに精一杯という有様である。

「私は本気で来いと言ったはずだよ。まさか、これが本気なんて事はないよね？」

「……出来れば使いたくは無かったんですけどね。」

心底からがっかりしたと言った風に問いかけるディアに、タカミチが本当に嫌そうな様子で返す。

「やはり、まだ隠し玉があったか。発動するまでは待っていてあげるからさっさと使うがいいさ。」

「…はあ、分かりましたよ。」

このまま戦っても結果は見えていると考えたのか、覚悟を決めた様子で頷くタカミチ。

ディアが発動までは手を出さないと宣言している為か、或いは元々それだけの集中力が必要なのか、深く、深く精神統一を始める。

「右腕に氣、左腕に魔力……。」

— 合成

発動と同時にタカミチの纏う空気が一変した。

相反する性質を持つ魔力と気を融合させその身に纏う事で絶大な力を得る高難度技法、究極技法とも呼ばれる秘技―咸卦法である。

「へえ、咸卦法か。」

「まだ実戦で使うには勇気が要る完成度ですけどね。」

感心しているディアに、タカミチは自嘲したように返す。

「行きますよっ！」

[illegible]

それはもはや雨などというような生易しい物ではない、拳撃の壁を作るように激しく打ち出される拳。射程内に居る者は誰であろうと避けることなど叶わない、まさしく不可避の弾幕と呼ぶに相応しい猛攻である。

それまでは攻撃を完全に見切っていたディアも、これは避けきることが出来ず障壁を展開せざるを得ない。

「へえ、やるじゃないか。なら、こっちも取っておきを出そう。」

「何っ!？」

「念動結界、ドミニオンボール!!」

ディアの手から放たれた緑色に光る球体は、どれだけ回避しようともタカミチを執拗に追尾する。

「っ!しまった!」

そしてついに捉えられたタカミチは、これまでの戦いでディアが展開していた物と同質の障壁によって閉じ込められ、動きを封じられてしまう。

「さて、ここから取って置きさ。」

「右腕に気、左腕に魔力!」

ディアの両腕に青色、赤色それぞれのエネルギーが収束していく。

―複合

「喰らえ!クロオオース!マッシャー!!!!」

ゴオオッ

ディアの両の手から放たれた青と赤のエネルギーは絡み合い、螺

旋を描きながら身動きを封じられたタカミチへと迫る。

「くっ！」

どうにかして逃れようともがくも、堅牢なる念動の檻は揺らぐ事は無く、脱出は叶う事はない。

ズダァァン

青と赤の螺旋は避ける事さえできないタカミチに着弾したと同時にその内に秘めたエネルギーを開放し大爆発を起こす。

爆心地には全身がぼろぼろになったタカミチが倒れ、周囲はまるで隕石でも落ちてきたかのように何も無い更地になっていた。

周囲でこの戦いを見守っていたはずの学園関係者たちも知らぬ間に逃げ出したのか姿が見えない。

「ふむ、少々やりすぎたかな。……まあタカミチも生きている様だし、一応『てかげん』もかけてあったし大丈夫だよね。」

タカミチの無事を確認して、なんともばつが悪そうにつぶやくディア。

後に残ったのは跡形も無くなった広場の真ん中に倒れているタカミチと、困ったような顔をして立っているディアの姿だけだった。

第二十二話 月下に妖精は舞う（後書き）

誤字脱字や不自然な表現等指摘していただけるとありがたいです

クロスマッシャーは前からやってみたいと思ってたことなんだぜ！

第二十三話 戦い終わって（前書き）

暑さと忙しさでモチベが枯渇しそうな今日この頃

なんかもういろいろスマソ
今回は少し短めです

第二十三話 戦い終わって

何故だろう、何も悪い事はしていないはずなのに軽く修羅場が始まっている気がする……。

「……なんでタカミチが居るんだ、姉さま。」

「ははは、ちよつとそこで再会したんだよ。どうやら彼も学園の関係者みたいだし、詳しい事情を説明する為に、ね。」

「アハハハハ、ドウモオジヤマシテマス。」

「このオジサン誰？」

「オジサンって……。」

「お茶をお持ちしました。」

「……あれっ、もしかして茶々丸ってロボット？」

「ハイ、正確には」

「やっぱり！そんなすばらしい事にすぐに気付けなかったなんて、ここに来てからずっと余裕が無かったとは言っても我が事ながら本当にありえないね。だが、そうと分かったからには色々話を聞かせてもらおうよ、茶々丸。」

「分かりました。」

「って、ディアさん僕の事忘れて何やってるんですか!？」

うむ、実にカオスな状況だね。まあ、その状況を作った一人である私が言う事でもないんだけどね。

「はっはっはっ、それじゃあ早く話を進めようじゃないか。」

「それは貴女の言う台詞じゃないですよ!!」

「まあまあ、いいじゃないか。あんまりカリカリしてると老けるぞ、

タカミチ。」

「貴女のせいですよっ！」

「気にしない、気にしない。」

「ちよっとは気にしてください！」

―事情説明中―

「はあ、大体の事情は分かりました。それで、そこに居るのが件の子ですか？」

「ああ、ちなみに私とアスナはエヴァと同じクラスになることになっているよ。」

「……………僕が担任をしているクラスですね。」

「へえ、そうなのか。それは知らなかった、これからよろしく頼むよ。」

「胃が痛い…。」

はははは、タカミチは繊細だなあ。苦労の種の一つや二つどうって事はないじゃないか。

さあて、タカミチとのお話も済んだし、ここからは茶々丸への質問タイムだね。

「ふっふっふっふっ、君の事を何もかもぜえーんぶ話して貰うよ、茶々丸。」

「ハイ。」

「まずは君の産みの親についてだね。見たところ君に使われている技術にはアリアドネー型の魔科学も多少は含まれてはいるが、大半は通常の科学技術と魔法技術のハイブリッドだ。つまり、少なくとも

もエヴァ一人では有り得ない。エヴァの科学技術レベルはこんなに高くは無いからね。これほどの完成度の機械人形である君を創ったのは、一体誰かな？」

「ふっ、それは私が話そう！」

「エヴァ？」

うわあ、嬉しさを隠そうとしているけど失敗してにじみ出ているような、このなんとも言えない表情はなんだろう。

「茶々丸の開発者は葉加瀬聡美及び超鈴音、私は所々に用いられている魔科学や魔法関連技術を担当しただけだ。」

もう嬉しさを隠そうともしていないね。いつも説明を受ける側だったからだろうね、私に説明できるのが余程嬉しいらしい。

「ほう、実に興味深い話だね。」

「ちなみに二人ともクラスメイトだ。」

「な、なんだってー！！！」

なんと、これはさすがに予想外だ。

「本当デスカ？」

「ああ、嘘を吐いてもしょうがないだろう。それより口調がおかしいぞ、姉さま。」

しかしただの中学生が開発者だなんて……、いや、むしろこの土地だからこそありえる、か？

神木・蟠桃の放つこの世界の水準をはるかに超えた魔力に満ちたこの土地、重ねて魔法使い共の張っている大規模な認識疎外の結果

による意識への介入である。その魔力の影響を受けて生まれた異常な天才が、異端として周囲の目に映ることなく自らの才を振るう事のできる環境としては十分だろう。

「永く生きてきた私にだって、さすがにこの茶々丸を中学生が産み出したなんて事はなかなか信じがたいよ……。」
「すぐに慣れるさ、ここはそういう場所だから。」

ああ、やっぱり…。

ついさつき立てた仮定が正しいと考えざるを得ない状況、普通なら有り得ないような才能の持ち主が当たり前のように生活する場所なのだろうね。

まあ、私もエヴァも『有り得ない』と言う点では他に類を見ない存在なんだから、他人の事を有り得ないなんて言える立場じゃない気はするけどね。何しろ大地の女神（まだエヴァにも言っていないけど）と、この世に存在する唯一の真祖の吸血鬼なんて、ねえ。

「それでも、私達が一番有り得ない存在なのは間違いないのだろうけどね。」

「そうだな。」

「皆さん、僕の事完全に忘れ去ってないですか？」

「なんだタカミチ、まだ居たのか。」

「用が済んだのならさっさと帰れ。私はこれから姉さまと……。」「ごによごによ

「えっ!？」

「ちよっ、エヴァ、そんな誤解するような言い方しないで!」

「へっ?」

あれ、もしかして言われて初めて気が付いたのかな。
あっという間に顔が真っ赤になったね。

「……………いやあああああああ！！！」

「あっ、エヴァ！」

行っちゃったね。

「あ、あの、お邪魔しました。」

「あー、うん、それじゃあ、また。」

タカミチの奴、逃げたな。

とりあえず追いかけよう。

たぶん今頃は枕か何かに顔をうずめて恥ずかしさに身もだえして
いるだろうからね。

入っていったのはこの部屋だね。

コン、コン

返事は無い、か。まあ、別に構わないな。

「エヴァ、入るよ。」

………ここまで見事に予想通りだとは思わなかったよ。

エヴァがベッドの上で羞恥に悶えて足をばたつかせている。その姿はまさに先ほどの想像の通りで、ただ一つ違いがあるとすれば、それはエヴァが顔をうずめているのが枕ではなく書類である、という事ぐらいか。

「うー、あー。」

私が入ってきた事にも気がつかないのでは、一体どれだけ恥ずかしかったんだろう。

「エヴァ。」

「ふへっ？ えっ、ね、姉さま？ いつの間に入ってきたんだ？」

酷い反応だね。これは、私の目撃したモノは伏せて置いてあげた方がいい…よね？

「ついさっきだよ。私はこの部屋に入ってから何も見ていないし、何も聞いていないという事、さ。」

「…姉さま、その優しさが痛いよ。」

「さっきはああ言ったけどね。実際、私達はお互いに仮契約しているんだから、別にあれくらいはどうという事もないと思うよ。」

まあ、さっきのアレは八割方ノリだったからね。

「ま、まあ、確かにそうだけど……。」

「それに、人生(?) 六百余年も生きていればあれくらいなんてことは無いと思わないかな?」

「う、むう、姉さまの反応が無ければ何事も無く流せたはずなのに、なんだかそれはそれで納得できないぞ。」

タカミチは無視だど?!

まあ、エヴァも復帰したし、これ以上は別にいいか。

「はっはっはっ、過ぎた事を言ってもしょうがないさ。」

「はあ、姉さまには言うだけ無駄か……。」

「そういうことさ。仮契約と言えばアーティファクトを試してみたんだけど、なかなかに興味深い物が出てきたよ。エヴァの方は確認してみた?」

「いや、まだだ。姉さまが興味深いと言うのなら戦闘用ではないのだろうか、どういう効果の物なんだ?」

むう、エヴァはまだか、つまらないな。

私のだけでもかなり面白いから別にいいけどね。

「それは実際に見せた方が早いだろうね。アデアット。」

それにしてもこれがあれば同じ名前だとはとても信じられないんだよね。

一応形状その他の詳細は不明なんだけどね。

「宝珠?」

「そう、この鋼色の宝珠こそが私のアーティファクト、鋼の魂さ。」

スピリッツオブスタイル

第二十三話 戦い終わって（後書き）

誤字脱字や不自然な表現等指摘していただけるとありがたいです

鋼の魂ってスパロボの強化パーツの中で唯一形とかが想像もつかないんだよねあ。

なお、エヴァの方はまだ考え中。次回出そうと思ってるのに……。

第二十四話 鋼の魂（前書き）

このところはそうでもないけど、七月に入ってから暑くてやる気が
出ない

オマケに大学も色々忙しくなってきたしね

ええ、ええ、言い訳ですよ

とりあえず今月中にはもう一話ぐらいいききたいけどなー

第二十四話 鋼の魂

「これが私のアーティファクト、スピリッツオブステイール鋼の魂さ。」

「それで、どんな効果なんだ？」

「まあ、見てなよ。」

そう言っておもむろに鉱物を生成し始める。

「…鉱物生成なんて始めてどうするんだ。」

産み出したのは手のひらに丁度収まる大きさの鉄の塊。

「……………できた。ほらエヴァ、コレに魔力を込めてみて。」

「この鉄の塊に？」

「そう、騙されたと思って、ね。」

「……………っ！」

確かにただの鉄塊だったはずの物体が、注がれた魔力に反応して急激に形を変えゲシュペンストの像になった。多少の不安はあったものの、どうやら成功したようだ。

「これは…、魔法金属か？ いや、生成した直後で加工などする時間は無かったはずだ。……つまり、これが、という事か。」

「そう、これが鋼の魂チカラの能力。私の生成する金属そのものにある種

の能力を付加することが出来る能力。まあ、付加出来るのは一種類だけだが、それは普通の魔法金属と大差はないから大して問題ではないね。それに、重要なのはここからなんだけど、この場合は魔法金属とは違って相当に強力な能力を付与できるのさ。」

魔法金属製造のために施す処理は、原子一つ一つに呪紋を刻む事で能力を付与するという性質上、付与する能力の強さに比例した複雑な呪紋を刻み込む大きさの原子を持つ金属が必要なため、かなり早い段階で限界が訪れていた。

それ故に、こうして限定的には言えその限界を突破する手段が手に入った事は、以前は不可能だった技術や機体の再現の可能性が開ける事を意味している。

「そうか……。しかし、これだけの力……」

「うん、公には出す事はできないよね。従来の物とは桁違いの性能チカラを持った機体を製造できるのは言うまでもなく、通常でも都市一つどころか国一つを易々と破壊し、物によっては惑星さえ消し飛ばす事が可能な兵器を製造することが出来るのだからね。」

「そうだな、取り扱いは慎重にするべきだろう。」

「まあ、そもそも私の復活は最重要機密扱いにしてあるから、学園長が漏らしていない限りは帝国だろうとメガロの連中だろうと知っていることは有り得ないだろうけどね。」

「確かに、アリアドネーの防諜体制は誰であろうと破れる気はしないな。」

「情報の適切な秘匿と開示は学術で身を立てる者の必須項目、という事だね。と言う訳で私は知的好奇心の赴くままに気が済むまで自分のアーティファクトの研究及び実験をしようと思う！」

「……って、姉さま！さっきの話は何の為にしたんだ！」

「えー、いいじゃないか。ちゃんと研究用の魔法球内で、秘密裏にするから、ね？」

ふっ、我が探究心は誰であろうと、私自身でさえ止める事は叶わないのさ。政治的なあれこれなんて知った事ではないのだよ。『公には』出せないが個人的に使うだけなら問題になるようなことにはならないだろうし、そのための手段も用意はできる。

「はあ、どうせ止めても無駄なんだろう？」

「分かってるじゃないか。」

呆れ顔で聞いてくるエヴァに、自信満々の笑みと共に返す。

「ま、一応完全とは言い切れないが限りなく安全な対策はしておくし、そのための特別な保管場所も既に用意はしてあるから心配は要らないよ。」

「姉さまがそう言うのなら生半可な相手では手出しもできないだろうが、それでも注意は怠らないでくれよ？」

「分かってる、私もそこまで楽観的ではないからね。」

私としてもエヴァの心配は分かるんだが、やはりこの身の内から湧き上がる探究心と知的好奇心には抗えないからね。

正直な所、このアーティファクトで広がった可能性でこれまで作れなかった、或いは不完全な再現しかできなかった物が作れると思うと自戒の気持ちなんて軽く吹き飛んでしまったのさ。

魔装機神に超機人、ダブルGやSRX、レース・アルカーナとシユンパティア、ビーム吸収装甲、トロニウム、ズフィルードクリスタル、ラズナニウム、マシンセル、そして何よりXNガイストとシステムXN。

ああ、なんて素敵な響きなのだろうか！

「ふ、ふふふ、ふふふふふふ……。」

「……姉さま、大丈夫か？」

はっ…、そういえばエヴァと話している途中だったか。

ふう、いかな、趣味の事となると周りがまったく見えなくなっ
てしまうのは直さないといけないね。

……とは言っても、この数百年ずっと直そうとしていまだにそ
の気配さえも無いんだからこれはもう直らないかもしれないけどね。

「ああ、問題ないよ。ちょっと考え事（＝妄想）をしていただけだ
からね。」

「それならいいんだが、相手が私だったからよかったものの他の誰
かが見たら絶対変人だと思われるぞ。」

「それなら問題無いよ。エヴァ以外の誰にも見られる気は無いし、
見られなくても他の普段の行動を見ていれば変人とまでは行かなく
ても変わり者以外の何者でもないと思うからね。」

「いや、そこも含めて直せよ！」

「何を言うんだエヴァ。普通な私など私ではないのだよ。」

「うん、分かっていた、分かっていたんだけど……、どうしてこ
うなるまで放って置いたんだろう……。」

「エヴァも分かってくれたみたいだし、ちょっと実験でもしてくる
よ。」

「……………」

さて、どうするかな。

早速実験したいのは山々なんだけど、エヴァにああ言った手前その前に色々準備や確認が必要になってくるね。

第一に考えるべきは、アーティファクト及びその生成物の保管体制についてだね。

まず、アーティファクトそのものについては保管と言うよりは使用しない時には消しておくので、私が自分で出さない限り他人の手に渡る事は有り得ない。仮に奪われたとしても私以外には使うことはできない（当たり前と言えども当たり前なのだが）し、一旦消せばいつでも手元に戻す事ができるので全く問題はない。

問題はその生成物だ。その特性さえ把握していれば簡単に扱う事が可能な、それでいて通常よりも遥かに強力な魔法金属。付与された能力次第では取り返しのつかない被害をもたらす可能性が極めて高い。

それならば答えは一つ、私以外の誰の手も届かない空間トコロに保存すれば良い。そして、そのために採り得る手段は二つ、完全個人用でセキュリティ付きの魔法球、それと現状ではあまり気軽に使えるような方法ではないが私の持つ念動力を以って繋げた閉鎖空間への保管。安全度で言えば後者の方が高いには高いのだが、閉鎖空間への接続は今の私では日に何度でもできる物ではない。なのでより強い能力を付与した物や完成した作品を閉鎖空間に、比較的危険性の低い物は魔法球に保管すると言うのが現実的な案だろう。

まあ、魔法球の方でも破るには他国では年単位の時間を要するだろう強固なセキュリティ付きだからそれほど心配はしていない。魔法球自体の破壊に対しては保険として内部の無生物全てが同時に消滅する仕掛けがついてるから問題にはならないだろうしね。

つまり、当面の保管場所については研究用魔法球で問題ないだろうという事だね。

そして、その問題が片付いたという事は私の研究への障害は消え去ったという事に等しい。

なにせ基本的にはほぼ全ての問題がこの一点に集約されていたといっても過言ではないのだからね。強すぎる力なんて元々私自身の存在がそうだから今更何を言うかだし、現状想定している能力の大半は既に魔法世界中に出回っている魔法金属の発展形だ。一部そういったものとは異なる、明らかにおかしい能力も作ろうと考えてはいるが、アリアドネー以外では扱いきれんとは思えないんだよね。変な風にいじって暴走とかさせそうだし。いや、そもそも力を引き出す事もできないかも知れないね。

と言う訳で、私の研究は何の問題も無く始められるのさ。

まあ、多少の問題があったところで強行してしまうだろうけど、やっぱり問題は無いに越した事はないからね。

さあ、知的好奇心の赴くまま探究心の赴くまま、めくるめく実験の時間の始まりだ。

あ、そういえば明日転入なの忘れてた……………。

おまけのアーティファクト紹介

スピリッツオブスタイル
鋼の魂

ディアⅡマクダウエルがエヴァンジェリンⅡマクダウエルの従者となった事で使えるようになったアーティファクト

外見は手のひらに収まる程度の大きさの鋼色の宝珠で発動時には鈍く発光する

普段はあらかじめ用意しておいた首飾りにはめ込んで使用する

その能力はディアの生成する鉱物に一定の能力を一つだけ付与する事現状では付与する能力に明確な上限は見られず強力な能力ほど生成時に時間がかかり一度に生成できる量が少なくなる

また、能力とそれを付与される鉱物に相性が存在する場合もあるが法則性は現状では不明

さらに、付与した能力はその鉱物の性質として完全に定着する為、強大な能力を持つ魔法金属が少量ずつしか生成できないことは時間さえかければ大した問題にはならない

しかしそれだけに悪意の第三者の手に渡る可能性を考えると保管には細心の注意を要する

第二十四話 鋼の魂（後書き）

誤字脱字や不自然な表現等指摘していただけるとありがたいです

朝早く起きても頭が回らなくてやる事もできないぜー

第二十五話 転入初日（前書き）

七月中にいけるかと思ったができなかったぜ
今回は多少話が進んだと思うが微妙
近くキンクリが必要かも知れん

第二十五話 転入初日

ふう、いい朝だ。

「おはよう姉さま。」

「ん、エヴァか…。おはよう。」

「茶々丸は？」

「朝食を作ってもらってるよ。」

ちなみに、現在の時刻はまだ午前六時前。ここから中等部の校舎までは三十分もかからないので、遅刻なんて事はない時間帯だ。

「……おはよう。」

「おはよう、アスナ。今日は中学校に転入する日だから、さっさと支度を済ませて早めに登校するよ。」

「ん、分かった。」

さて、私も早く身支度を済ませて、ゆっくりと登校できるようにしようかな。

「なあ、姉さま。」

「何？」

「何で態々そんな格好してるんだ。」

制服はともかく、目元をすっかり隠すような前髪に、三つ編みで一まとめにした腰までの長さのお下げを後ろに垂らして、その上前髪で隠れているにも関わらず分厚いビン底メガネを装着した姿だ。そりゃあ突っ込まれるのしょうがないね。

「ふっ、愚問だね。この方が胡散臭いからに決まっているじゃないか。」

「その意味は……、姉さまの事だからどうせ無いんだろう？」

「当然だね。意味なんてない、だがそれが良い！」

「さて、アスナの方は大丈夫かな。」

スルーされた！？

くっ、やるなエヴァ。この私の何の脈絡も無い言動をサラリと受け流すなんて成長したな。

………その成長に意味はまったく存在しないけどね。

…どうやらアスナの方も支度が終わったらしいね。

「アスナも終わったみたいだね。」

「うん。」

アスナは腰まで伸びた髪を後ろで軽く束ねただけで、他には飾りも何も付けないシンプルなスタイル。

うん、普通だね。まあ、当たり前ではあるんだけどね。

ちなみに、ちんちくりん時の私の身長はエヴァと同じくらいなので当然アスナの方が高い。胸については………、何も言うまい。むしろ何も言いたくない、聞きたくも無い、知りたくない。

「朝食の準備ができました。」

「ありがとう茶々丸。それじゃ行こうか、アスナ。」
「うん。」

朝食を済ませて早々に登校する事にした私達は予定よりも大幅に早い七時に到着して、私とアスナは職員室に、エヴァは教室にそれぞれ向かった。

一応担任であるタカミチに挨拶の一つでもしておこうかと思ったが、生憎と席を外していたので入り口付近にスペースに椅子を出してもらって待機する事にした。そのためにできた微妙な暇はちょっとした思索と、アスナとの雑談でつぶすことにした。

だが、結局タカミチが戻ってきたのはそれから一時間近くが経過した八時過ぎだった。

「おはよう、高畑先生。」

「……ディアさんにそんな風に言われると、むしろ不気味ですね。」

「それは酷いな。それと、今の私はラトウニースウボータだ。」

「分かってますよ、さっきのは冗談ですよ。」

「まあ、よろしく頼むよ。ほら、アスナも一応世話になるんだから挨拶くらいはしておきなよ。」

「ん、よろしく。」

「一応って…、まあよろしくね。」

さて、タカミチのせいで時間のあまり無かったので挨拶もそこそこに教室へと向かう事になった訳だが、自己紹介とかどうするかな。とりあえず昨日二つのプランを用意したんだけど、どっちにしようかまだ決まっていなんだよね。今朝起きてからここに来るまで自己紹介の事すっかり忘れてたし。

ちなみにプランAが何らかのキャラを演じるという物。候補に挙がっている理由はただ一つ、面白そうだから。

プランBはほぼ素で振舞うという物。まあ楽し、普段どおりでも間違いなく変人認定はされるだろうからそれはそれで面白そうだからね。

………普通に考えればプランBだろうな。面白そうって理由だけで三年間も演技しっぱなしなのはさすがの私でも面倒だね。昨日の私、まずは落ち着け。

どうやらそんなことを考えているうちに教室に着いたらしいね。
で、タカミチの奴、何で軽く警戒してるんだ？

…納得だね。

教室の戸には黒板消しが挟んであるし、かと思えば今度は入り口の足元に紐、それに加えてさらに頭上からの水入りバケツに後方からはおもちゃの矢が飛んでくる始末だ。

まあ、そのことごとくをタカミチは見事に回避したんだけどね。
具体的には、黒板消しは戸を開ける前に回収、紐は踏みつけ、バケツはナイスキャッチで矢は弾き落とした。

見事なトラップだったが、相手が悪かったな。と、誰とも知れないトラップにとりあえず同情しておく。

「今日は皆さんに転入生を紹介します。」

あのトラップについてをスルーするとは、もはやアレはこのクラスの日常の一部なんだな。たぶん。

「渚明日菜、よろしく。」

こっちもシンプルなんだね、アスナ。

「ラトウニースウボータだ、よろしく頼む。」

まあ、色々考えるの面倒だから私も最低限にするけどね。

……キーン

っ！！これは、念動力者か！？

…それほど高いレベルの能力者ではないようだ。

場所は…、窓際の席だが誰も居ない？いや、よく見れば何か居るな。どうやら生者ではない、靈魂のみの存在、幽霊とでも言うべきモノらしいね。しかし、私の感覚でもこれだけしか存在感が感じ取れないなんてずいぶんと隠密性が高いと言うべきか、影が薄いというべきか。できれば接触したいところだが、今は無理だろうし夜に

でも忍び込んでみるか。

「「「「「転校生！それも二人！」「」「」「」」

おっと、自己紹介の最中だったな。

しかし私達は転校生じゃなくて転入生なんだが、彼女たちにとっては大した差は無いからどちらでもいいのだろうな。

「どっから来たの！？」

「何人！？」

「寮では見かけなかったけど、今どこに住んでるの！？」

「ホラホラ、落ち着いて。今日は一時間目が学活だからそこで改めて自己紹介してもらうよ。」

「「「「「ハ―イ！」「」「」「」」

やれやれ、ずいぶんとまあ元気が有り余っているようだね。

「それじゃあ出席番号3番『麻帆良のパパラッチ』こと朝倉和美が、クラスを代表して質問させてもらうよ！！」

「ん。」

「お好きにどうぞ。」

しかしパパラッチってあんまり良いイメージでは無いと思うんだけど、普通は自称しないんじゃないか。

まあ、ごく普通の質問やちょっと危ない質問なんかをされて、アスナは簡潔且つシンプルに、私は奇人変人だから何、な感じで回答していた。エヴァと一緒に住んでいると言った時には一同騒然で私達の関係について詳しく聞かれて、普通に家族だって答えたらさらに根掘り葉掘り質問されて誤解を招かないように気を使いながら答えを返すのはなかなか面倒だった。

「最後に、このクラスで気になる子は？」

「ほぼ女しかいないこの場でその質問をする意味が分からないのだが。」

「まあまあ、ノリって事でいいじゃない。」

「むう、納得できないな……。」

「私が気になるのはラトだけ。」

ってアスナ、色々突っ込みたい事があるんだけど！？

「確かにクラスの中から選んじやいるけどねー。じゃあ次行ってみよー！」

「はあ、私が気になるのは超鈴音と葉加瀬聡美の二人だ。」

「ふむふむ、その二人って事はやっぱりロボ研関係？」

「ロボットに興味があるからね。」

茶々丸の製作者であるというだけで興味津々だというのに、それがこれからクラスメイトになる中に居るなんて気にするなと言うほうが無理な話だよ。まあ、一応表面上は平静を装っているけど、内心早く話を聞きたくてうずうずしている。正直茶々丸を見た限りでは話を聞いたところで理解できる気がしないが、ロマンの前にはそんな事は関係ないのさ。

質問が一通り終わる頃には一時間目は終わって、二時間目からは通常の授業が行われた。

およそ700年ぶりの学生としての学校生活は思いのほか楽しいものだったが、完全に分かりきっている内容の授業は余りにも退屈で、転入初日から、寝た。学生に有るまじき態度だったと思うが、どうしても退屈から来る眠気には抗えなかった。某見た目と中身の年齢が食い違っている少年探偵を心から尊敬した一日だった。

第二十五話 転入初日（後書き）

誤字脱字や不自然な表現等指摘していただけるとありがたいで

八月いっぱいネット環境の無い環境で過す予定なので今月中にはたぶんこれ以上は投下できないと思います
その分書き溜められるように努力します

第二十六話 念動力者（前書き）

どうもお久しぶりです。

いやあ、気が付いたらもう九月も半ばですよ。

とりあえず書き溜めを消化し切るまではいつもより早いペースでいけるといいな。

第二十六話 念動力者

夜の学校と言うのはいくつになっても不気味に感じるものだな。
…まあ、実際にはそんな時間ではなくてまだ明るさの残る夕方なんだけどね。こっちの方が雰囲気が出てるかな？

「相坂さよ…か。本当に姉さまと同じ力を持っていると言うのか？」

「正確にはその一部。」

「一々言われなくとも分かっている。」

…何故かエヴァとアスナが付いて来ているのは、この際置いておくでしょう。

「決して強くは無いが、私の能力の一つである念動力を確かに感じたのさ。誰も座る事のない席に着く彼女から、ね。」

「だが、これまで他にその力を持つ者を見た事が無いにしても、こうして姉さま自身が態々赴くほどの価値がある物なのか？」

「……聞くまでも無い事。」

「なっ、何をっ！」

「……こうして来ている事がその答え。」

はあ、どうしてこの二人はこうも仲が良くないのだろうか。

ああ、茶々丸。夕食の支度をするからと家に残った君がどうしようもなく恋しいよ……。

「まあまあ、二人ともケンカはそのくらいにして。」

「…姉さまがそう言うのなら。」

「……ラトの言う事なら。」

「はあ…、それでさっきの質問だけど、念動力自体は力の強弱を別にすれば全ての人間が持っていると言われる物だから珍しくは無い、むしろありふれたとも言える力なんだ。でも、その力はヒトの脳が鍵となっている。つまり、既に肉体を失っている彼女からその力を感ずる事は普通なら考えられない事だ。しかも、彼女の能力は辛うじてではあるが実戦に耐えられるレベルだ。これ程の能力者はかつての大戦中にさえ滅多にお目にかかる事ができなかったからね。霊体の念動力者、実用レベルの念動力者、このどちらか一方だけでもこうして訪ねる価値は十分にあるのさ。」

「なるほど、そういう訳か…。それに、こうして訪ねていくのはこちら側に引き込む為でもあるのだろうか？」

「そういう事さ。」

「…ついでにアーティファクトの実験もするつもり？」

「ばれてたか。さすがの私も幽霊を連れて歩くつもりは無いし、こちらに引き込む為の材料にできそうだからね。」

ふふふふ、私の能力なら基本的にはMS族を生んだときの応用だからアーティファクトなんて無くても幽霊に肉体を与える事なんて容易い事は内緒だ。だって、思いついちゃったんだもん（はあと）。

「あれ？」

「どうしたんだ？」

「いや、ここまで来ておいてなんだけど、どうにも教室、むしろ学校全体からも彼女の存在が感じ取れないんだ。」

「…学校には、居ない？」

「うん。もう少し広域を探してみるからちょっと待ってて。」

ふむ、念動力の反応は無し、か。意図して能力の発動をしていな

い限り少々の距離でも障害となるらしいね。

ならば、まずは『探索』で広域を走査するのでしょうか。

……だめだ、反応が多すぎて広域の『探索』の精度じゃ絞込みも出来やしない。

幽霊だしとりあえず人通りの少ないところから順に、大きな動きの無い反応に思い切って片っ端から『偵察』してみるか。

「どうだ？」

「いや、まだだね。」

どうするか、もうこの際……。ってもっと有効な手段があったじゃないか！

『探索』で出てきた反応に地殻レーダーを合わせて振動の有無を確認。普通の人間ならそれこそ一切の振動を出さずに在ることは出来はしない。それに、ピンポイントで単純に振動の有無を調べるだけなら相当な距離まで調べられるからね。

後は、振動の無い反応に『偵察』をかければいい。

……………ビンゴ！

どうやらここからそれほど離れていない場所らしいな。

「分かったよ。」

「何処だ？」

「あちらの方向の、そんなに遠くない場所に彼女は居るみたいだね。結構時間をロスしてしまったし、さっさと行こうか。」

反応が在った場所に来てみれば彼女の姿が確認できた。できたんだけど……、コンビニ、ねえ。

夜だろうが何時だろうがどう考えても幽霊が居る様な雰囲気のところではないのだが、何故かは知らないが確かにここに居る以上しょうがないね。

「はあ、あまり大人数で行っても警戒されるだけだろうから、エヴァとアスナはちょっとコンビニでデザート用に甘い物でも見繕っておいてくれないかな。」

「分かった。」

「ん。」

エヴァとアスナがコンビニに入って行くのを見届けてから相坂さんに声を掛ける。二人の後姿に覚えた得体の知れない不安感を見ながら、ではあるが。

「やあ、相坂さよさん、だね？」

「あ、あの、わたしが見えるんですか？」

「まあ、見えなければこうして声をかけることも無いと思うけどね。」

「そ、そうですよね……。」

…ん？

うつむいて、肩を震わせているね。…もしかして、泣いているのかな？

「どうかしたのかな？」

「あ…、もう何十年も人とお話なんかしてなかったので……………」

ふむ、これなら思ったよりも簡単に引き込む事ができそうだね。本当ならこんな心の隙間に漬け込むような事したくはないんだけど、ね。

「……ねえ、相坂さん。もう一度人生を歩む事ができるとしたら、どうする？」

これは選択、強要するのではなくあくまで彼女が自ら選ぶ問題。だが、おそらく彼女に選択肢は無いも同然だろう。それが得体の知れない相手から提示されたものであると、先の見えない孤独を解消出来るかも知れないという誘いには抗いがたい魅力を感じるだろうから。

「え！？そ、それは…、そんな事ができるのなら……………」

「できるよ。それも、ほぼ完璧な形で、ね。」

「本当ですか！？」

「ああ、本当さ。」

むう、こんなにも食いついてこれるとこれを使って引き込もうとしている事に罪悪感が……………。

「ただし、君の肉体の復活は実験的に行うものだから相応の時間は

かかるし、ほとんど無いとは思うが致命的な失敗の可能性も全く無いとは言いい切れない。それでも、いいのかな？」

「構いません！お願いします！」

「まあ、こんな所で何時までも立ち話と言うのもなんだし、詳しい話は家でしよう。茶々丸が夕飯の支度をして待っている筈だしね。」

「あ、あの、でもわたし学校からあまり離れられないんです…。」

「地縛霊と言うやつか。」

「はい…。」

さて、何にせよとりあえず見て見ない事にはどうしようもないな。

「ちょっと待ってて。」

まずはとりあえず『偵察』でもしてみるかな。

…特に問題は見られないな。

どうやら因果律にも異常は無いみたいだし、彼女が地縛霊になっている要因には外的な物ではないという事、か？

「あ、あの、どうですか？」

「…君がこの土地を離れられない理由は存在しない。」

「へ？」

「思い込みが原因、という事なんだと思う。」

「えっと、わたしって地縛霊じゃなかったって事ですか？」

「そういう事だね。」

自縄自縛の地縛霊もどき、ね。これが本当の自縛霊と言う訳だな。……いや、別に何も面白くは無いけどね。

「まあ、そう言う訳だから改めて我が家に招待しよう。」

「あの家は私の物なんだが……。勝手に姉さまの物にしないでくれ。」

ん、エヴァか。買い物が終わったらしく控えめに見積もっても十人分を超えるであろう量の甘味でパンパンになったコンビニの袋を両手に下げている。おまけにアスナはアスナでこちらも相当な量が入っているであろう袋を、少なくとも四つは持っている。

たぶん各種甘味を全種類全員分購入したのだろうが、限度と言うものを考えて買い物して欲しいものだね。一応金銭的には問題無いとは言っても、さすがにそんなには食べきれないしそんなに保存もできないからね。

「まあまあ、細かい事は気にしないで。」

「いや、細かくは無いだろう!? 大体姉さまが来てからまだ三日くらいしか経ってないじゃないか!」

「ふっ、甘いな。エヴァの物は私の物、私の物はエヴァの物。つまりエヴァの家は私の家なのさ。」

「くっ、姉さまには言うだけ無駄だって分かっていたはずなのに……」

「あ、あの……。」

あ、彼女の事すっかり忘れていたな。

「ああ、この二人は私の連れで、家族さ。エヴァ、アスナ、丁度これから詳しい話をする為に家に帰るところだよ。」

「そうか、それじゃあ行くか。」

「あ、あの……。」

まずは認識阻害を展開して、次に簡易発動版のプリズムファントムで隠れて、っと……………。

まったく、人目につく場所だと転移一つにも面倒な準備が必要だから不便だね。場所を移せばいいかとも思ったが、さっき『探索』したときの反応からするとこの周辺にはどこも誰かしら人が居て、人目を避けようとすれば結局は結構な距離を移動する事になるからむしろそっちの方が面倒なんだよね。

「あの…、ラトウニさん？」

「ああ、すまないな。そういえばまだ本名は名乗っていなかったね。私はディア、ディアⅡマクダウエルと言う。もつとも、今朝の自己紹介の通りここではラトウニⅡスウボータと名乗っているから外ではそう呼んでくれ。知っているとは思うが、こっちはエヴァで、こっちがアスナだ。」

「はい、分かりました。」

「それじゃあ、行くよ。次元斬！」

さて、今晚のメニューは何だろうか。私は基本的に食べなくても問題無いが、茶々丸の料理は美味しいから食事が楽しみになるんだよね。アリアドネーでの食事は栄養摂取の効率重視で味は極めて普通だったしね。…いや、むしろあれだけ栄養を詰め込んでいる（一皿料理一人前に成人一日分の栄養）のに普通の味と見た目にできるのがすごいのか？

まあ、それも楽しみだが、それよりも今は彼女の肉体をどう創るか、だね。ふふふふ、既に幾つかの試案はできているし、試してみたい事もある。彼女が宿るまではただの肉の塊だから結構な無茶ができるからね。

さあ、いざ実験の彼方へ！

……そう言えば、因果律を『視る』のって確か念動力でアカシツクレコードの扉を開いて接続する必要があった筈だけど、さっき『視た』ときにはあえて意識しなくても、と言うより念動力の行使も無く自然にできていたよね。

元から完全に人外な私だけど、そろそろ本格的におかしな存在になってきたってことだね。

……まあ、困るような事はないから別に良いか！便利だしね！

第二十六話 念動力者（後書き）

展開が結構強引だね！

第二十七話 疑惑（前書き）

さて、これで書き溜めが無くなった訳だが

第二十七話 疑惑

自分で言い出した事ではあるんだが、やはり面倒だ。

「ラトウーニースウボータ、貴様は一体何者だ。」

あの後、相坂さんを連れて帰宅してから食事と詳しい話を済ませたところで、丁度学園の夜間警備要請が入ってしまった。相坂さんには後の事もあるし家に泊まってもらうことにして、私は仕事の現場に来たと言う訳だ。

で、今日の襲撃者がどうも関西呪術協会の過激派だそうで、多数の鬼を呼び出している為に襲撃が広範囲にわたって行われてしまっていて、人手が足りないから私にまで呼び出しがかかったという事らしい。

敵自体は手ごたえも何も無いような、基本的な体術だけで楽々と倒せる程度のシシオウブレードも必要の無い様な雑魚だったから問題は無かったんだ。問題はパートナーとして組まされた人物だった。確か、今日同級生になった少女で、名前は桜咲刹那と言ったかな。

それで、今まさにその桜咲刹那に絡まれてしまっている訳なんだよね。

別に、彼女に個人的に絡まれるような事をした覚えは一応無いん

だけだなあ。まあ、可能性があるとしたら、たぶん昨夜の顔見せだろうね。

後で話を聞いたらタカミチってこの学園でトップクラスの実力者だったらしいし、それをああも軽くあしらえる様な力を持っているのがこんな胡散臭い人物と言うのはそりゃあ気にもなるよなあ。

「はあ…、私の身分については学園長が保証していた筈だけどね。」
「それでも、これほどの力を持つ、一切素性が分からない人間を信用しろと言うのは無理な話だ。たとえ学園長がその身分を保証していてもな。」

ああもう面倒だなあ。学園長が保証してるんだからいいじゃないか。

さて、どうやって説得したものかな。さっきの戦いを見る限り神鳴流の剣士だろうけど、彼女が使っていた刀にもどうも見覚えがある、と言うか多分詠春のだろう。

「…そうだな、青山…いや、今は確か近衛だったか。近衛詠春という名に心当たりは？」

「関西呪術協会の長だ。」

「君とは師弟、あるいはそれに近い関係なのではないかな？」

「そうだとすると、それが何か関係あるのか？」

うん、この反応からすればまあ、おおむね予想通り、だね。まあ、後は詠春を信じるとしようかな。

「ふむ、ならばディアマクダウェルという名は？」

「長から聞いた事がある。」

ふう、これなら多分何とかなるだろう。ただし、正体は明かす事にはなるだろうけど、まあ、口止めすればいいだろうし、元々積極的に隠す気は無い。詠春の関係者なら遅かれ早かれどうせばれてしまうだろうと言うのもある。しかし、何よりもこのやり取りが早々に面倒になってきたからさっさと終わらせたいという事が一番だね。

「なら話が早い。私がそのディア・マクダウェルさ。」

「なっ、何をバカな事を言っている！彼女は二十年前に倒れ、未だ目覚めたという話は無いぞ!？」

「そうか、さすがにいきなり信じることはできないか。なら、いくらでも証拠を見せようじゃないか。何がいい、ゲシュペンストか、それともシシオウブレードかな？」

まあ、彼女の話聞く限り本人確認できる程度の情報は持っていると思う。……きっと持っていると思いたい。

「では、まずは……。」

「…ふう、これで信じて貰えたかな？」

「……まさか、本当にあのディア・マクダウェルだったなんて……」

はあ……、まったく、無駄な時間を使ってしまったものだよ。

ゲシュペンストを見せても実物を見た事が無いから分からないし、装備の展開自体はアリアドネーの騎士団では標準だから証拠にはならないとか言われて、シシオウブレードは出し方が出し方だから転移魔法を使ったのではないか疑われてどちらも信じては貰えなかったんだよね。剣術だって別に個人を特定するほど珍しい流派とは言えないし、魔砲に至ってはデチューンしてあるとは言えアリアドネー国内では普通に流通してるからね。

まあそれで、他の地味だけど私にしかできないような事も見せては見たが決め手には弱くて、気は進まなかったけどそれ以上の手段ももう無くなって結局仮契約カードまで見せてようやく信じてもらうことができたのさ。

「とりあえず、私はもう帰るよ。あと、分かってはいると思うけど、私の素性については他言無用だ。漏らすような事があれば、分かるよね？」

「そっ、それは勿論っ!!」

えっ!?! ちょっと、この震え様は何!?

詠春、一体どんな事をこの子に教え込んだの!?! ねえ、どんな事を想像すればこんなに恐怖に打ちひしがれた状態になれるの?

……とりあえず詠春は今度あったときに一発殴っておこう。私のイメージを著しく偏向して伝達した罰という事でね。

はあ、今日はなんだかやけに疲れた……。早く家に帰って寝よう。研究とか実験とかも、今は本当に何も考えたくないよ……。

翌日放課後

「ラトウーニさんっ！」

「…また君か。」

疑いははれただろうに、まったく一体何の用かねえ。

「あの…、私に剣術を指導していただけないでしょうか。」

…まさか、こう来るとは思いもしなかったね。

しかもこんな所でするにはずいぶんと物騒な事を話すものだね。

はあ…、この様子では手短に済みそうには無いし、誰かに聞かれても面倒だから認識阻害でも使っておこう。

「……知らなかったのなら教えてあげるけど、私はあくまで研究者だ。剣術も嗜んではいるけど全く別の流派だから、君に指導できるようなことは無いね。」

「それは分かっています。しかし、長の使う西洋魔術との融合剣技は貴女の下で編み出したとも伺っています。」

ああ、魔法剣ね。確かにあれはかなり強力だけど私は詠春のアイデアを基に理論を組み立てただけ、それを完成させたのは詠春自身の努力だからね。

それに何より、技自体の難度も極めて高い。よほどの使い手でも習得できるか分からないようなあの技をあの状況下で実戦で使用できる段階まで進むことができた詠春は正直有り得ないと感じたものだね。

しかしまあ、そんなことは関係ないだろう。何しろ、私にその気は全く無いのだから。

「魔法剣のことなら、断るよ。」

「そこを何とか、お願いします！」

「大体、私にはそんなことをするような義理もメリットも……………」

待てよ、…そう言えば最近ちょっと手が足りなくなっていた事があったね。彼女なら多分できるだろうし、まあ、その為なら実験の合間に少し教えるくらいならしてやってもいいかも知れないね。

……うん、まあいいか。

「いや、気が変わった。条件を呑むのならいいよ。」

「本当ですか！？分かりました！」

返事早っ！内容くらいは聞きなよ！そしてちよっとは考えなよ！昨日まで怪しいと思っていた人間に対してそれはあまりにも無防備すぎるよ！

「ふむ、それでは条件の内容を説明しておこう。」

「はい。」

「まあ、簡単な話さ。条件と言うのは唯一つ、私が趣味で製作している近接戦用PS及びその武装のテストを手伝ってもらうだけさ。」

「えっ、趣味って貴女何やっているんですか!？」

「はっはっはっ、気にしない気にしない。いやあ、これまではアスナにやってもらっていたんだけど、さすがに一人じゃあできないこともあってね。エヴァは専門外だからって手伝ってくれないし、助かったよ。」

「…………。」

うむ、これにて一件落着、だね。

まあ、桜咲さんがなんとも言えない表情なのは気にしない、気にしない。

うっふふふふ、忙しくなるだろうなあ。ずーいぶんと、溜まっていたからねえ。

第二十七話 疑惑（後書き）

こんなにもあからさまに怪しい人物はせっちゃん放っておかないよね

と、思って書いたが書きたい事を全部書いていたら原作がいつまでも始まらない

後一話位に抑えよう

第二十八話 狂乱の研究室（前書き）

おうふ、リアルが忙しくて書けないで居たらいつの間にか一ヶ月…
待っていてくださった方、誠に申し訳ありませんorz

とりあえずこれで原作開始前の話は終わりにしておきたいところ

第二十八話 狂乱の研究室

コンコン

「ハカセ、失礼します。」

「入るぞ、ハカセ。」

「お邪魔するよ。」

茶々丸が定期点検を受けに行くというので同行している。

葉加瀬聡美には茶々丸の開発者という事で元々興味はあったのだけど、最近の微妙な忙しさからなかなか接点を作る機会が得られなかった為、彼女に会う口実としてこれ幸いと付いて行く事にしたのだ。

定期点検と言っても、基本的には起動してから日の浅い茶々丸の稼動状況やパーツの損耗度のチェックが主である。現状では本格的なメンテナンスはまだ必要無いそうだ。

「ん?」

…うん、これはまた酷く絵に描いたようなマッドサイエンティスト、と言うよりはむしろ悪の科学者といった格好だね。

「あれー？ラトウーニさん、どうしたんですかー？」

「ああ、私が無理を言って付いて来させてもらったのさ。少し、見学させてもらっても良いかな？」

「良いですよー。」

ふむ、駆動部の構造はこうなっていたのか。これは新たなシリーズの開発の参考にできるかも知れないね。

ほう、フレームも素晴らしいね。これまでのPSパワードスーツタイプだけでは再現できなかった機体もかなり再現できるかもしれない。

うずうず

うずうず

うずうず

うずうず

……もう、我慢できない。

「ハカセ、ロボ研の会長は誰で、どこに居るんだ？」

「それなら山口さんですよー。今の時間なら多分隣の研究室に居ると思います。」

「そうか、ありがとう。」

意中の人物の居所を聞くと、疾風^{かぜ}の如く駆け出し葉加瀬の研究室を去る。

「それでは、失礼するよ!!！」

「あっ、姉さま何処にっ！」

後ろでエヴァが何事か叫んでいた様だが、今の私の耳には届かない。何故ならば、ロマンが私を待っているから！

「頼もう!!！山口氏は居るか!？」

唐突に現れ部長を呼び出す私に、何らかの作業に没頭している幾人かを除いて、研究室内のほぼ全員が不審な人物を見るような視線を向ける。不審なのは事実なので特に気にしない。

「山口は僕だけど、何の用かな、お嬢さん？」

進み出てきた山口氏は良くも悪くも平凡な顔立ちの青年だった。興奮した私の不躰な呼び出しにも嫌な顔一つしないで丁寧に対応してくれる事から彼の人の良さが窺える。

「私をロボ研に所属させて欲しい！」

「ちょ、ちょっと、それは難しい、かなあ。」

：当たり前と言えば、当たり前か。いきなり飛び込んで来て何の説明もせずに入れてくれ、ではね。

だが、この程度ではまだ引き下がるわけには行かないね。

話しはじめてからもう一時間以上が経過している。

それでも私は諦めることなく粘り強く、と言うよりはしつこく交渉を続けていたが、山口氏の口からOKの言葉は出ない。彼の笑顔も若干引きつってきている。

ほう、と一息ついて言葉を切る。

おそらく今のままで交渉を続けたところで進展など望むべくも無

いだろう事は分かりきっている。

ならば、もういっそ恥も外聞も無く思いのたけをぶつけてしまふべきなのだろうと判断した。どうせ駄目なら悔いの無いようにしたいからね。

少し俯いて、在りし日のスパロボを思い出す。頭の中をぐるぐると回るその記憶に胸が熱くなるのを感じる。

これまで熱弁をふるっていた私が急に黙って、俯いてしまったのをいぶかしんだ山口氏が顔を覗き込んできた。

その彼の目を見据える様にきつと顔を上げ、言い放つ。

「頼む、何でもするから！資金でも素材でも、何だろうと提供する！金持ちの道楽と嗤ってくれても構わない！私は！ロボットが、大好きなんだ！」

この胸に滾る情熱は全て込めた。それでも駄目だというのなら、素直に身を引こう。表からは、ね。

ごくり、と喉を鳴らして彼の返答を待つ。

「……分かった。君の気持ちは、良く分かった。」

これは、もしかしたら行ける、か？

「僕も、ロボへの熱い想いを抱いてこの戸を叩いたんだ！君の気持ちは痛いほど良く分かる！」

熱の込もった視線で見つめ合う。

「「同士よ！！」」

僅かそれだけの事でも私達は魂から共鳴し合い、がっしりと握手を交わした。

「我々は君を歓迎する！君は今日、たった今この時から、我等ロボット研究会の一員だ！」

大声でそう宣言する代表の後ろからは、またかよ、いつもの事だろう、などと他のメンバーが話す声が聞こえた。代表の同士として参加を許された私が言うのも何だが、付属中学の学生とは言えこうも簡単に外部の人間を受け入れるのはどうかと思うよ。

まあ、私には関係の無い事だから口に出すことは無いけどね。

「ああ、そうだ。さっき言っていた資金援助その他、一応本気ではあるよ。ポケットマネーからだから限度はあるけどね。だって、これだけのモノを作れる人たちが解決しようのある問題で研究が止まってしまう事になったら、つまらないじゃないか。」

たぶん冗談か、精々子供のいう事と捉えて信じていないであろう事について、一応の補足を加えておく。

特に無機素材だけならば、限度など存在しない。何しろ、鉱物生成でいくらでも生み出すことができるのだから。

まあ、さすがに加減はするつもりだけどね。

ふむ、もうこんな時間か…。

山口氏もなかなか話せる物だな。まさか私と同じ人型巨大ロボットへの想いからその道に踏み出したのだとはね。

だが、彼との話の中から判明した事で一つ残念な事があった。それはこの世界にはスパロボが存在していない、という事だ。

正確に言えば、様々なロボットの共演するSRPGが存在していないという事らしい。格闘ゲームやアクション、シューティングなどは有るのにSRPGだけが無い。何故だかは知らないが、そういうものののだろうか。

私の造る機体について疑いの眼差しが向けられる可能性が無いというのは喜ぶべきなのだろうが、同時に酷くがっかりした気持ちにもなった。

だけど、その分未だ再現できていない機体を作ろうというモチベーションが湧いてきた。どうせ明日からは休みだから、一ヶ月分以上研究室に籠っても問題は無いしね。

さて、そろそろ家に帰ろうかな。

：何か忘れているような気がするけど、忘れてるのなら大変な事になるような事ではないよね。

家に帰って考え事をしていると、エヴァが怒り心頭な様子で戻ってきた。

「姉さま！突然出て行っただけだと思っただけの間に家に戻っているなんて酷いじゃないか！姉さまの事、ずっと待っていたんだぞ！」

ああ、そういえば元々茶々丸の定期点検に行ってたんだったね。エヴァと茶々丸に付いて行く形で。

「ははは、ゴメンゴメン。忘れていたわけじゃないんだけど、ちょっと、ね。」

「…視線を逸らしてる！本当は忘れていたんだろう！」

完璧にばれてる。

「……………ごめん。」

「……………次は無いからな。」

茶々丸は私がエヴァに怒られている間に夕食の支度をしに行ってしまったようだった。

ふと、アリアドネー建国からの日々を思い返してみる。

「ねえ、エヴァ。」

「何だ、姉さま。」

こんな風に何も無い(?)、平穏な日常なんて、何百年ぶりだろうか。

「静かな夜だね。何もない、ね。」
「そうだな……。」

願わくば、今しばらくはこんな日々が続いて欲しいものだね。

第二十八話 狂乱の研究室（後書き）

今回は現状の主人公機の規格では再現できそうに無い機体のためのお話

なお、ロボ研会長の名前は仮名なので今後変更あるかも
まあ、今後出す予定も無いけど

後は原作開始少し前くらいまでキンクリでもしようか

外伝 弐 或るジャーナリストの手記（前書き）

今回は結構どうでもいい

読み飛ばしてもらっても一向に構わないお話DEATH

外伝 式 或るジャーナリストの手記

旧世界日本のある山の中、その奥にひっそりと建つ小さな小屋に目的の人物は居た。

今、私の目の前には、腰までの伸ばした大地を思わせるような茶色の髪を野の草で染め抜いた薄緑のローブに身を包んだ女性が居る。彼女の名はディア・マクダウェル。およそ魔法に関わる者で彼女を知らぬ者は無く、ある者は彼女の存在に恐れおののき、またある者は彼女を敬い崇拝に近い感情すら抱く。

魔法世界に名を轟かせる学術都市国家アリアドネーの創始者にして、かの大战を終結させた英雄『紅き翼』の導き手である。そして、かつて私の級友でもあった女性。

「……よくもまあ、私を見つけることができたものだね。」

訪問の理由を告げる。

「ふむ…、アリアドネーの歴史について、ねえ。それならば確かに今この世界には、私以上にそれを知っている者は存在していないだろうね。」

「初めから話すのじゃあかなり長くなるだろうから、お茶でも淹れて来るとするよ。」

彼女が席を立ち棚からティーセットを取り出し、間も無くポットで湯を沸かす音が聞こえてきた。

お世辞にも手際がいいと言えないその様子から、彼女が普段そういったことをあまりしていない事が窺える。

しかしながらその道具の性能故か手際の悪さに反して作業の終わりは意外なほど早かった。

「あまり良い物ではないが、我慢してくれよ。」

目の前に置かれた茶器はシンプルな意匠の、実用性のみを重視した物だった。中に入っている紅茶もまた彼女の言葉通り、特に変わったところの無いごく普通の物だ。

「…うん。これならまあ、大丈夫だね。茶々丸の苦労も報われる、かな？」

彼女の口から出た懐かしい名前に、思わずその所在を尋ねる。

「茶々丸の、と言うより茶々丸達の正確な居場所は分からないよ。今も時々連絡は有るけど、居場所なんて話さないからね。」

その答えを聞いた私の残念そうな表情を見て取った彼女はさらに続ける。

「まあ、昨日も話したから無事なのは間違いないよ。大体、今の彼女達なら何が有っても大概はどうって事はないだろうけどね。」

それもそうだろうと納得して、私は話を本題に戻す事にした。

「ああ、そうだったね。それじゃあ、まずはアリアドネーの原型になった町を造り始めたところからにしよう。」

根本的な疑問になるが、そもそも何故彼女は町などを造ろうとしたのだろうか。彼女の能力を持ってすれば如何様にでも生きていく事は可能だったはずだ。

「街造りの理由、か。：すまないけど、それは勘弁してくれないかな。」

私の何気ない疑問に彼女は、苦しそうな、寂しそうな、悲しそうな表情を浮かべていた。

それを見た私はそれ以上深く追究する気には、なれなかった。

「：さて、気を取り直して、始めようか。今からもう600年以上昔になる、現在のアリアドネーが在る場所に、私は小さな町を造ったんだ。初めはその町を交易都市にでもしようかと思っていたんだけど、100年もする頃には何故か学術都市と呼ばれるようになっていた。後にして思えば心当たりは幾らでもある。無償の学校に加えて国を追われた学者・研究者の受け入れなんてしていれば、普通に考えたら交易都市になんてなる訳も無いね。まあ、私が趣味でやっていた研究―今の魔法工学にあたる物の為に研究所を作っていたのが決めてだったのだとは思うけどね。」

失敗であれだけの強国を造ったのだとも取れる話に呆れる私を尻目に、彼女はさらに続ける。

「後は、まあそれからあの大战までは多少の争い事はあっても概ね平和な月日が流れていた、と言った感じで特に変わった事はなかったね。：ここままで何か聞きたいことはあるかな？」

彼女の問いに、私はおそらく魔法世界の少くない人間が疑問に思っているであろうことを聞くことにした。

MS族とは一体何なのか。

今でこそ魔法世界全域で見られる種族ではあるが、古い文献を紐解くとその起源はアリアドネーからの移民であったという。さらにそれよりも古い文献にはその存在さえも確認できない。つまり、MS族はアリアドネーと共に世に現れたという事になる。

「ふむ、そういえば建国時に居た人間以外は知らなかったか。まあ、もう公表してしまっても別に問題は無いだろうし、良いかな。」

思わせぶりな彼女の口調は、何となく楽しんでいる様な響きを含んでいるように感じた。

「結論から言ってしまうえば、彼らMS族は私の産み出した生命なんだよ。容姿については、まあほとんど私の趣味だね。」

……以前から非常識だとは思っていたが、ここまでとは想像もできなかった。

彼女が言っている事を認めてしまえば自分の中の何かが壊れてしまいそうな気がして、何も言えず黙り込んでしまう。

「信じられない、って顔だね。まあ、信じてくれなくても構わないさ。それでも彼らは存在するのに変わりは無いのだから、ね。」

どのくらいの時間が経ったのだろうか、現実逃避から我に返ると目の前のお茶はすっかり冷めてしまっていた。

「ん、どうやら戻ってきたみたいだね。それじゃあ、そろそろ続きを話そう。ええと、どこまで話したんだったかな。」

大戦が始まる前までは聞いたと告げる。

「そうだったね。それじゃあ大戦の話を始めよう。君もかの大戦については知っているだろう。その大戦においてアリアドネーは当初から中立を表明していたのだが、連合も帝国もそれが気に食わなかったみたいでたびたび軍隊を送り込んできたんだ。私も初めから研究の邪魔だと思っていたし、何より『完全なる世界』の介入の情報を掴んでいたからね。色々と停戦の為に手を回していたのさ。そこから先は一般の歴史にも語られて居る通りアリカ王女や『紅き翼』に助力して半年程かけて停戦にこぎつけ、『完全なる世界』との決戦と言う訳さ。」

どうやらこの時代まで来ると一般に語られている歴史と大きな差異はあまり無いらしい。そういえば、『紅き翼』のメンバーはアリアドネーに行く前後で戦闘スタイルがあきらかに変化していたと聞くが何があったのだろうか。

「ああ、そのことか。簡単な事さ。彼らには当時、アリアドネーの理念に従って何らかの技術や知識を修めてもらっていたからね。タカミチ、クルトのちびっ子（当時）コンビは小等部に編入。ナギの奴は魔力の、ラカンは気の運用を基礎からやり直しただけ。他にもゼクトは回復魔法の攻撃への転用を、詠春も魔法剣なんてのを編み出してたね。まあ、その他のメンバーは研究や諜報員の育成を手伝ってもらっていたんだけどね。」

なるほど、そういう事か。

しかし、回復魔法での攻撃とはなんだろうか。魔法剣とはかつて桜咲さんが使っていた剣技のことなのだろうが、神鳴流との明確な違いは知らない。

「ふむ、その二つは少々特殊といえば特殊だね。回復魔法による攻撃はまだ簡単さ。単純に過剰に回復しているだけだからね。基本の回復魔法とは自己治癒能力の活性化による物。故に通常はリミッターがかかっていて完全に回復したところで効果が終わるようになっている。しかし、そのリミッターを解除すればどうなるか。答えは、細胞の異常増殖による体組織の崩壊。全く、えぐい攻撃だね。」

…それは、確かにもの凄くえぐい。

「厄介なのは魔法剣の方だ。これは気で強化した剣を反発を抑えつつ魔力で包み込んでおいて、敵に叩きつける瞬間に魔力と気の反発により気を放出する事で加速、同時に剣は魔力での強化に切り替えて魔法的性質の付加を行う事で爆発的な威力を得る技だね。原理も面倒、難度も高い技さ。その分威力は高いが、失敗すれば暴発した気が周囲を巻き込んで炸裂する。そのためまともに習得するだけでも最低一年、実戦投入できるまでにどれほどの習熟が必要になるのか分からない技だからね。こちらはこちらで非常に厄介な技と言えるね。」

ふむ、私には話を聞くだけではその難度の程を理解しきれないが、彼女がそう言うのなら確かにそれだけ大変な技なのだろうと思う。しかし、それならばまた一つの疑問が浮かぶ。

かのサムライマスター近衛（旧姓青山）詠春はアリアドネーでの僅か半年程の滞在でそれだけの技を完成させたという事になる。それは才能と言う言葉で片付けるにはあまりにも異常な事なのではないか、と。

「…それは、この目で見ていた私自身が信じられなかったのだからしょうがないよ。何しろその原理だって実際に実行可能かどうか度外視して作ったんだからね。むしろ、本来はその修練の過程で得られる気と魔力の精密制御能力の方が本命だったくらいさ。……まあ、あれだけの才気を持ち主が寝る間も惜しんで修練に励んでいたら不思議ではない、と言えるの…かな？」

まあ、異常な才能の持主が異常な鍛錬を自らに課した末の結果、という事で納得しておいた方が無難、なのだろうか。

「ふむ、後は話せそうな事と言えば『完全なる世界』との決戦までくらいだけど、普通に話すと公表されているのほとんど変わらないし、舞台裏のことでも話そうか？」

その時期の情報なら自身でも公表されているものは掴んでいる。当事者が大差ないと言っている以上、その話を普通に聞く事に意味は無いのだろうと判断する。

彼女は信用できると信じている。

私は軽くうなずいて意思を示すと、話の続きを促した。

「そうだね、それじゃあまずは決戦の最後、広域魔力減衰現象を消し去る為に開発した物の話をしよう。実は当時かなり早い段階での現象については調べがついてたんだけど、用意してあった対策―実際に使ったものだね、それが少々出力不足であまりに現象が拡大

すると手に負えなくなってしまうことも同時に分かっていたんだ。その兵器の仕様上チャージに時間がかかるのは避けられないし、かと言ってチャージして待機していることもできなかったんだよね。まあ、それで現象の拡大を阻害する為の手段を模索していたら重力による押さえ込みが有効だった事が分かってね。実を言うと『紅き翼』を引き込んだのってアルビレオIIイマの重力魔法が目的の半分以上だったんだよ。さっき言ってた研究の手伝いというのもこのことさ。」

ふむ、これはなかなか興味深い。あのアリアドネーが専門分野であるはずの研究開発で外部の者に協力を仰がなければならなかったとは。

「まあ、それはしょうがないよ。基本的にアリアドネーの、私を含む全ての魔法使いの誰もが重力魔法が全く使えなかったんだからね。」

さて、ここまでで聞きたいことは大体聞き終えた。

残るは大戦終結後の時期だが、公式には彼女はその時期には意識不明の状態であった筈なので、期待はできないだろう。

「うん、確かに戦後20年くらいはずっと寝てたから、その時期の情報は書類の上のデータや報告書でしか知らないね。それだったら私なんかよりもセラスあたりに聞くべきだね。」

私はここに至るまでに既に一度正面からアリアドネーへの取材を試みている。しかし、その結果は完膚無きまでの門前払いである。一時は非合法な手段も考えないでもなかったが、そのあまりにも強固な警備体制を思い出してすぐに諦めた。

そのことを彼女に告げると彼女はにやりと笑った。

「なるほど、それで私の所に来たって訳か。なら、今度はこれを持って行くといい。機密に関わらない範囲でなら大概は話してもらえ
る筈だよ。」

彼女はそう言って何も無い空間に切れ目を入れると手を差し入れた。そして抜き出した手に掴まれていたのは小さな板だった。

「これは、まあ言ってみれば紹介状みたいな物だね。私の名義で発行してあるから移動も一般区画までなら基本フリーパスにしてもらえるよ。」

ずいぶんとすごい物の様だが、こんなに簡単に渡してしまっているのだろうか。

「ああ、それなら問題は無いよ。使用は一度限り、滞在中は肌身離さず持っていることを強制される発信機兼用の物だから。それに、セラスにちよつとした伝言も頼みたいしね。」

伝言とはなんだろうか。

「『私は悠々自適の生活を満喫しているから心配は要らない。セラスも無理はしないように。あと、そのうち会いに行くからよろしく。』とね。」

了解の意を伝えると、彼女は切れ目を閉じた。後には何も残らず、その痕跡さえも見当たらない。

「さて、もう行くのかな？」

頷いて、席を立つ。

「そう、それじゃあ元気でね。」

私は礼の言葉を述べて彼女の家を出た。

外に出ると、夕焼けが景色を赤く染めていた。

今日はもう移動はできそうに無い。近くの町で宿を取って、魔法世界へ行くのは明日以降になるだろう。

外伝 弐 或るジャーナリストの手記（後書き）

なんというかほとんど魔法剣の説明の為だけに作った気がする
手記じゃあない、なんて苦情は知らん

話が飛びすぎ？細けえこたぁどおでもいいんだぜ！

現実逃避楽しいです！

第二十九話 Time to come—時は来たれり（前書き）

イヤッハー！

原作、原作ウ！

第二十九話 Time to come―時は来たり

にやにや。

今の私の顔にはそう形容する他無い表情が浮かんでいるに違いない。

長く、私が麻帆良へ来てから約一年半に渡って研究開発を続けていた作品が先ほどついに完成した。当然、魔法球を使用していたので実際にはその十倍近い時間を費やしているのだから、無理も無い。完成に伴って発生した大爆発によって第一実験区画の半分は壊滅してしまっただが、完成の喜びはそれを遥かに上回る。

「なななな何事ですか、ディアさん!？」

「ん、さよか。」

相坂さよ、彼女の身体の製作はあの後すぐに始めて予想したよりも早くに完成していた。学校については都合良く籍が抜かれることなく残っていた為、彼女の意味を汲む形で復学扱いで通う事になった。

ちなみに、彼女には身体の製作の代償として当初企んでいた通りに私の助手を住み込みで行ってもらう事として引き込むと共に、住居問題もついでに解決した。

「ついに完成したのさ。人類の至宝、超高エネルギー物質トロニウムがね。」

「そーなんですかー。……ってこの惨状はどうするんですかっ!」

割とどうでもいいことだが、結構尻に敷かれていると思う。

「はっはっはっ、それなら問題無いよ。実験区画には自己修復機能を付けてあるから、明日になれば何事も無かったみたいに元通りさ。」

「そういう問題じゃないと思うんですけど……。」

破壊された部分は完全に修復されるのだから別に問題は無いと思うんだがね。

「それよりも、トロニウムだよ。トロニウム。」

「あのー、ところでトロニウムって具体的にはどういう物なんですか？」

「ふっ、良くぞ聞いてくれた！説明しよう。トロニウムとは莫大なエネルギーを内包する上、周囲に漂う魔力を吸収する事で放出したエネルギーを常に補充し続ける性質を持つ高レベルの魔法石なのだ。その内包するエネルギーの全てを解放した場合、小指の先程の大きさの物でさえ半径20kmを更地にするほどの威力を発揮する。ちなみに、今回私が作ったのは合わせるとピンポン玉位の大きさになる。」

まあ、一つ一つの大きさは小指の先どころか米粒ほどしかないんだけどね。

「え、えーと、それはもしかしなくてもとんでもなく危険なんじゃないでしょうか？」

「大丈夫だ、問題無い。基本的には私以外の手の届かない場所に保管するし、きちんと制御すれば暴走の危険はほとんど無い………はずだ。」

「全然安心できませんっ！」

ううむ、まずいな。

このまま行くとエンドレス説教コース行きは間違いない。何とかして話を変えなくては…。

「と、ところで、さよに合わせて調整しておいた試作品のテストは済んだか？」

「え、ああ、それならさつき終わりました。念動フィールドと念動収束式^{レーザー}Lキャノンは問題なく使えましたが、ストライクシールドはちょっと反応が鈍かったですね。威力はどれも設計通りの数値でしたので、たぶん受信機付近の問題だと思います。」

よし、何とか話題のすり替えに成功！。

「…トロニウムについてはこれからじっくりと、お話させてくださいね。」

駄目だったか…。

研究用魔法球の実験区画、その第二。

そこでは超闘士と凶鳥が戦いを繰り返している。既に辺りは一面焦土と化していて、その光景こそが戦いの激しさを雄弁に物語っている。

私はそこへ足を踏み入れ、その両者に声をかける。

「アスナ、刹那、調子はどうか？」

声をかけられた二人は共に動きを止めアスナはスーツを脱ぎ、刹那は機体から降りてくる。

思うように出力が伸びず性能が頭打ちになっていたPS^{バードスーツ}、その殻を打ち破るべく開発された新世代PS^{バードスーツ}、名をパーソナルトルーパーと言う。

その第一号機、PT・001ヒュッケバイン。

あまりの高出力故に既存の機体では搭載する事のできなかったブラックホールエンジンを、私のアーティファクトの力を用いて生成した圧倒的な強度と耐久を誇る特殊金属製で機体を構成する事で搭載する事を可能とした。

さらに、その有り余る出力とそれ自体にも組み込まれたBHエンジン^{ブラックホール}を直結させて放つブラックホールキャノンは、通常の重力魔法のように一方向から押しつぶすのではなく、全周囲からの圧力により対象を消滅させる兵器である。

既存のPSでは（主に私自身のこだわりとかロマンの為に）再現する事ができずに居た機体を作る為の機体として開発した特機。

その第一号機、グルンガスト壱式。

機体を大型化して『装着する』のではなく『搭乗する』ことにしたことで、これまでは射出後に生身の腕が露出していたブーストナックルや完全に不可能だった変形を問題無く再現する事が可能となっている。

ちなみに操縦には魔法的に再現したダイレクト・モーション・リンクを用いる事で従来の機体群と遜色の無い操作性を実現している。また、大型化に伴って出力や装甲の強化が容易に行えるようにな

り、出力、装甲共にPSとは比べ物にならないほど向上している。

さすがにヒュッケバインは同等の出力ではあるものの装甲には圧倒的な差がある。最も、その分機動性が劣るという欠点が存在する為、PTとは状況に応じて使い分けられるべきだろう。

なお、グルンガストの開発に当たってロボ研で私がこれまでの間に僅かなりとも習得できたフレーム、間接部の技術が大いに役立ったのは言うまでも無い。ちなみに制御系についてはきっぱりさっぱり何一つ解らなかった……。しょうがないじゃないか、前世だって理系でもなんでもない文系まっしぐらだったんだから。

「「疲れ（まし）た……。」」

二人の顔にはこれでもかといわんばかりの疲労の色が浮かんでいる。戦っていた時間から考えると、明らかに異常な疲れ様だ。

「他には何かある？」

「…他には特に問題は無い。機動性が高すぎてちょっと反応が間に合わなかったくらい。」

「私は、あのDMLダイレクト・モーション・リンクというのになれるのに少し時間がかかってしまいました。」

「うん、どうやら性能には大した問題は無かったみたいだね。後は細かい調整をするだけだから今日はもう上がっていいよ。」

「ん、分かった。」

「分かりました、それではお先に失礼します。」

こちらのほうも問題は無し、という事でいいだろう。検証してみなければ確かな事は言えないが、二人の状態と機体のスペックを踏まえるに魔力や気の消耗から来る疲労だろうと考えられる。

元々今回のテストはPTと特機の将来的な量産化のための意味合いが強い。あの二機はどうせ私の専用機となる予定なので、魔力を

湯水の如く垂れ流す仕様だろうが問題は無い。

ぐると辺りを見回してみると、二人の戦闘テストによって破壊された演習用の建造物や抉り取られた地面が嫌でも目に入ってくる。
：しかし、改めて見るとすごいな。実際、こっちの方がトロニウムなんかよりもよっぽど怖いと思うんだが、さよはなんでこっちはスルーしているんだろうか。その全てを開発した私が言うのも何だが、実に理不尽だ。

……ふう、もうこんな時間か。

外では直に夕食の時間だね。今日は確かカレーにするって言うってたかな。

調整も一区切りつきそうだから、私もそろそろ上がるかしょうかな。今日は朝から何日分も籠っていたし、いい加減顔くらい見せておかないとね。

ノックの音と同時に、誰かが部屋に入ってくる。

「姉さま、夕食くらいには出てきてくれ……。」

「エヴァか。私もそう思って丁度切り上げるところだったんだよ。」

「そうか、それじゃあ片付けは手伝うぞ。」

「うん、ありがとう。終わったら一緒に行こうか。」

「ああ。」

……カレーが夕食に出た翌日の朝には必ず、前日の残り物のカレーが出てくると相場が決まっている。理由なんて関係なく、決まっているのだが。

「やっぱり朝からカレーって、重いよねえ。」

私自身飲食を必ずしも必要としない身体のせいかな、どうにも気の進まない食事というのが人より多い気がする。

「ああ、そういえば姉さま。さっきセラスから連絡が来ていたぞ。」
「分かった、後でこちらから連絡しておくよ。たぶんいつもの定期連絡と、後は各研究所の報告だろう。前回、ゲシュペンストの強化計画が出ていたからね。」

アリアドネーとは月に一度、こうして定期的に連絡を取っている。私が目覚めている事は既にセラスやナイト達は勿論、各研究所の所長までが知るところとなっていて、それ以外の皆も薄々は気付いているということらしい。今の生活については私自身で期限を決めている事、そして何より建国以来初めての私個人のわがまま、という事で認められている。

定期連絡も本当ならここからセラスたちに指示を送る為に始めたのだが、元々行政はセラスに任せているので指示する事もあまり無く、結局セラスとは雑談するくらいで不定期で来る研究所の報告が

本命みたいになってしまっている。

「まあ、とりあえずそろそろ学校に行く支度をしようか。遅刻してもつまらないからね。」

「そうだな。」

「ん。」

「帰ったら話がありますからね、ディアさん？」

茶々丸なんかは言わなくてもいつの間にか支度が済んでいるのだけど、何か一人だけ台詞がおかしいような。と言うかさよさん、昨日あれだけ説教しておいてまだ足りないのしょうか？

何事も無く過ぎていく日常。

それが壊れるのは思いのほか早いものだった。

学校では、いつもと変わらない、今では当たり前を感じるようになった時間が流れていた。

もうしばらくはこの平穏を楽しむことができると思っていた。学園長からの呼び出しが来るまでは、だが。

昼休み、タカミチから放課後、学園長室に行くように伝えられた。そのときは、またいつもの警備の仕事についてだろうと思っていた。

放課後、学園長から聞かされたのは私にとって厄介事以外の何者でもなかった。

「ふむ、もう一度、聞かせてもらえないか？」

「…明日、ナギの息子ネギ・スプリングフィールドが教育実習生としてこの麻帆良を訪れる、と言ったのじゃよ。」

まったく、私には平穩なんて似合わないとも言いたいのだろうか、ね。

第二十九話 Time to come―時は来たれり（後書き）

うむ、ついに原作開始が目に見える位置に来了。
長かったぜえ。

とまあ、こんな感じでテンションがおかしい今日この頃。
とりあえず今後は少なくとも二週に一度は投下していこうと思っ
とります。さすがにこんなにランダムなペースじゃイカンと思いま
して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1737q/>

魔法世界の鋼の救世主《メシア》（再）

2011年11月4日17時57分発行